

図167 换修瓦—平瓦（5）（1/4）

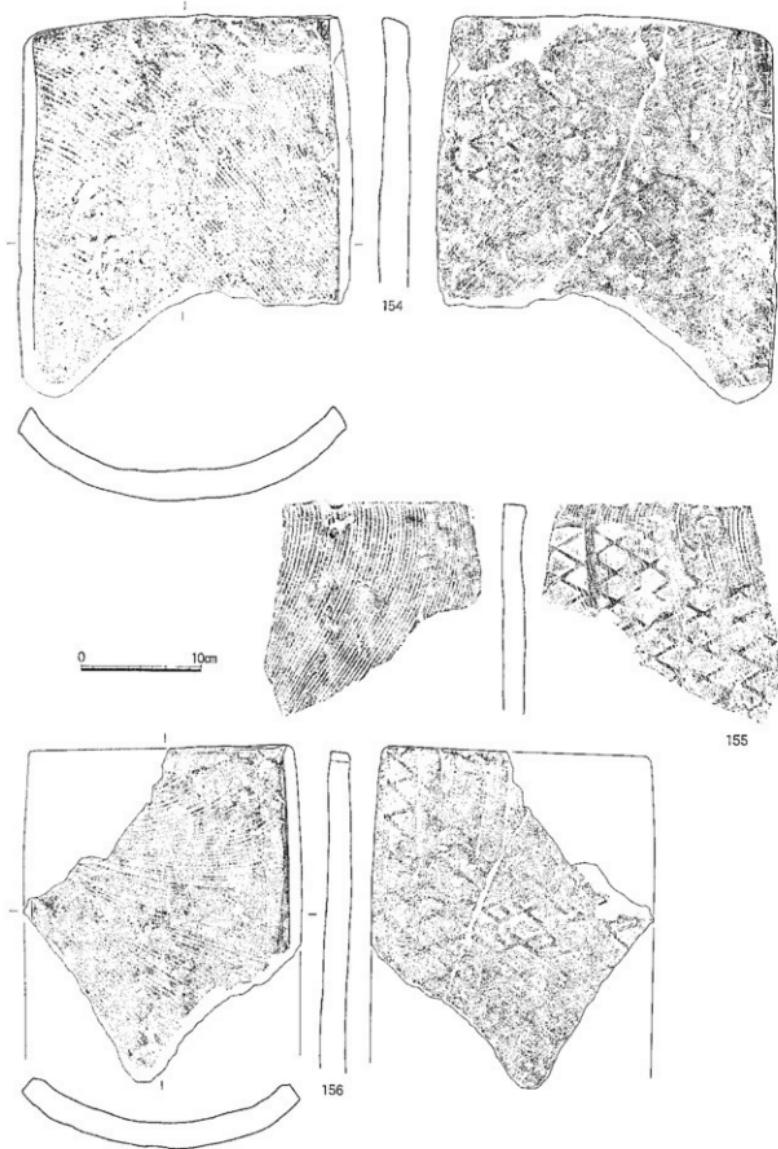


図168 補修瓦—平瓦（6）（1/4）

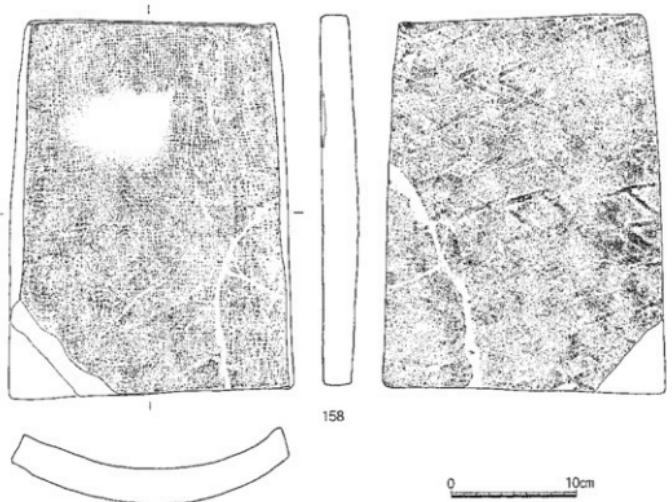
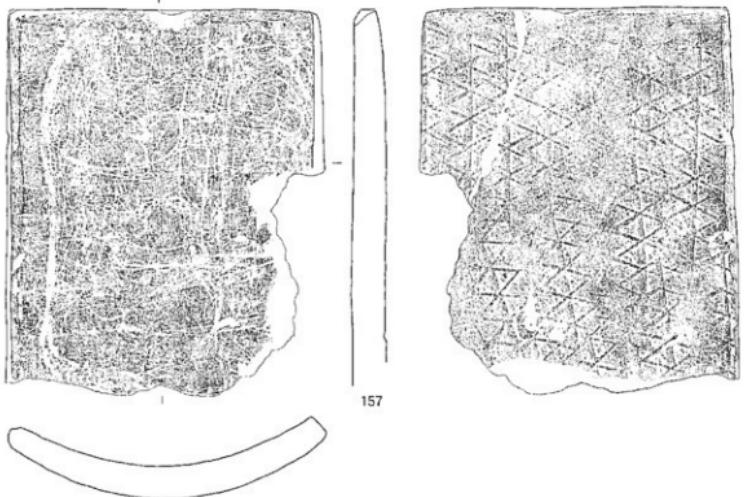


図169 補修瓦－平瓦（7）（1/4）

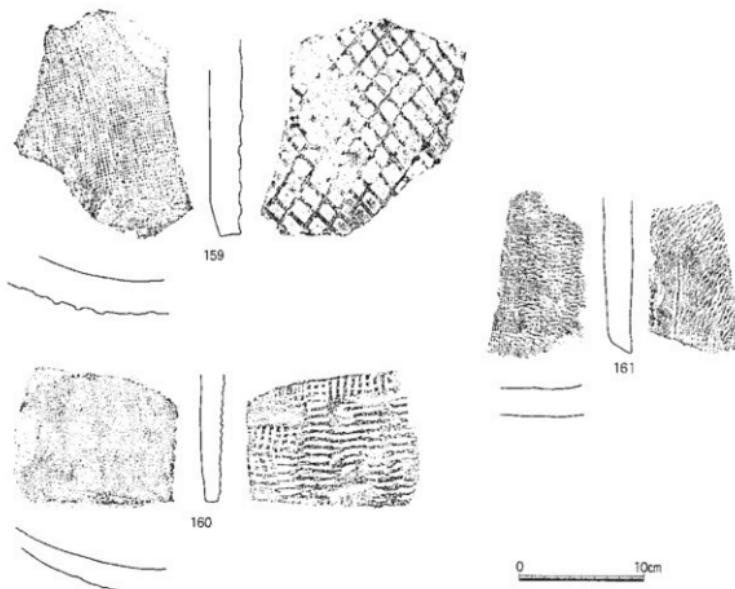


図170 補修瓦－平瓦（8）（1/4）

とみられる。

いずれも灰色に発色し、軽量な焼成である点は共通するが、154は狭端幅26.3cmと広く、156は推定狭端幅22.5cmと狭い点が異なる。

以下は類別を行っていない資料である。

157・158は北面回廊東部の石列1平瓦列に用いられていたものである。この2点に加えて半裁した軒平瓦1式（17）が用いられていたが、この基壇外装は築造当初のものではなく、平安時代の補修に際して設置されたものとみてよい。

157は長さ16.0cm程度の叩き板を用いているようで、狭端側、中程と分けて叩いている。叩きの横方向の間隔は3.0～3.5cmを基本とする。凹面には布目が見られるが、布の体をなさないまでに痛んだ状態が転写されている。焼成は良く暗緑灰色で堅敏に焼き上がっている。狭端幅24.6cm、残存長さ31.6cmを測る。

158は長軸55mmときわめて大きな格子叩きが施される。単位は明瞭でないが、長い叩き板を用いた後に狭端側にさらに叩きを加えているようである。凹面には糸の間隔が3mm前後ときわめて粗い布目が広がる。軟質の焼成であり、狭端側半分は炭素を吸着して灰黒色を呈し、残りの側は白色を呈する。狭端幅19.7cm、推定後端幅22.9cm、長さ30.4cmと小ぶりである。

159は西面回廊調査区からの出土であるが、暗渠に用いられていたものであるため使用位置は不明

である。長さ20mmの深い格子をもつ。叩きの単位はとらえにくいか重複が多く、長い叩きではないとみられる。格子の上に凹面のそれと同様の布目が陰陽反転の状態で写っており、先に完成したものにもたせかけて乾燥したとみられる。凹面には粗い布目が見られる。瓦の軸線に対し布目はやや斜めになっている。砂粒の少ない胎土で灰白色を呈する。堅緻な焼成である。

160も159と同じく暗渠出土である。薄手の平瓦で端部にむかって薄くなり、11mmの厚さとなる。広く深い平行叩きを横方向に加えたのち、縦方向に叩いている。凹面は細かい布目であるが平瓦174と同様の微細な凹凸をもつ。暗灰色で堅緻な焼成である。

161は中門調査区の池堆積層から出土した。板状の小破片である。拓本左側では横方向の縄目叩きのち布目がつく。そしてこの調整はこの面から続く端部斜面においても同様に見られる。一方、右側拓本の面では斜め方向の縄目叩きのちナデが加えられる。破片左側から2.3cmの位置には縦方向に細く粘土が付着する。特異な調整であり、特殊な器種の可能性もあるが、小片のため推定はむずかしい。灰色～灰白色を呈する。砂粒は少なく胎土は薄層をなす。

以上、凸面に格子叩きを施す平瓦のうち主要なものを示した。

それぞれの年代を推定することはむずかしいが、a・bについては創建期である8世紀代と考える。また、長い叩き板を用いるf・gは平安時代中期以降に位置付けられるが、これらはいずれも赤色を呈する焼成であり、同じ色調・焼成の軒平瓦5式とセットになる可能性が考えられ、それを妥当とすれば平安時代中期になるとみられる。これ以外の型式は年代の特定がむずかしいが、その多くが平安時代後期に属する可能性があり、平瓦のバリエーションの多さは軒平瓦の型式数の多さとおおむね対応すると考える。

#### 鬼瓦（図171、図版45）

162～165は共通した調整・製作手法の鬼瓦破片である。162～164は明灰色～明灰黄色を呈しやや軟質の焼成で、同一個体の可能性もある。165は灰色でやや良好な焼成である。板状の粘土板に粘土塊を貼り付けて鬼面を表現しているとみられるが、小片となっているため全形の推定はむずかしい。162は粘土を貼り合わせて高い突出を形成するよう角の基部の可能性がある。163は破片左側に透かし孔、右側には球形の突起があり鼻から頬にかけてかと思われる。164・165は右下側の破片で破片左側に弧状の割り込みを設ける。両者で表現は異なり164では左上に向く牙と突起状の表現をもつて対し、165は縦方向の突起が設けられている。裏面には離れ砂が見られ、横方向の細かいハケメが施される。

162・163が金堂、164が講堂調査区南側、165が南門中門調査区池北部造成土からの出土であり、金堂に伴う可能性が強い。時期の判断がむずかしいが、平安時代後期の可能性を考えておく。鬼瓦210・211とは焼成・製作手法とも異なるが、後述の金堂上層瓦だまりに伴う可能性も考えられる。

#### （7）南門補修瓦

南門基壇北側に形成された瓦だまりからまとまって出土しており、軒丸瓦20式・軒平瓦25式・平瓦で構成される。瀬戸内市長船町所在の油杉窯跡で焼成されたことが判明している。

軒丸瓦20式は南門調査区瓦だまりから11片が出土しており、図示した完形の瓦当部を含む。このほか講堂調査区からも6片が出土している。講堂調査区出土のものは小片で包含層あるいは近世の溝等からの出土である。軒平瓦25式も南門調査区瓦だまりに集中しており、他に講堂調査区、金堂調査

区から少量出土している。金堂調査区出土のものは講堂調査区の流入とみることができる。

こうした出土のあり方から、これらは南門と講堂の補修に用いられたものとみてよい。

暗灰色～灰白色で、須恵質に焼き上がったものとやや軟質のものとが半ばする。0.5mm大の砂粒を少量、まれに小礫を含む。胎土は白色・暗灰色粘土の薄層が交互に重なる（図版44-3）。

#### 軒丸瓦20式（図172・175、図版38-1）

166～168・173。[第VII型式]。瓦当径20.0～20.5cmを測る大型の軒丸瓦である。

單弁5弁蓮華文軒丸瓦であるが蓮弁の割り付けはかなり不揃いである。中房は径5.8cmと大きく蓮

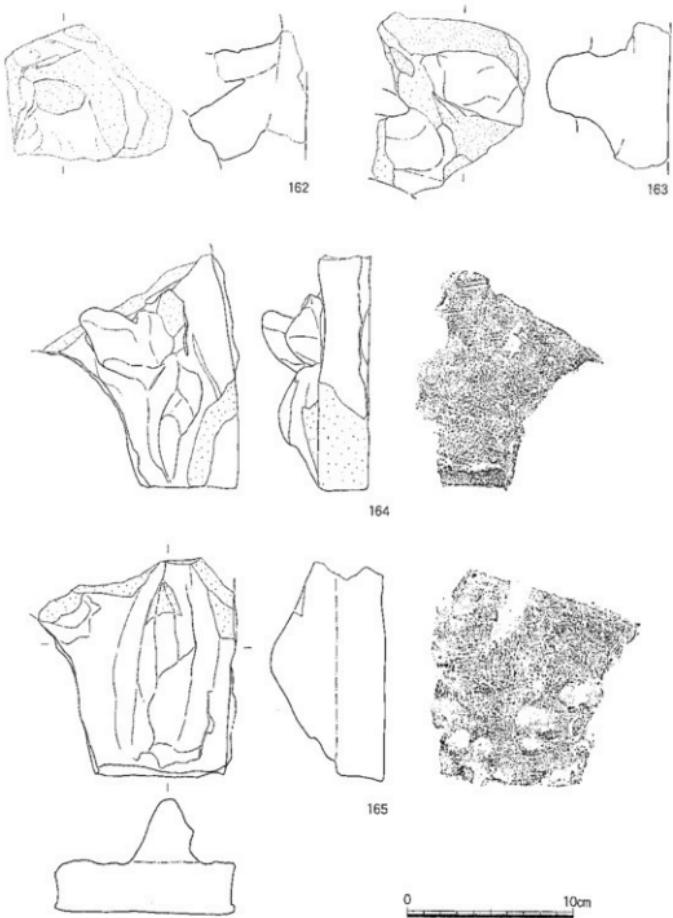


図171 補修瓦一鬼瓦 (1/3)

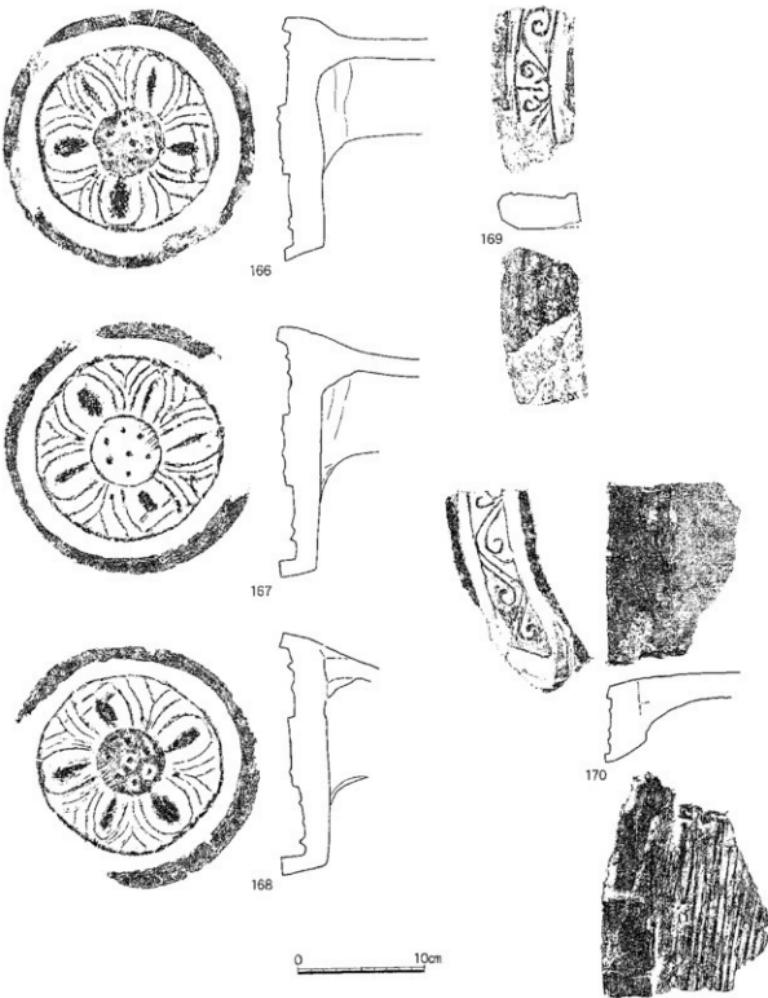


図172 軒丸瓦20式（1）・軒平瓦25式（1）（1/4）

弁の基部から5mm突出し、中心に1、周間に6つの蓮子を配する。圓線の外側には平面があり、そこからやや内溝気味立ち上がって周縁に至る。周縁は高く突出し上面はヘラ切りによって整えられる。上面幅7mm～17mmと差が大きく、広狭の位置も個体によって異なる。

文様の向きは一定せず周縁幅も異なっており、瓦範は周縁の内側斜面までであったとみられる。166

の右向き蓮弁には蓮弁の軸線に直交して大きな範傷が認められ、また、拓本には現れていないが左上蓮弁の周縁外側にも大きな範傷がある。このほか蓮弁の他の部位や中房にも小さな範傷が認められる。

瓦当侧面の調整は多くがナデで、とりわけ下半側面は丁寧なナデであるが、166では側面のほぼ全体を削ってからナデしている。瓦当裏面の調整はナデで平滑に仕上げられる。瓦当の厚さは蓮弁基部で2.4cmを測る。

丸瓦との接合部には特に面は形成せず、瓦当裏面に丸瓦を当て両側に粘土を加えて固定しており、欠損時に丸瓦部と丸瓦部はしばしば剥脱している。

丸瓦部が完存する個体はないが、173が瓦当と丸瓦の接続部後方で欠損した丸瓦部であり、これの長さから全長は37cmに復元できる。丸瓦部は行基式で後方が狭まり173で後端幅9.9cm、前端幅14.4cmを測る。なお、丸瓦部の横断面は半円ではなくC字に近い形状となっており、別個体も同様の断面を示す。筒状に製作した後の半裁ではなく一方を大きめに切り取っている可能性が考えられる。

凹面には細かい布目が残り、凸面の調整は平行叩きのちナデである。

#### 軒平瓦25式（図162・172～174、図版38-1）

169～172。〔第V型式〕。172で瓦当厚5.2cm、全長39.0cm、狭端幅26.0cm、平瓦部厚さ2.1cmを測る大形の軒平瓦である。瓦当幅は172で31.6cm、両端を広くとる171で34.0cmを測る。

瓦当面両端は角張り平瓦凹面に対しておおむね直角をなす。円形と縱棒からなる中心飾りから3回反転する唐草が左右にのびる。主葉は山形にのび、その上下に平行に配された支葉の先端が反転する。

界線の周間に平坦部をもちその外側に周縁がめぐる。171左端のように、周縁内側は脇区分にむかって尖る形となり、これが瓦苞の形状とみられる。なお、172右端では周縁がM字形となるが、これはケズリによって粘土が動いているためであり本来の形状ではない。周縁上面はヘラ切りないしヘラ切りのちナデであり、これは軒丸瓦20式の調整と同じである。

瓦当部は段頸をなす。厚さ2.4cmで断面台形をなす瓦当部に平瓦部をあて、平瓦凸面側に粘土を補充して接合している（170）。169はこの面で剥離した破片で、かなりなめらかな面をなす。頸部はナデ調整の個体が多いが、171のように横方向の叩きを施すものもある。

平瓦部凹面には細かい布目が見られる。171の凸面の頸部近くはナデ仕上げによって平行叩きが消される。そこから狭端までの範囲は平行叩きになるが、長い叩き板による叩きの後、さらに中央付近から狭端にかけて叩きが加えられるようである。一方、172凸面では縱方向の叩きを施し、さらに頸部近くから平瓦部前側にかけて横方向の平行叩きを施す。縱方向の叩きに縦の重複はなく長い叩き板であったとみられる。この縦方向の平行叩きの先端、頸部近くでは横方向の叩きが重なるためわずかにしか残らないが、格子叩きが見られる。格子叩きと平行叩きには重複がないと見ることができ、叩き板は平行を主としながら先端の刻みを格子にしたものがあったとみられ、これは後述の平瓦でも用いられる。なお、先の171の叩き板は先端まで平行叩きである。

同瓦がいくつか知られている。岡山市ハガ遺跡から出土したものは頸形状がやや異なり、平瓦部には格子叩きが施される（草原2004）。瀬戸内市服部廃寺例は左右両端を1単位ずつ切りつめている（池田ほか1997）。頸の形状は国分寺例と同様であるが、叩きは格子である。このほか、平安宮内郭回廊からの出土資料140がある（近藤編1977）。この資料では右第2単位のわらび手文から主葉と平行の直線が出ている。瓦苞の木目方向と一致することから瓦苞とみられるが、国分寺例にはなく国分寺例が先行することになる。頸形状はほぼ同様である。

平安宮内裏内郭回廊出土例は11世紀後半の年代が与えられており、軒平瓦28式はそれにやや先行する年代とみてよい。

## 平瓦（図175・176、図版43）

174は長さ38.2cm、狭端幅26.0cm、広端幅29.3cm、厚さ1.9cmを測る大形の平瓦で、大きさに対して

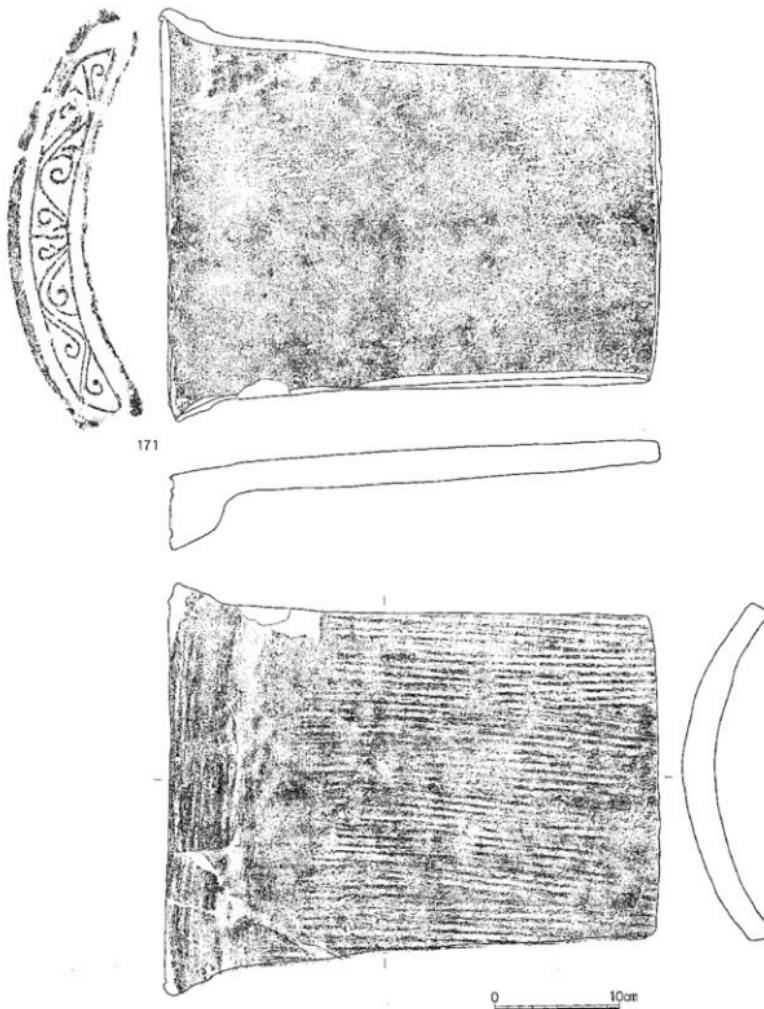


図173 軒平瓦25式（2）（1/4）

薄手である。

凹面には細かい布目が残り、凸面には平行叩きが全面に施され、広端側は浅い格子叩きになる。軒平瓦172で見られた、先端のみ格子叩きを刻み基本を平行叩きとする叩き板を用いる。この個体では格子叩きの範囲は狭いが、端から10cm以上の範囲が格子叩きになるものもある。

175は胎土や色調から同種とみられる平瓦である。凹面には横方向の浅い平行叩きの後に格子叩きが施される。凸面の側縁には叩き調整のうちに生じた浅い段が見られる。凹面には破片全体にわたる

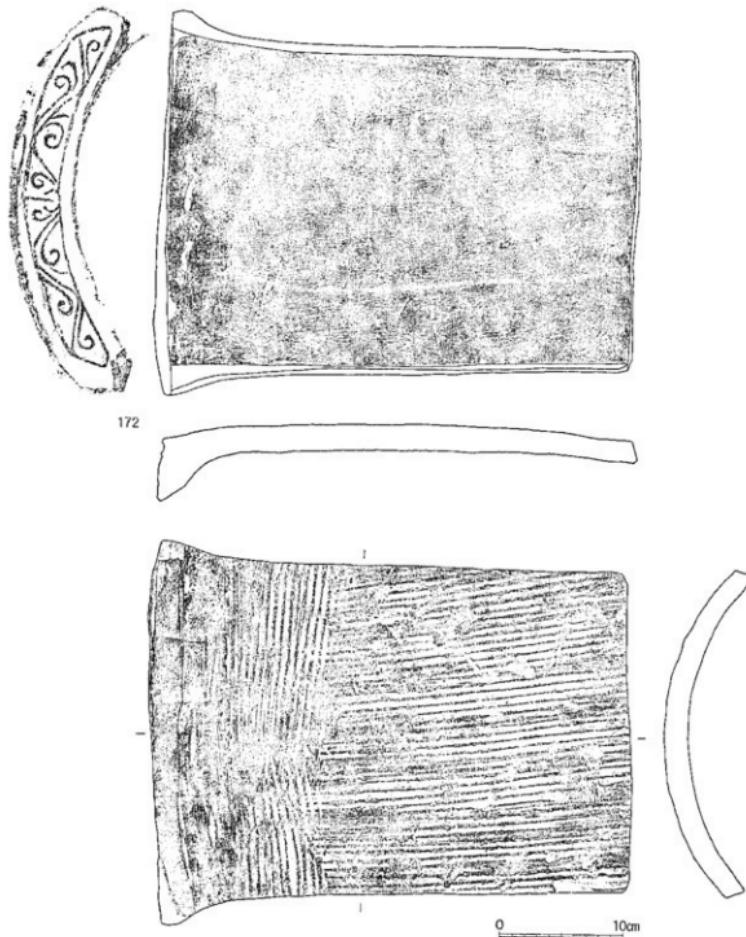
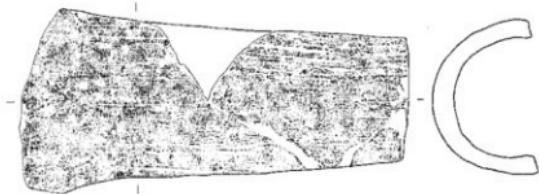
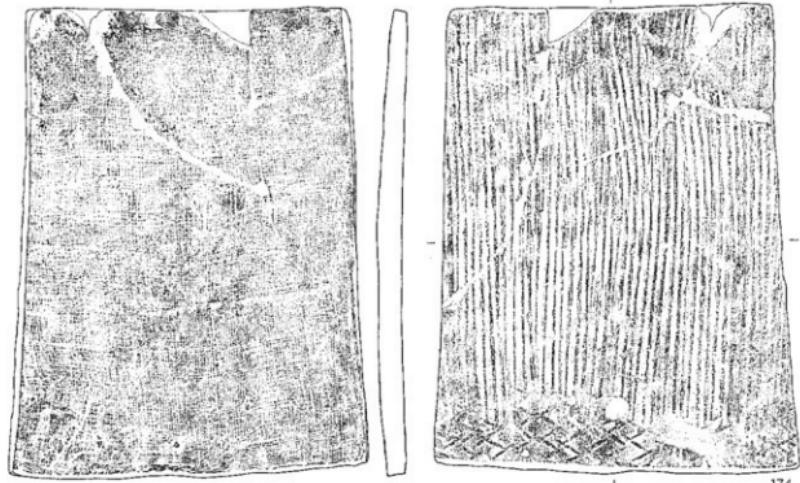
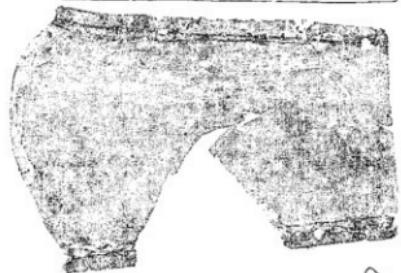


図174 軒平瓦25式（3）（1/4）



173

0 10cm



174

図175 軒丸瓦20式（2）・南門補修瓦一平瓦（1）（1/4）

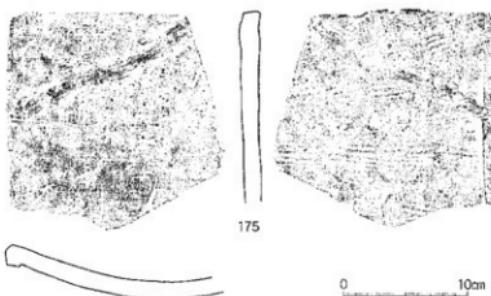


図176 南門修補瓦—平瓦（2）（1/4）

ヨコナデが見られ、布目の大部分はナデ消されている。破片の凹凸両面には斜めに低い突帯状に粘土がナデ付けられており、乾燥時に亀裂を生じて補修した痕とみられる。

軒平瓦・軒丸瓦体部を含めて糸切り痕は認められず、平瓦の凹面には指頭大の微妙な凸凹が認められ、また、平瓦174では凸面の一部に粘土の接合痕が見られる。一枚ずつ粘土板を作成し、

それを台に載せて成形したとみられる。

油杉窯跡では軒平瓦は採集されていないが、軒丸瓦20式、174と同様の平瓦が採集されており、この窯で生産されたとみてよい。ただし、平安宮出土例などに見られる格子叩きは採集されておらず、それらは地点を移した窯で生産された可能性がある。この窯では須恵器壺・杯も生産されており、上記の平瓦製作手法からすれば須恵器生産工人が瓦生産に動員されたとみてよいだろう。

#### （8）金堂上層瓦だまり

金堂の瓦だまりは間層をはさんで上下2層に分かれる。上・下の瓦だまりはもとは金堂の周囲全体にわたって広がっていたとみられるが、金堂基壇の大部分が削り込まれているため下層瓦だまりは金堂の東西と北側に、上層瓦だまりは北側に遺存するにすぎない。さらに上層瓦だまりは高い位置にあるため西半では近世ないし近代の水田造成の際に上部が削平を受けている。つまり、上層瓦だまりは金堂北側の東半に遺存し、北側中央付近にその上部を削られた状態で残っている。

瓦だまりの形成状態から、これらは平安時代に再建された金堂に伴うものとみられ、ここではそれをまとめて提示する。なお、先に示した資料にも本来これに含まれていた可能性が考えられるものやその可能性が強いものが含まれるが、上層瓦だまりの遺存状態の悪さからすればそれは当然とも言え、金堂瓦だまりの全体像把握にはそれらを考慮する必要がある。

なお、以下に示す型式のうち軒丸瓦21式と丸瓦の一部は金堂上層瓦だまりと回廊雨落ち溝の両方から出土しており、金堂の復旧とともに講堂・回廊の改修がなされたことを示す。

#### 軒丸瓦21式（図177、図版38-2・3）

単弁8弁蓮華文軒丸瓦。〔第VI型式〕。文様は彫りが深く明瞭である。やや短めの連弁8つをめぐらせ、間弁はもない。中房は圓線によって区画され蓮子は中央に1、その周囲に8をめぐらせる。瓦当の形成手法から以下の2種類に区分できる。

21a (178・179) : 一本作りで瓦当裏面に布目が広がり、下半部周縁はごく低い突帯状に突出する。瓦当の厚さが8mm前後と21b型式にくらべて薄く、丸瓦部の厚さもかなり薄いものになるようである。瓦当面の周縁は狭く幅は一定しない。周縁上面から側面にかけてはナデによって仕上げられる。21bにくらべてやや軟質の焼成である。瓦当面にナデがかかり蓮弁などの高い部分がつぶれており、それ

がなされない21bの方が文様はシャープである。なお、178は176とともに出土しており、製作手法は異なるが並んで葺かれていたことを示している。179は南門中門調査区池南端堆積からの出土である。

表面が白色を呈するやや軟質の焼成で微砂を含む。

21b (176・177)：北面回廊西部の雨落ち溝から出土した176は完形に復元できた。瓦当径16.4cm、全長37.1cm、丸瓦部長さ32.5cmを測る。21bの特徴は幅の広い周縁にあり、その上面にはケズリが加えられる。蓮弁外側の圓線と周縁内縁との間に低い圓線があり、周縁の内斜面は階段状になるが、この部分は21aでは削り取られている。この2本の圓線の間の凹部、176・177の右中央には斜めに範傷が生じており、21bが21aよりも後出することが明らかである。

瓦当裏面を段ないし溝状に彫り込んで丸瓦接合面を形成している。瓦当裏面はナデが加えられて平滑に仕上げられる。

丸瓦部凸面には横方向のナデが加えられ平行する擦痕状の沈線が生じており、丸瓦の成形時にロクロナデが用いられた可能性がある。凹面は糸切り痕が顯著で布目はわずかに認められる。

21aよりも含有する砂粒はやや大きい。灰色を呈し焼成は比較的良好で、一部は22式の多くのよう暗灰色硬質に焼き上がったものを含む。

周縁上面にケズリをかける点は軒丸瓦20式、後述の22式と共通する。北面回廊のほか、金堂上層瓦だまり、講堂調査区から出土している。

#### 軒丸瓦22式（図177～178・162、図版39-1）

単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、軒丸瓦1式・2式・6式と共に文様である。文様は太くはっきりしているが、全体に平板である。間弁は三角形で2式・6式のそれに似るが、中房は低く扁平で、また、瓦当復元径13.8～14.5cmと小形である。範傷が顯著で、地の多くに木目が浮き出している。181・184では範傷をもつ蓮弁は上側にくるが、182では右斜め上に向く。周縁の幅は個体によってかなり差があり180では6mm、184では16mmを測る。周縁が細いものはナデ調整で、183・184のようにある程度の広さをもつものはケズリのちナデである。

瓦当裏面を段あるいは溝状に彫りくぼめて接合面を形成しており、その形状は21b式によく似る。瓦当裏面も21b式と同様平滑なものが多い。183では裏面上部に板状工具によるとみられる圧痕が見られる。一方、181では瓦当裏面に布目が認められる。布目は178のように裏面全体にわたるものではなく中央付近に見られ、周縁側は丸瓦接合時のナデ調整によって消えている。一本作りではなく、瓦当部分の製作にあたってあらかじめ一定の大きさ・厚さの粘土板の作成がなされたことを示すとみられる。

胎土は21式とほぼ同様である。182のように軟質、灰色を呈し21式の多くと同様なものと、良好な硬質の焼成で、表面は暗青色、破面は赤紫色を呈するものがほぼ半々の比率を示す。金堂上層瓦だまり、講堂調査区、南門調査区石垣裏などから出土している。

型式は異なるが、類似した特徴をもつ軒丸瓦135が奈良県興福寺から出土している（山崎2003）。中房が大きく扁平で間弁が三角形になる点が共通するが、蓮弁の表現は異なる。この型式は備前国分寺跡からは出土していないが、中房や間弁の特徴から軒丸瓦22式と関連する可能性もある。軒丸瓦135は康平3（1060）年の大火後の再建に用いられたと推定されており、軒丸瓦22式の年代もこれに近いと考えておく。

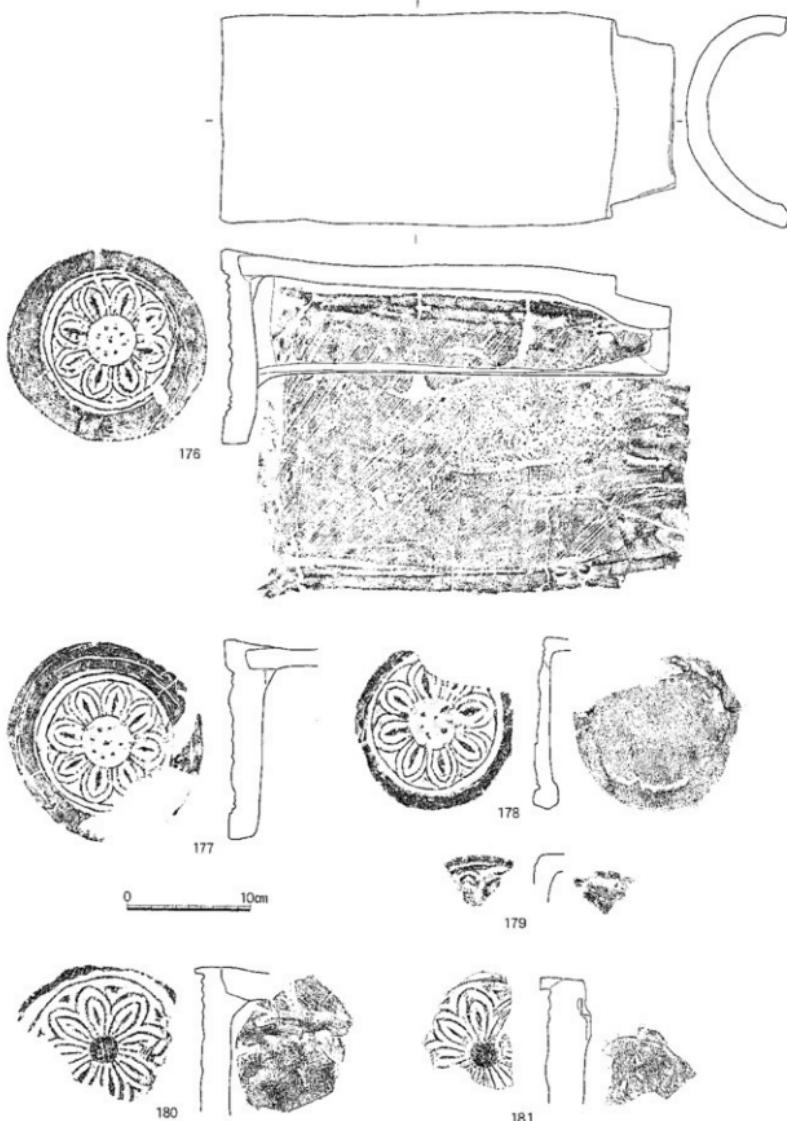


図177 軒丸瓦21式・22式(1) (1/4)



図178 軒丸瓦22式(2)・軒平瓦26式(1) (1/4)

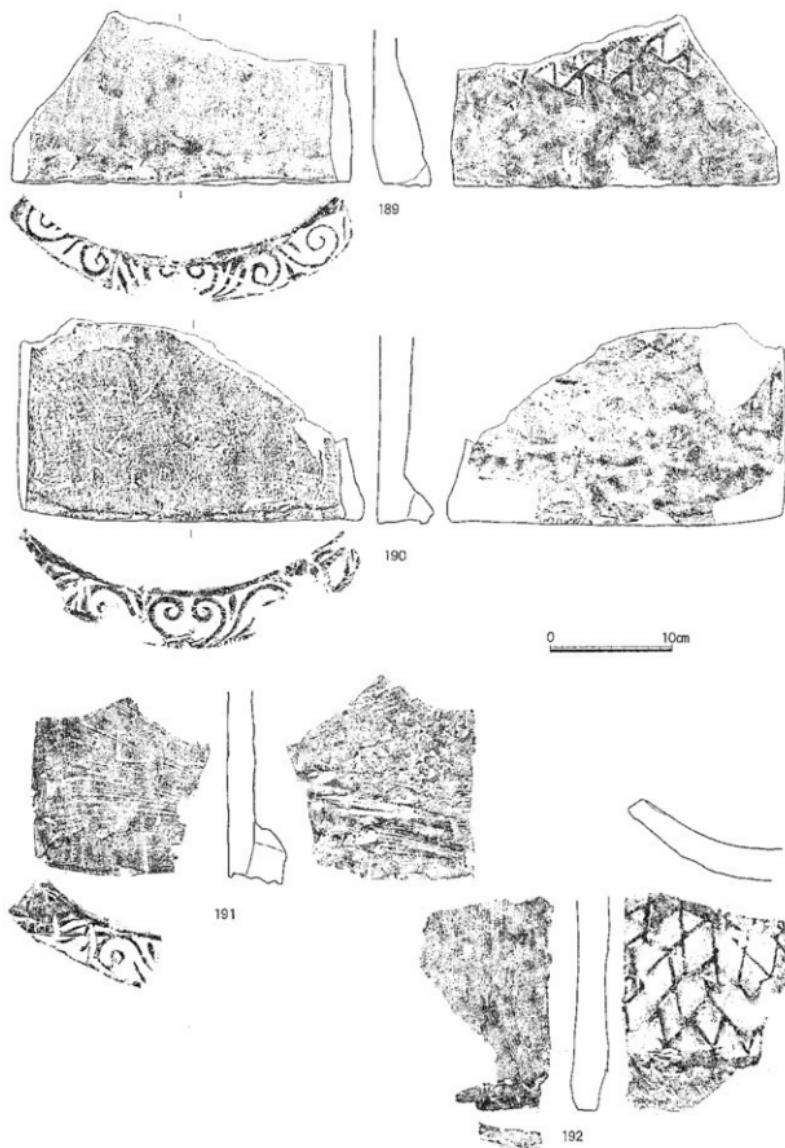


圖179 軒平瓦26式（2）（1/4）

## 軒平瓦26式（図178・179、図版39-1）

[第VI型式]。瓦当の文様は、上端を内側に巻き込みその中に水滴形の表現を置いたものを中心飾りとし、左右に唐草文を2単位ずつ配したものである。周縁は個体によって大きく異なり、それがないものもある。基本的に瓦筋外側の粘土を成形して周縁が形成される。中心飾りの形状、唐草文の特徴とともに軒平瓦2式の特徴を保有しており、その文様を写したとみてよい。なお、185は文様が不鮮明であるが、これは瓦当面が右半を中心にナデられているためである。

復元できた185にもとづけば長さ34.2cm、瓦当幅26.4cm、瓦当厚4.6cm、狭端推定幅20.8cm、平瓦部厚さ2.5cmである。

粘土板の貼り付けによって段頸が形成される。186～188はそれらが剥離したものであり、192は平瓦側の破片である。187・188・190のように断面が台形をなす細長い粘土板を貼り付けるものと、186・191のように断面が継長台形の粘土板を貼り付け、さらにその後方に粘土を加えるものがある。前者は貼り付け幅が狭く、190の形状にもとづけば、あらかじめ押圧によって段頸の基部を作り出しているようである。

これら貼り付けられた粘土板のうち187・188では布目が認められ、一方、186では布目は認められずかわって後方になる面に糸切り痕が見られ、貼り付け方法の相違に対応して異なるが、粘土の貼り付けではなく細長い粘土板を形成しておいてそれを貼り付ける点で共通する。

185の瓦当中心飾りから左側にかけて見られるように、瓦当面のカーブにそってごく細い沈線や擦痕状の線が見られる。瓦当文の押圧に先行するものであり、ヘラ切りによって平面を形成した可能性を考えられる。

瓦当面の左端には大きな範割れを生じている。191の破片中央の水平な線が範の割れであり、割れた範を2力所で紐でつないで使用している。拓本では縦方向の太い沈線となるが、紐の擦りも圧痕に認められる。185は範割れを生じる前、189は紐が1本で文様に乱れなく割れの初期とみられる。187・190が割れの進んだ段階であり、この状態の破片が多い。191は上下の文様が合わず左端が無文となるが、紐でつないだものの上側の範をうまく固定できなくなり、位置がずれ角度も斜めになつたため最終的な調整で文様もナデ消されることになったとみられる。なお、189は瓦当そのものの幅が狭いため左半上端の文様が欠けている。

凹面には布目のみが見られるものが多いが、糸切り痕がわずかに見られる192、全面に糸切り痕が残る191もある。凸面はいずれも格子叩きで、185は長い叩き板で3cm前後の間隔で叩いている。

砂粒の含有は少なく、焼成の状態によっては明瞭に見えないものもあるが、胎土は薄層をなす。堅緻な焼成で表面が灰青色、破面が暗赤色を呈するものが認められる一方、軟質で褐白色の個体が多く、焼成の変異は大きい。

範割れが進行する状況が認められるが、必ずしも瓦筋の使用期間の長さを示すものではなく、一連の作業のなかで生じた可能性も考えられる。金堂上層瓦あまりの基本的な軒平瓦であることから、同様の出土傾向をもつ軒丸瓦22式と組み合うとみてよく、両者の焼成・色調も離隔はきたさない。軒丸瓦22式は奈良時代の軒丸瓦1式、あるいはその模倣である2式・6式を、また、軒平瓦26式は軒平瓦2式を忠実に模倣したものであり、それらが備前国分寺の瓦の文様と認識されていたと考えてよい。先に述べたように軒丸瓦22式は11世紀代と推定され、軒平瓦26式も頬部の形状から11世紀代と推定され、金堂建物の再建はこの時期になされたとみられる。

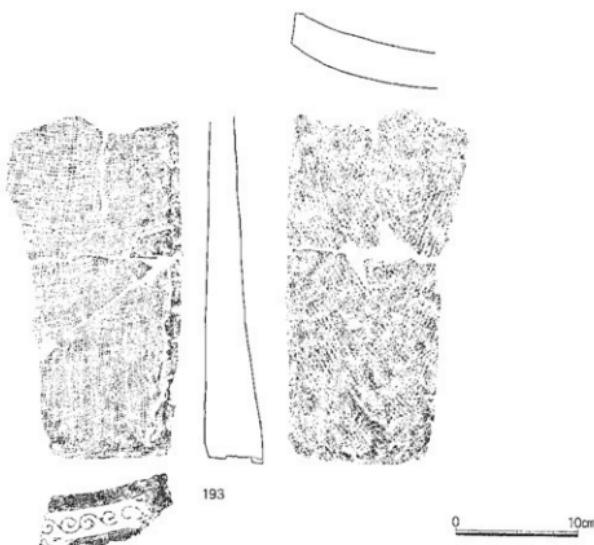


図180 軒平瓦27式 (1/4)

## 軒平瓦27式 (図180、図版37-8)

193。金堂上層瓦だまりから1点のみの出土である。

瓦当厚4.2cmを測り、広い周縁と狭い内区からなり、唐草文が配される。周縁上面はヘラ切りによるらしく、きわめて平滑である。

凹面には布目が顯著に残る一方、糸切りは見られない。平瓦174と同じく微細な凹凸が見られ、糸切りを用いないで製作された可能性がある。凸面には斜めから方向をたがえて縄目叩きが施される。

砂粒の少ない胎土でやや互層状をなす。焼成は良好で灰色を呈し、破面の色調は明灰色である。

軒平瓦29式とはかなり形状が異なるが、これに前後する時期としても支障はないと考える。

## 丸瓦 (図181-182・184、図版42)

金堂上層瓦だまりの丸瓦で特徴的なのは丸瓦部と玉縁との段差が小さい一群である。

194は横方向のロクロナデが顯著な個体で、浅い段で丸瓦部と玉縁部が区分される。焼成時のゆがみが大きいが、全長35.7cm、基部幅17.6cm、丸瓦部長さ30.2cmを測り、丸瓦としては大形である。なお、器厚は15mm前後と薄い。奈良時代の丸瓦とは異なり、ロクロ回転によって成形と外面調整がなされている。また、この個体で特徴的なのは内面の布目で、きわめて粗い布目とごく細かい布目の二重になっている。須恵質の焼成で、灰色を呈する。

195・196もこれと同様の丸瓦の破片で、195は金堂上層瓦だまり、196は北面回廊講堂西側の焼土層下からの出土である。いずれも玉縁部に「天」の刻印がなされている。いずれも表面灰色、破面赤色で、195では凹面に糸切り痕が残る。

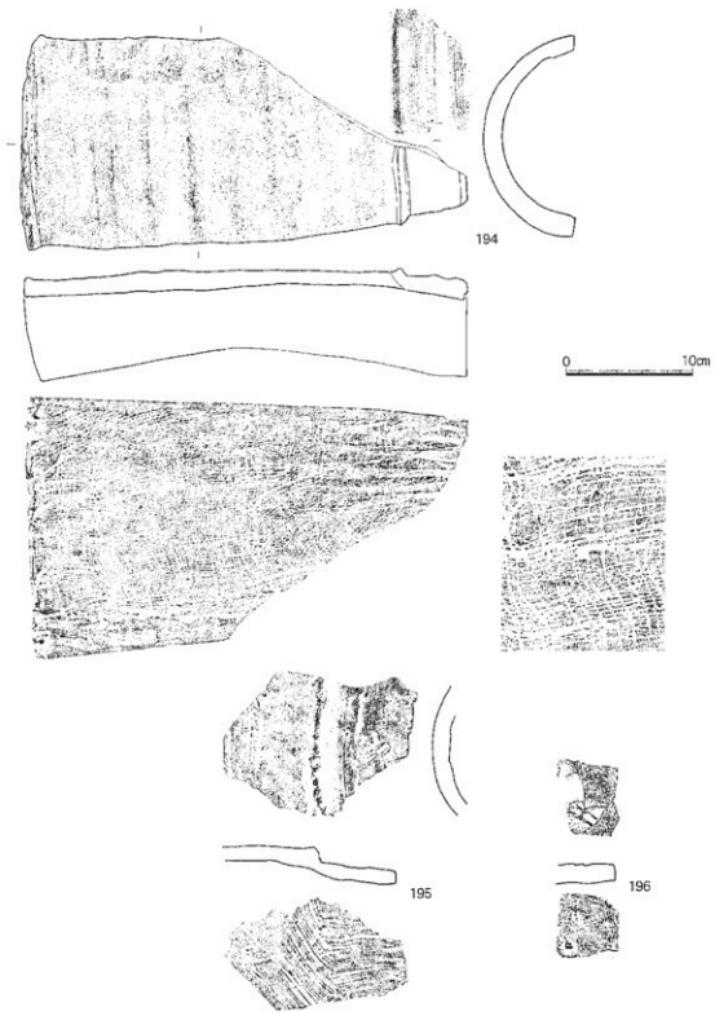


図181 金堂上層瓦だまり丸瓦（1）（1/4）

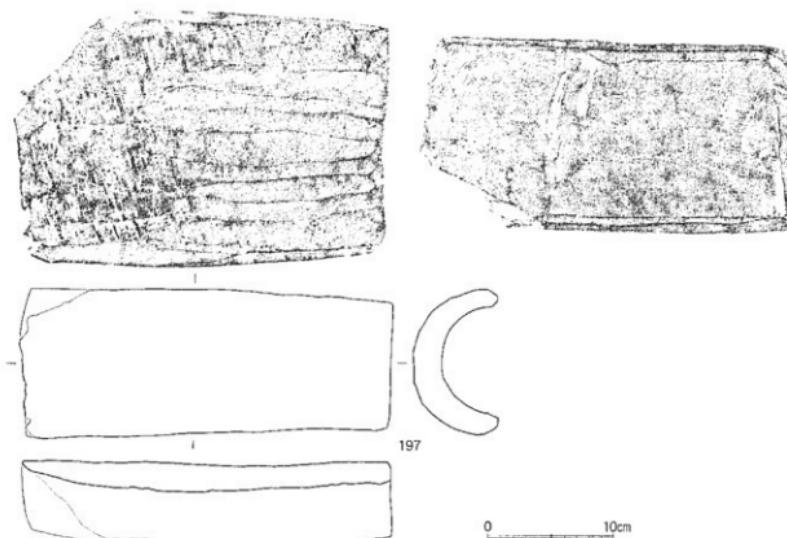


図182 金堂上層瓦だまり丸瓦（2）（1/4）

197は玉縁をもたない一種の行基式の丸瓦で、広端側を著しく薄く仕上げる。粘土紐の積み上げによって製作されており、四面のナデ調整下にその痕跡が見られる。凸面は平行叩きが施された後、中央部から狭端にかけてケズリを加えており面取りをしたかのような形状をなす。長さ29.8cm、狭端幅10.2cm、広端推定幅12.2cmを測る。砂粒の少ない胎土で、須恵質で灰色の焼成である。軒丸瓦18式および22式の焼成良好なものに胎土・焼成ともに似る。出土の破片数は少ない。

201も行基式の丸瓦である。粘土板の積み上げによって製作される。狭端幅8.8cm、残存長さ18.5cmで、広端にむかって広がる。凹面は粗い布目、凸面はナデ調整である。197と行基式という点で共通するものの、胎土は砂粒を多く含み、表面に炭素を吸着して黒色を呈し基本的な色調は黄褐色となるとみられるなど、焼成・色調ともに異なっており、平瓦198～200と同時期の古い製作年代を考えている。

#### 平瓦（図183・184）

平瓦の構成は多様であるが、とりわけ198～200は特徴的な資料である。

横骨痕をもつ平瓦 198は礎石6を落とし込んだ土壙から出土した破片に金堂基壙北部に形成された水田造成土出土の破片が接合したものである。土壙から破片がまとまって出土しており、礎石の落とし込みがなされる前は基壙上面に完形ないし準完形の瓦が所在していた、つまり、上層瓦だまりが基壙上面にも広がっていた可能性があることを示す資料である。長さ44.2cm、推定広端幅29.8cmと大形で厚さ2.5cm、重量がある。凹面には横骨痕が残り、糸切り痕と布目が見られる。凸面には長さ6mmの方形で細かい格子叩きが施される。叩きは瓦の軸線に対してやや斜め方向からなされているよう

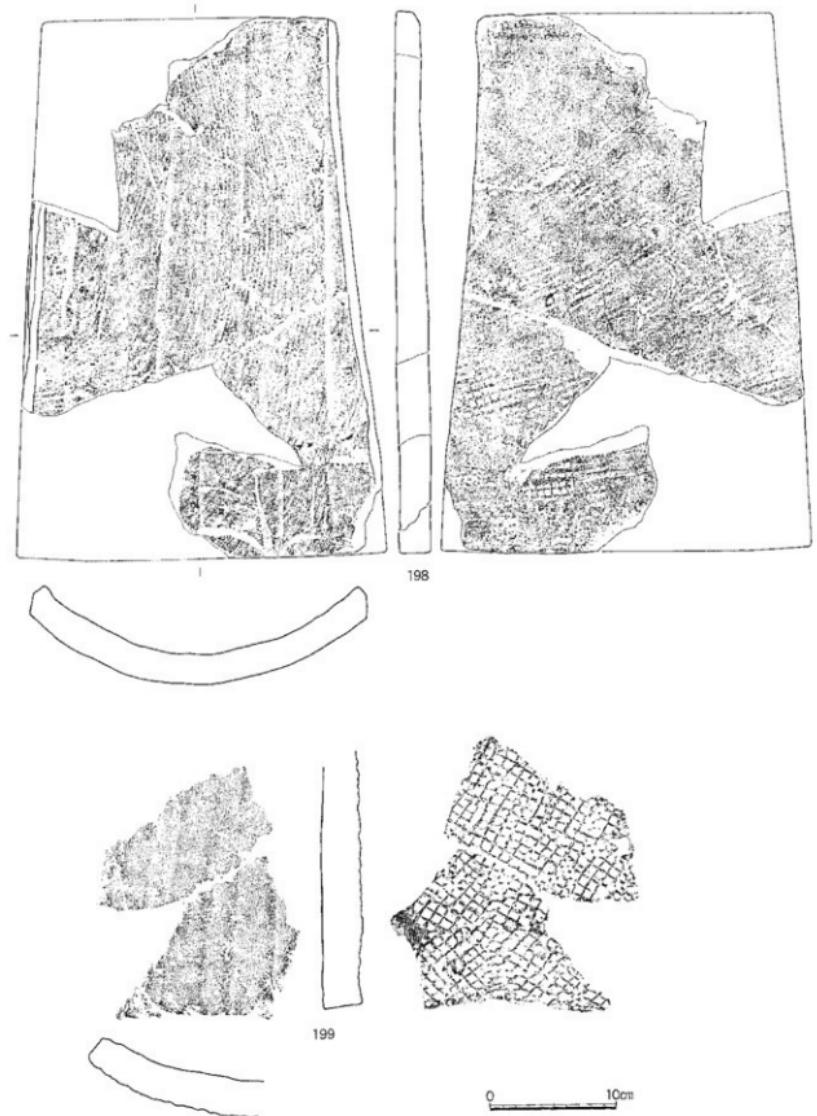


図183 金堂上層瓦だまり平瓦（1）（1/4）

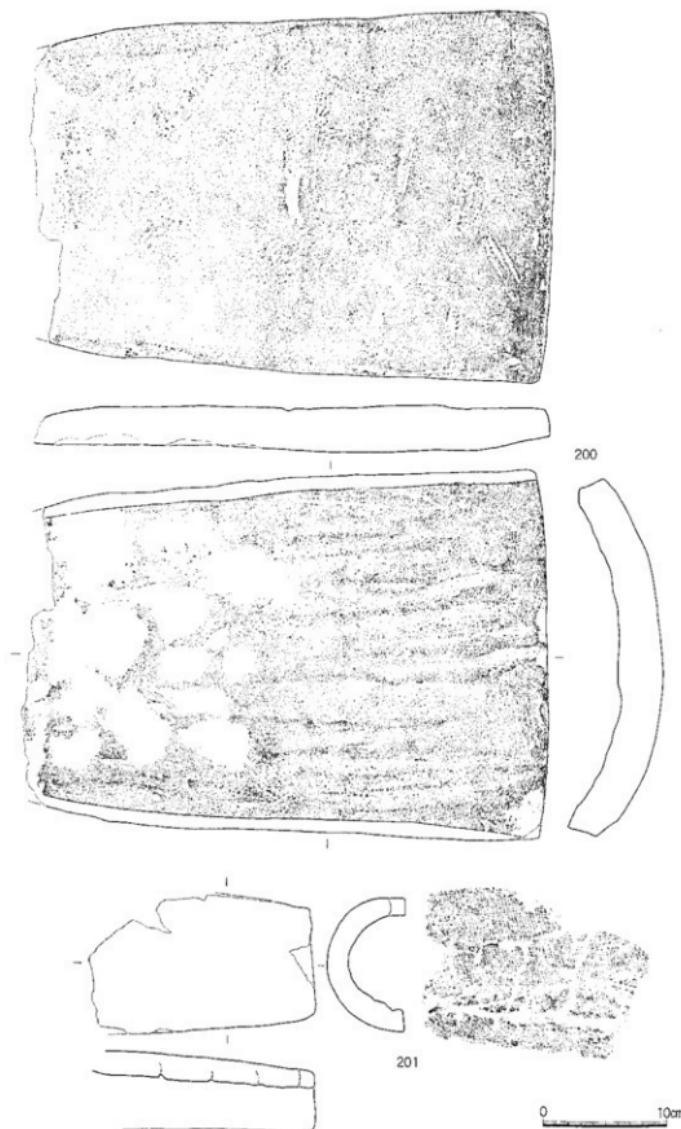


図184 金堂上層瓦だまり平瓦（2）・丸瓦（3）（1/4）

ある。褐色を呈し、胎土には3mm以下の砂粒、小礫を含む。

199も平瓦の破片である。厚さ3.1cmを測り、かなり大形の平瓦であったと思われる。凹面には模骨痕と布目が見られ、凸面には長さ9mmの細かい方形の叩きが密に施される。須恵質の焼成で、青灰色を呈し、砂粒や小礫を含む。

200は狭端側を欠損するが準完形の平瓦である。広端幅30.2cm、厚さ3.6cmを測る。残存長さは43.5cmであり、破片の状況からこれよりもわずかに長くなる程度と推定される。凹面には模骨痕と細かい布目が残り、広端近くにはさらにユビナデが加えられている。凸面は基本的にナデ調整であるが部分的に長さ7mmの小さな菱形をなす叩きが残る。全面が赤橙色を呈する。胎土には3mm以下の花崗岩起源とみられる粗砂粒を含む。なお、凹面の狭端側は円形の剥離を顕著に生じており、火災による剥離の可能性がある。

国分寺の創建期の平瓦とは異なりこれらの平瓦198~200は模骨痕をもち、また、規格や厚さも全く異なる。備前において一枚作り平瓦が普及する年代は確定できないが、国分寺創建期の平瓦に先行する製品であることは確実である。こうした製品が一定の比率で出土するなら国分寺に先行する寺院の存在を想定することも可能であるが、下層瓦だまりには含まれておらず、上層瓦だまりに少量含まれるのみである。したがって、これらの製品は上層瓦だまりのもとになった建物が建立された時期、平安時代後期に持ち込まれたと理解すべきである。つまり、金堂の再建に際して新たに瓦を作製するとともに、古い寺院の瓦を転用・搬入したとみることができる。なお、平瓦143、上記の丸瓦201もこれらと同様に持ち込まれたものと考えている。

また、ここでは出土層位が明確であるためこうした判断が可能になったが、しばしば見られるように混在した状態で瓦が出土した場合、必ずしも古い型式の瓦がその寺院の創建時期を示すものとはならないことになる。瓦の使用の対象になった寺院については平瓦の比較検討作業を行えていないため確実ではないが、軒丸瓦19式の存在から、南西5.4kmに所在する貧田廃寺を候補に考えることができる。

#### その他の平瓦（図185~187）

202は長さ33.7cm、推定狭端幅21.3cm、厚さ1.6cmを測る。広端幅は明確でないが、側縁の形状から広端があまり広くならず長方形気味になる可能性が強い。凹面は布目で糸切り痕は見られず、微細な凹凸も見られる。凸面には細い縄目の叩きが施される。縄目や細くは横方向で、弧状に叩き板を動かしているようである。明灰色を呈しやや須恵質に近い焼成である。胎土に砂粒は少なく薄層気味である。

203は狭端幅21.7cmを測り、202と同様薄手である。凹面には布目、その下にわずかに糸切り痕が見られる。凸面には深い縄目叩きが施される。同方向に叩き板を移動して叩いているように見える。瓦質に近い焼成で、表面は黒色を呈し、砂粒の含有の少ない胎土である。

204は金堂調査区の近世溝からの出土であるが、上層瓦だまりから遊離したとみてよい。凸面に縄目叩きが交差するように施される。凹面は布目で糸切り痕は見られない。胎土はおおむね202と同様である。黄褐色を呈するが、これは火を受けたためとも思われる。

205は長さ36.3cm、広端幅27.0cm、厚さ2.2cmを測る。両側縁が強く内側に反る横断面を示しており、これは206・207も同様である。なお、207は異なるが、205・206は長軸方向でも内側にむかう反りをもつ。凹面には粗い糸切り痕と布目が見られ、凸面には長さ2.5cmの横長格子の叩きが施される。

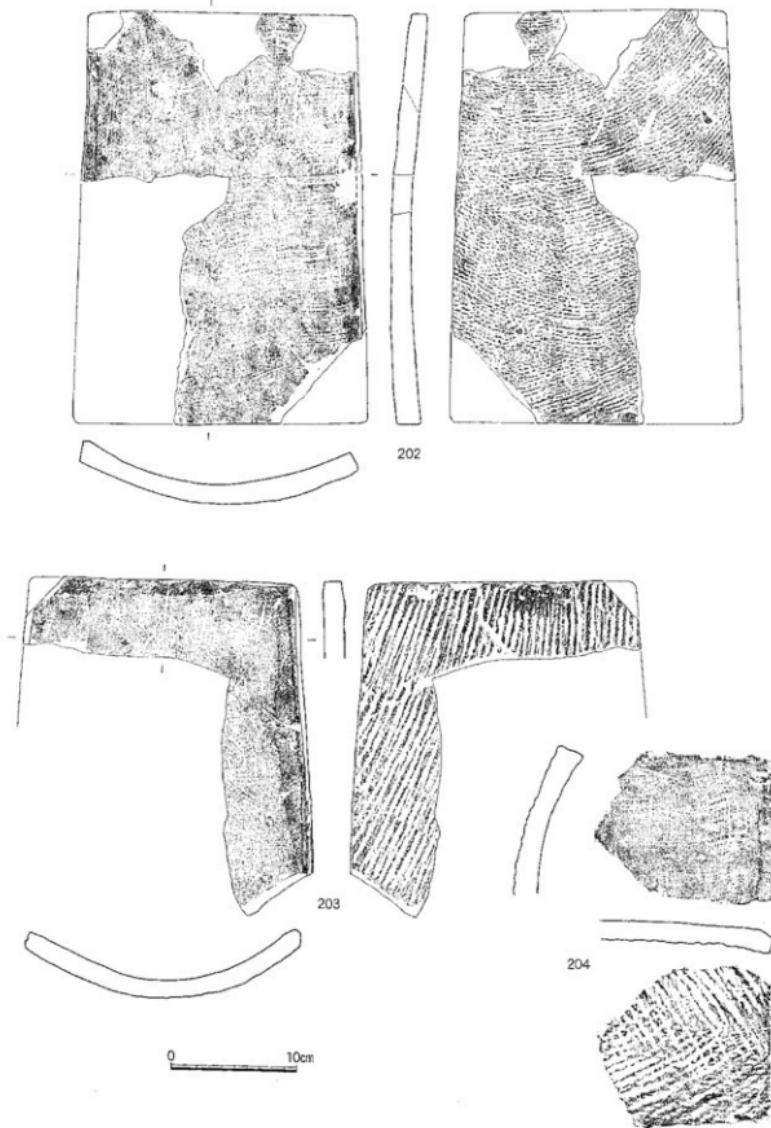
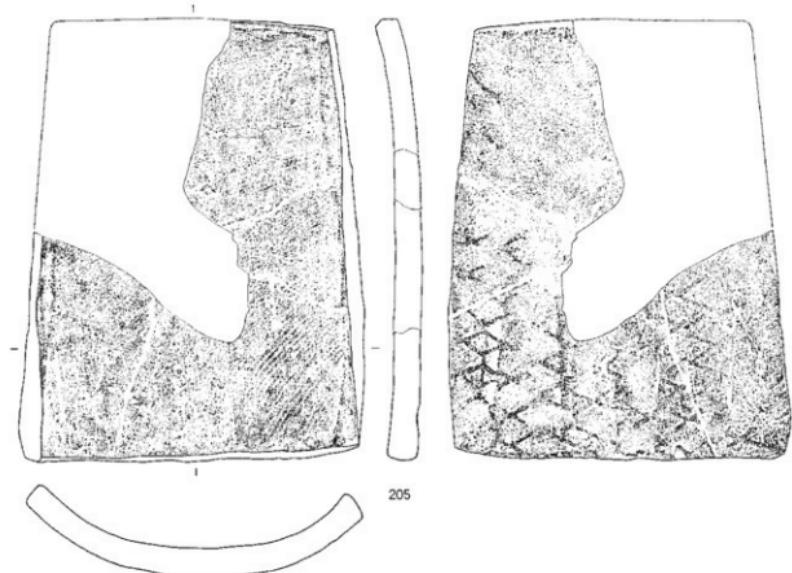
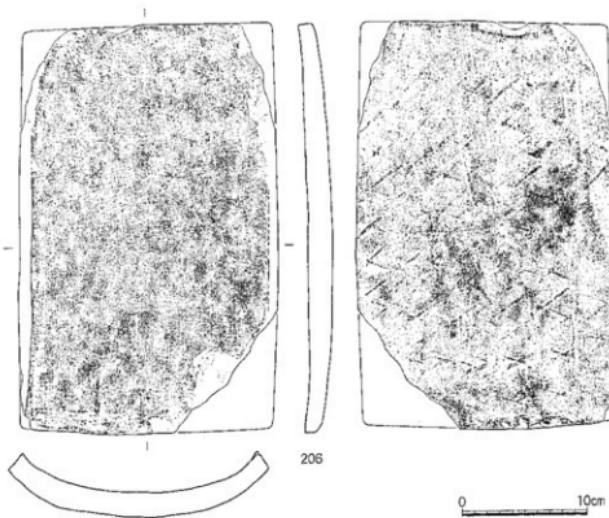


図185 金堂上層瓦だまり平瓦（3）（1/4）



205



206

0 10cm

図186 金堂上層瓦だまり平瓦 (4) (1/4)

叩き板は横に3.6cm前後の比較的狭い幅で移動する。格子の特徴は軒平瓦26式のそれに近く、この平瓦が軒平瓦26式とセットになる可能性がある。205は軟質の焼成で明褐色を呈するが、これは軒平瓦26式のうち190など軟質の焼成のものと共通する。3mm以下の砂粒を少量含み、薄層が見られる。

206は長さ33.4cmで、広端・狭端幅がいざれも20.4cm程度であり差をもたず長方形の平面になるとみられる。凹面は細かい布目で、糸切り痕は見られない。凸面には細い突線の横長格子叩きが施されており、長さは3.2cm前後である。205・207にくらべて微砂がやや多い。瓦質気味の焼成で黒色～淡灰色をなす。

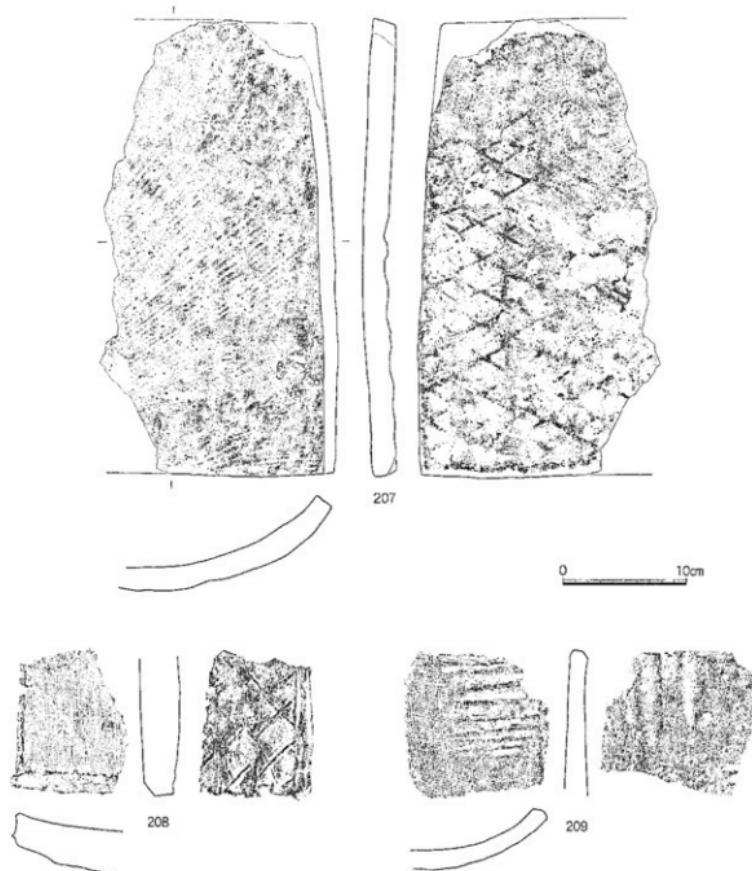


図187 金堂上層瓦だまり平瓦（5）（1/4）

207は中門調査区の池堆積土からの出土であり、上層瓦だまりからの流入の可能性を考えここに含めた。長さ37.4cmを測り、凹面には顯著に糸切りが残り一部に布目が見られる。凸面は長さ3.4cmの大きな横長格子の叩きが施される。5mm以下の砂粒を少量含む。

208は西面回廊トレンチ東部からの出土であるが、金堂の西側にあたる位置であり、上層瓦だまりから遊離した可能性を考えた。凹面に布目、凸面に突線が細く長さ3.9cmの格子叩きが施される。表面は暗青灰色、破面は赤紫色を呈し、軒丸瓦22式に似る。

209は薄手の平瓦破片で、凹面には粗い布目を消す深いユビナデが局部的になされており、凸面にも縦方向に同様の調整が加えられている。この資料は他と異なり胎土に4mm以下の砂粒を比較的多く含む。

#### 鬼瓦（図188、図版45）

210は南門・中門調査区池堆積土から、211は講堂調査区井戸1からの出土であり、確実に上層瓦だまりに伴っての出土状況ではないが、軒丸瓦18・22式、丸瓦197と同様の胎土・焼成であるためここに含めた。この2点の鬼瓦の胎土・色調はよく似ており、青灰色、破面は淡紫色で堅緻な焼成である。いずれも裏面にきわめて粗い布目をもつ点も共通する。210は中央が最も厚くなる破片で、弧状の彫りを重ねる。211は裏面横断面が緩やかな曲面をなす破片で、板状の本体に粘土を貼り付けて立体的な表現を形成している。上面が欠損しているが中央から下側にむかう高い突帯があり、その左右はくぼみをなす。残存した表現から鼻の上側のつけ根から両眼の眉付近にかけてではないかと考えている。いずれも砂粒の少ない胎土で、胎土中には粉の痕跡が多く見られ、粉を混和剤として用いたことが明らかである。

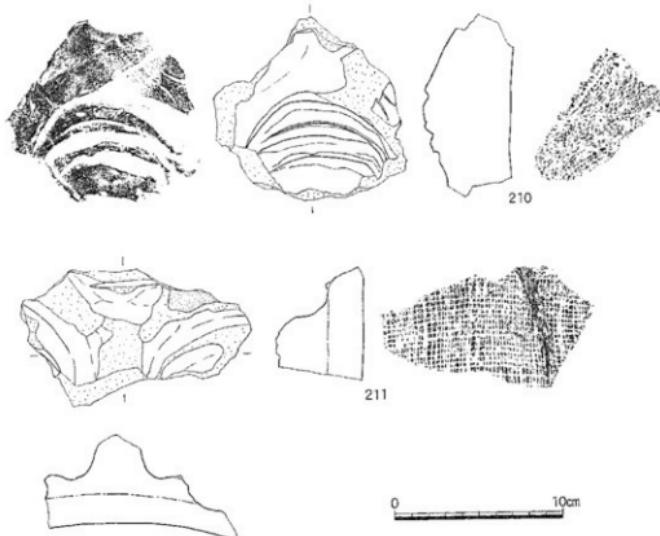


図188 金堂上層瓦だまり鬼瓦（1/3）

## (9) 中世瓦 1

## 軒丸瓦23式（図189、図版39-2）

菊花状の瓦当文を特徴とする。瓦当径15.2cmとやや小振りである。中心は小さく、周囲に15弁の花弁を配する。外区は二重の園線で区画されその間に珠文を配する。周縁は狭くその幅は一定ではない。花文の間に范傷を生じ、A字形になる箇所がある。また、212・213では花文の上に擦痕状の平行線が見られるが、瓦筋の木目方向とは異なっており、文様の上部だけではなく地部分にもその端部が焼くことから、瓦筋を当てる前に瓦当面成形のために行った糸切りないし板による押圧の痕が残ったと考えている。瓦当裏面の調整はナデで、213は角張った断面形をもつが212では丸みを帯びる。瓦当裏面に丸瓦を貼り付けるが、そのための補充粘土は少量である。

## 軒平瓦28式（図189、図版39-2）

上記に組み合う軒平瓦である。瓦当幅23.8cm、瓦当厚5.4cmと、これも小振りである。

均整蓮華文軒平瓦である。中央には側面から見た蓮華を置き、その左右に緩やかに反転する茎を配し、中ほどに蓮の葉ないし花をやや斜めに配し、先端には蕾を表現する。周縁は細く突出する。

瓦当部の製作手法は2種類あり、215は包み込みで平瓦との接合がなされる。一方、216・217・219は頸が貼り付けによって形成される。そのため、頸の形状は一様ではなく、また、貼り付けによるものも頸部の高さはかなり異なる。

平瓦部凹面の調整はナデ、凸面は瓦当近くが縦方向のケズリで後方は叩きである。

218はこの軒平瓦の後端部とみられる破片である。凹面には糸切り痕が残り細かい布目が見られるが浅い縦方向のナデが加えられておりそれらはかなりナデ消されている。凸面には離れ砂が顯著に見られる。またここには広い突線で構成される格子叩きが施される。格子は長さ31mm程度の大きいものになるようであるが、叩きが浅いため大きさは明瞭でない。中央には上面径19mmの釘孔が設けられる。なお、これに組み合うとみられる丸瓦も出土しているが、小片のため図示していない。

これらの資料、軒丸瓦23式・軒平瓦28式はいずれも共通した胎土・焼成である。砂粒の少ない胎土で、黒色粒が比較的顯著である。焼成は須恵質に近いものから軟質のものまで幅はあるが、総じて良好である。色調が最も特徴的で、軟質の場合が白色、良好な場合で明灰色を呈する。

これらは備前国分寺の北東16kmに位置する和気町泉瓦窯で生産されたことが明らかになっている。現状では備前国分寺以外に出土は知られておらず、備前国分寺の修築のために生産された可能性がある。

瓦の年代は平安末から鎌倉時代初期（岡本1980）、鎌倉時代中～後期（尾上2006）とやや評価が分かれるが、泉瓦窯から「東大寺瓦」が出土していることから前者とみなし、備前で東大寺瓦が生産された12世紀末～13世紀初頭に近い年代と推定する。

軒丸瓦23式・軒平瓦28式はある程度の量が出土しているが、大部分が南門・中門調査区の池堆積土中からの出土で使用位置を示すものは少ない。南門調査区瓦だまりと講堂調査区から出土しており、この時期に南門の補修と、12世紀後半に焼失した諸堂のうち、講堂の再建がすみやかになされたと考える。ただし、これらの年代が12世紀後半まさかのぼり焼亡の時期と重複する可能性も否定できず、その場合は平安時代最後の補修瓦であり、講堂の再建は次の軒丸瓦24式の段階まで下がることになる。

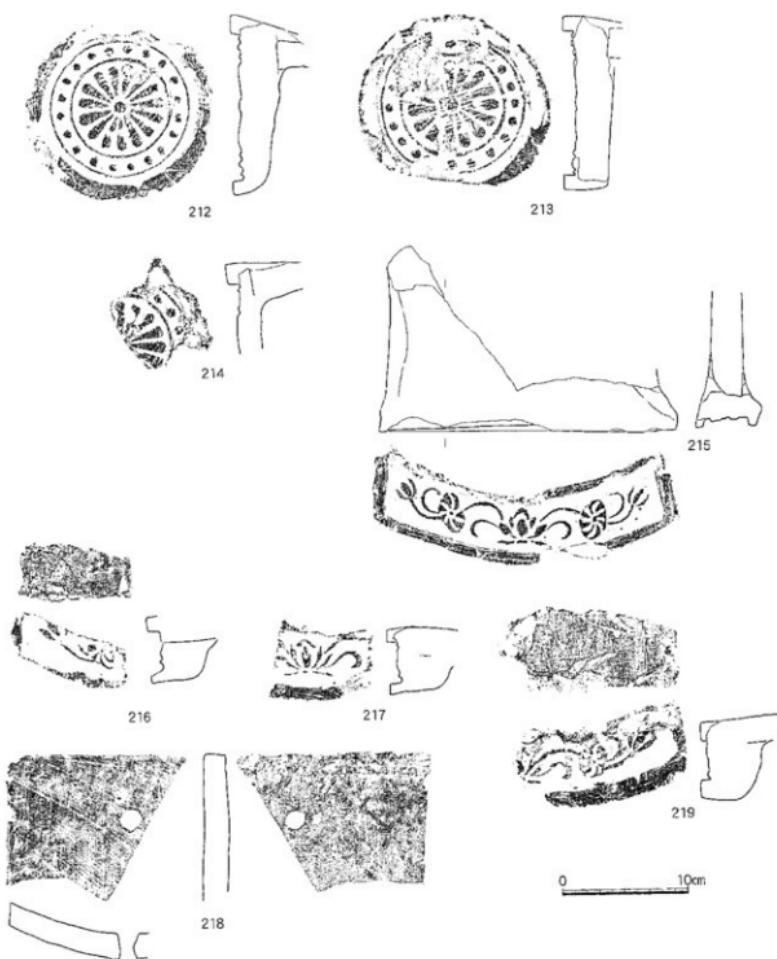


図189 軒丸瓦23式・軒平瓦28式 (1/4)

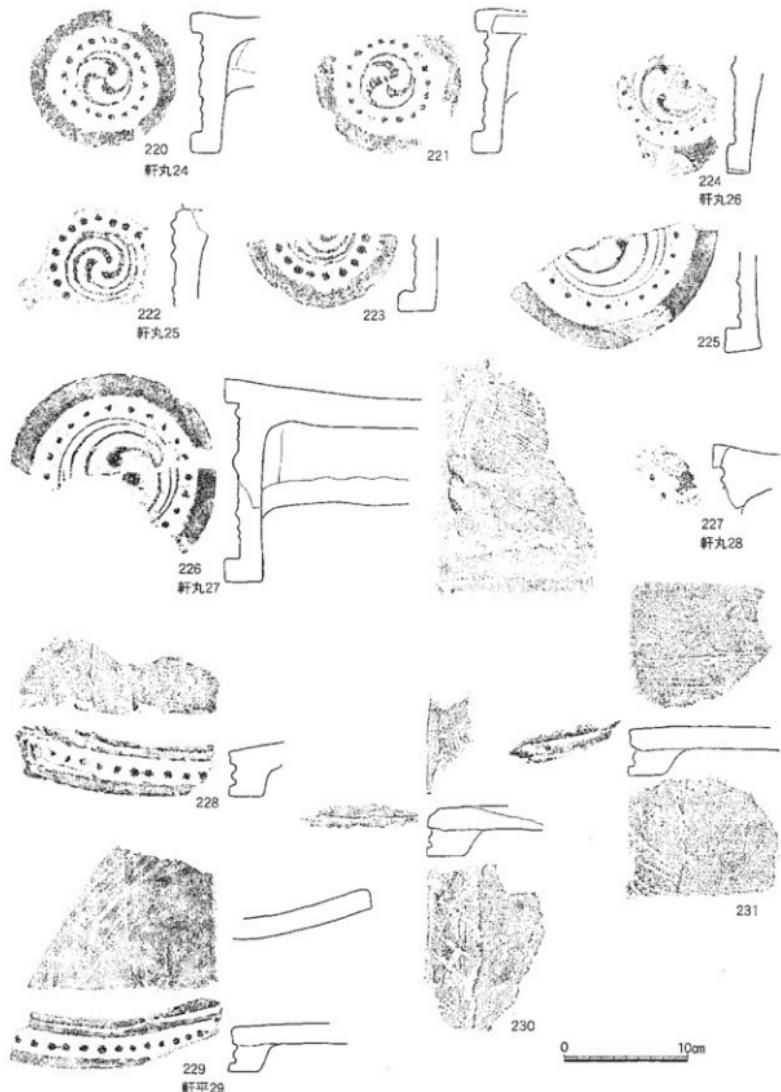


図190 軒丸瓦24～28式・軒平瓦29式 (1/4)

## (10) 中世瓦 2

220以下は瓦質の焼成で表面が黒色を呈する中世の瓦である。出土位置は講堂周辺と南門に限られ、国分寺の堂塔は基本的にこの二つで構成されることになったとみられる。

## 軒丸瓦24式 (図190、図版40-1)

220・221。三巴文の周囲に珠文を配する軒丸瓦である。小振りな軒丸瓦で、瓦当径は11.5cmである。範の彫りは深く巴文は全体に浮き出した形となる。巴の頭部は尖って接続しており、尾部は圓線につながる。珠文は小さく、そのうち右側では範割れのため珠文がつながる。

丸瓦部凸面は縦方向に面取り状のナデが加えられており、凹面には糸切り痕と細かい布目が見られる。

砂粒の含有はやや少ない。炭素を吸着して黒灰色を呈するものから明灰色のものまで幅があるが、いずれも焼成は良い。

同范品が備前国分寺の東側に所在する両宮山古墳後円部北側の外濠堆積土中から出土している。ここでは平瓦・丸瓦も出土しており外濠の北外側に中世の小集落が所在し、小堂が設けられていたと考えている。外濠堆積土で共伴する土器から14世紀初頭と考えるが、建物の存続期間を考慮すればそれよりもある程度古くみなすことができる。出土点数は6点と少なく、うち2点の出土から講堂に伴うことは確実である。金堂調査区出土の1点は講堂からの流入と考えることも可能である。他の2点は南門・中門調査区の池造成土からの出土であり講堂からの流出か南門での使用か判断がむずかしく、確実なところで再建された講堂使用の瓦と判断しておく。

## 軒丸瓦25式 (図190、図版40-2)

222・223。軒丸瓦24式と同様瓦当径は小さく、復元径は13.7cmを測る。巴の頭部は大きくならず、また頭部の位置は互いに離れる。尾は長く頭部の反対側付近までのびて圓線を形成する。珠文は24式よりも大きい。周線は太く突出が大きい。

胎土には砂粒を含む。瓦質で黒灰色を呈するものから明褐色を呈するものまで焼成は幅がある。瓦当の文様から14世紀代と考える。

8点の出土であるが、多くが南門・中門調査区の池および造成土から8点の出土である。講堂調査区包含層、南門調査区石垣裏・瓦だまり上層などから出土しており、講堂と南門に用いられたと判断する。

## 軒丸瓦26式 (図190、図版40-3)

224。側線は表面が剥離しているものの、断面下端付近で端になるとみてよい。復元径は14.0cmと推定される。巴の頭部の位置は離れ、尾部は細くなつて圓線に接する。珠文は小さい。周線は低く幅広である。224は南門調査区南部の池造成土からの出土であり、他に同型式とみてよい破片1点が講堂調査区から出土している。後述の軒丸瓦29式よりも周線が低いことから、この型式はそれよりも後出する可能性がある。224は南門に用いられた可能性を考えている。

## 軒丸瓦27式 (図190、図版40-4)

225・226。瓦当径16.4cmと大きい。後述の軒丸瓦29式に似るが珠文の数が少なく、そのため珠文の間隔が広く、また、巴の巻きが逆である。巴の頭部は丸く、尾は細長く全周の2/3ほどの長さにのびる。それの外側に圓線がめぐる。周線上面は平滑である。丸瓦の接合にあたって瓦当裏面に細い沈

線で細かい格子状に刻みを入れる。

丸瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面には糸切り痕が残る。講堂調査区からの出土であるが、調査区東部の包含層に偏っており、29式と混在する出土状況は示さない。29式に先行するのか、軒平瓦34式と組み合い局部的な補修に用いられたため出土位置が偏ったのか不明である。軒丸瓦29式と大きな時期差はないと考える。

#### 軒丸瓦28式（図190、図版40-5）

三巴文をもつと思われるが、周縁から珠文部分にかけてしか遺存しない。珠文の間隔は広い。瓦当面には細かい離れ砂が見られる。褐色かがった灰色を呈しており火を受けているのかもしれない。なお、断面は丸瓦部の端近くになるため、ややゆがみをもつ。

#### 軒平瓦29式（図190、図版41-1）

228～231。[軒平瓦X1式]。連珠文の軒平瓦である。228の中央近く、229の左側では2つの珠文の間にキズを生じており珠文がつながる形となる。これをもとに全形を復元すれば瓦当幅23.2cm、瓦当厚3.9cmである。頸は貼り付けによって形成されており、その部分で剥離を生じた230・231では平瓦部先端に粗い格子（230）、斜め（231）の刻みが施される状況が見られる。瓦当外区は未調整に近く、上側や脇では瓦筋端部によって生じたとみられる低い段差が見られ、瓦筋は瓦当よりもやや小さい。

瓦当面と平瓦凹面に離れ砂とみられる微砂が見られる個体がある。また、瓦当上縁に面取りを行うものもある。凹面・凸面ともに糸切り痕が見られる。また、凹面には幅約3mmの無文叩きがなされており、凹型台の上で整形がなされたとみられる。

硬質の焼成であるが、炭素の吸着の度合いには差があり、229・230は灰色、228・231は炭素を吸着してやや暗い発色を示す。胎土は微砂・小礫を含む。

出土破片数は比較的多いが軒丸瓦24・25式と同じく多くが南門・中門調査区の池等からの出土である。230は南門瓦だまり上層からの出土であり、他に講堂調査区からの破片があり、講堂と南門に用いられたとみてよい。瓦当幅が狭いことから径の大きな軒丸瓦と組み合うとは考えにくい。径の小さな軒丸瓦は24・25式であり、胎土および破片の出土量からみて軒丸瓦25式と組み合うと考える。この型式を14世紀代とみて問題ないとと思われる。

#### 軒平瓦30式（図191、図版41-2）

頸貼り付け式の小形の軒平瓦である。講堂調査区から1点、南門調査区から2点の出土で、南門調査区では3点が石垣裏からの出土である。

232右側の宝珠様の文様が中心飾りとなり、その右側に233が続く。内区の幅が1.5cmと狭いこともあり、文様は簡略である。わずかにうねりながらのびる主葉に葉、次に花文かと思われる表現が配置され、茎の先端が反転する。周縁は上側が広く、上端は面取りがなされる。また、周縁にはナデが施されるが脇あるいは上側の脇近くには瓦筋の痕跡が小さな段となって残る。頸部の幅は個体によって差があり、233では狭い。平瓦から剥離した頸部233では上面に平瓦側に施された粗い格子刻みが転写の状態で認められる。

軒平瓦29式と同様、平瓦凹面には無文叩きが施されておりその下に薄く糸切り痕が見られる。胎土には2～3mm、まれに最大8mmの砂粒を含む。焼成は灰色で堅緻なものと白色でやや軟質なものがあり、南門調査区出土のうち2点は火を受けているようである。瓦当厚4.0cm、復元幅20.0cmである。きわめて稚拙な瓦当文から年代が軒平瓦32式よりも下がる可能性もあるが、軒丸瓦24ないし25式に

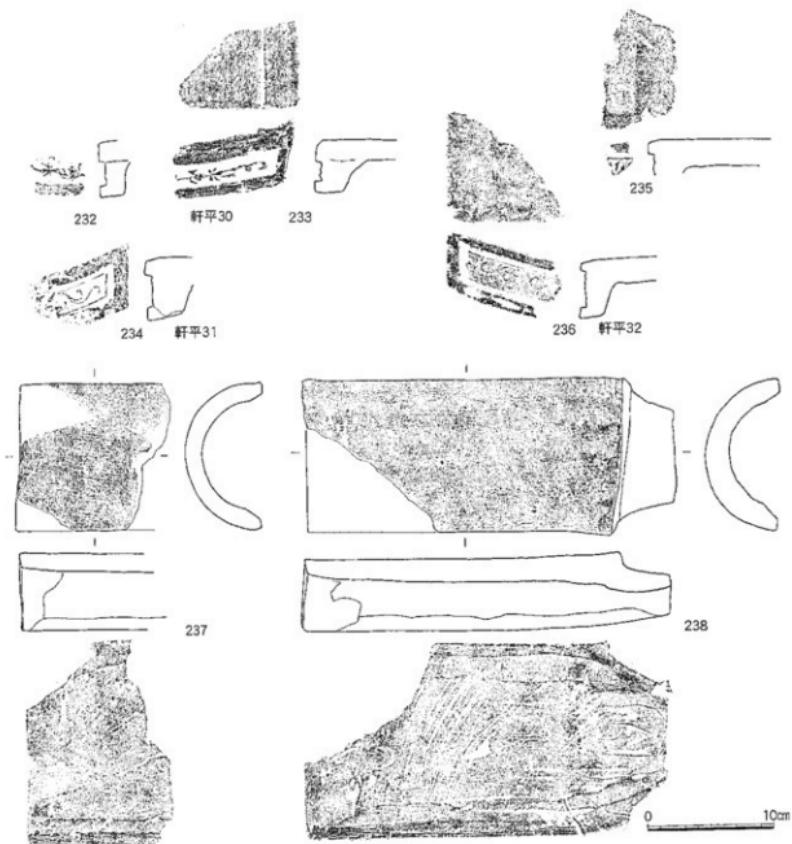


図191 軒平瓦30~32式・丸瓦 (1/4)

組み合う可能性が強いと考える。

#### 軒平瓦31式 (図191、図版41-3)

234。右端の破片で、唐草の先端部と界線が残る。これも南門調査区石垣裏からの出土である。周縁はナデ調整である。平瓦部凹面は布目がナデ消されている。2mm以下の砂粒、少量の小礫を含む。焼成はほぼ瓦質である。

#### 軒平瓦32式 (図191、図版41-4)

236。左端部の破片である。南門調査区石垣裏込めから1片のみの出土である。文様そのものがきわめて細い線で構成されることに加えて表出が良くないため、文様はかなり不鮮明である。細い唐草が破片内で3回反転し、さらに端で小さく反転する。内区の端には界線が配されるが脇にはめぐらず上

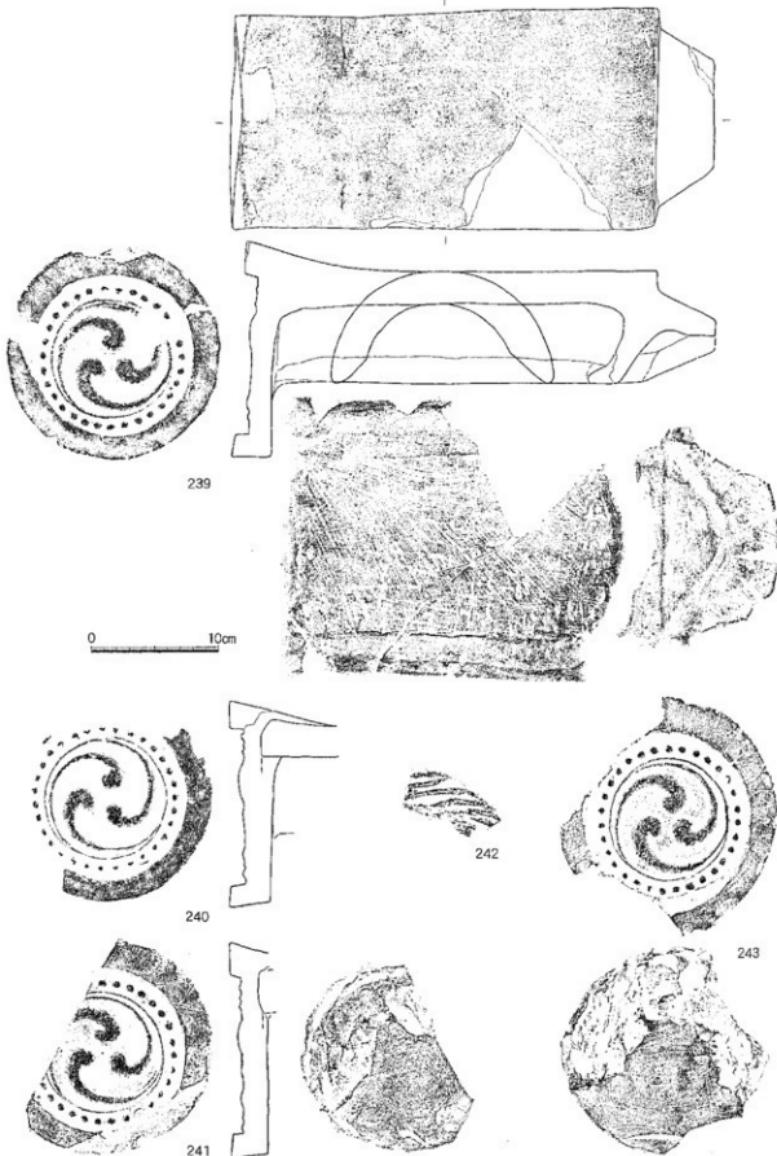


図192 軒丸瓦29式 (1/4)

下のみである。内区には細かい離れ砂が見られる。周縁上面の調整は簡略で凹凸をもつ。

平瓦部凹面には細かい布目が見られ、部分的にナデが加えられる。凸面の調整は縱方向のナデである。微砂粒を少量含む。瓦質で黒色を呈しやや軟質の焼成で、破面は均質な白色である。15世紀～16世紀初めとみられる。

なお、235は瓦当部がわずかに遺存する破片で、内区の一部と界線、周縁が残る。内区の文様は花文の一部の可能性がある。この型式に含めたが、別型式になる可能性もある。平瓦部凹面の調整はナデである。

軒丸瓦26式・28式が南門に伴うとみなせば、軒平瓦31式や32式が組み合うとみて支障ないと考える。

#### 九瓦（図191、図版42）

237は再建講堂基壇の溝9から出土した破片である。小振りで幅12.1cm、高さ6.3cmを測る。凸面にはナデが施される繩目叩きがかなり消え残る。凹面には糸切り痕と布目が見られる。瓦質でかなり硬質の焼成である。

238は南門中門調査区池南部堆積から出土したもので、南門に伴うものかもしれない。全長30.0cm、幅12.4cm、丸瓦部長さ25.2cmを測る。凸面の玉縁近くには繩目叩きが見られるが、基本的に縱方向のナデが施される。凹面には糸切り痕が残る。良好な焼成で、瓦質にはならず灰色を呈する。

この2点の丸瓦は幅12cm強であり、また、胎土の特徴から軒丸瓦25式に組み合うとみられる。237は出土遺構から再建講堂の早い段階で用いられたとみられる。

軒丸瓦23式・軒平瓦28式の鎌倉時代前半に講堂が再建された後、中世を通じてそれが維持されていったことをこれらの瓦が示している。

#### （11）中世瓦3

以下は再建された講堂に伴って大量に出土した瓦である。焼土を伴い、また火を受けた瓦も多く、16世紀後半の火災によって焼亡した堂宇に用いられていたものである。

講堂付近の瓦だまりを形成しており、そのほか井戸や礎石の抜き取り穴内からも大形破片が多量に出土している。いずれも瓦質で表面は炭素を吸着して黒色を呈し、破面は白色～灰白色である。胎土には微砂を含む。

#### 軒丸瓦29式（図192、図版41-5）

239～243。[第XI型式]。239が全形を把握できる資料である。全長39.0cm（瓦当下端がやや前に出ており上端で38.1cm）、丸瓦部長さ34.2cm、瓦当径17.6cmを測る。

凹面の後端には軒平瓦の鰐状部を受ける滑り止めのための横帶が設けられている。

瓦当文は三巴を主文とするもので、巴の頭部は丸く、それからやや反転しながら尾が伸び、尾は半周して圓線に接続する。珠文は径6mmと小さく、密に配される。周縁は比較的高く上面幅2.3cm前後で、平滑に仕上げられる。瓦当面には細かい離れ砂が施される。瓦当裏面の調整も丁寧なナデである。粘土がよく接合しているため丸瓦部と瓦当の接合手法はわかりにくいが、240・241では丸瓦接合部から粘土接合面が瓦当裏面の内部に入っている。丸瓦を接合して後に瓦当裏面に粘土を補充している可能性がある。丸瓦接合部は平滑な面をなすもの（241）と、刻みを加えるもの（243）とがある。また、丸瓦部先端も平滑なものと242のような深い刻みを施すものとがある。

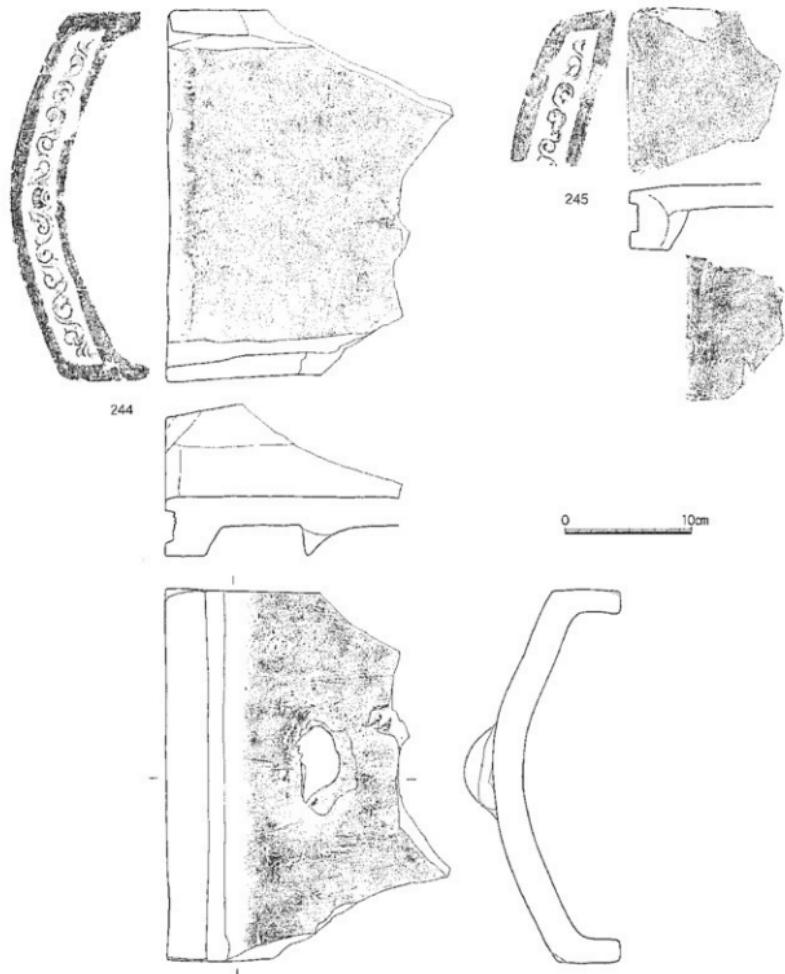


圖193 軒平瓦33式 (1) (1/4)

丸瓦部凹面には糸切り痕と布目が見られ、布目には1.3cm前後の方眼をなして紐が見られる。凸面の調整は縦方向のナデで、後端付近に細かい繩目叩きが見られる。

#### 軒平瓦33式（図193・194、図版41-5・44-1）

244～248。〔第X型式〕。中心飾りに宝珠を置き、その両側に5回反転する唐草を配するもので、唐草の端部は短い子葉が反転気味に斜め上に向かう。周縁の上面は平滑である。瓦当幅30.6cm、瓦当厚4.3cmを測る。全長は246で34.5cmを測る。

瓦当部は平瓦部の先端を斜めに形成し瓦当部の粘土を接合する瓦当面貼り付けの手法が用いられる。

また、両端に軒丸瓦を受ける三角の鱗状の突起（以下鱗状部とよぶ）が設けられるものを基本とするが、245のようにそれを設けないものも少量認められる。鱗状部の大きさは246で高さ7.1cm、基部幅24.1cmを測る。拓本には表れないが、平瓦部と鱗状部の折損面には径1mmの小孔が多数見られ（図版44-4）、細い植物の茎あるいは松葉などを芯にして鱗状部の製作を行ったとみられる。また、平瓦部の鱗状部の下方では247・248のように凸面側に薄く粘土を貼り付ける状況がみられ、通常の平瓦とは製作手法がやや異なる可能性がある。

凸面の中央、瓦当に近い位置にはすべり止めの突起が設けられる。高さ2.8cm、幅5.8cmで半円形の立面をなすように形成される。

平瓦部凹面の調整は横方向のナデ、凸面の調整は縦方向のナデである。

#### 軒平瓦34式（図195、図版41-6）

250～252。軒丸瓦29式・軒平瓦33型式と同じ瓦だまりから出土しており、火災による変色を生じているものを含むことから、それらとともに用いられていたことは確実である。ほぼ完形の250は長さ34.9cm、瓦当幅29.2cm、瓦当厚5.9cmで軒平瓦29型式の法量にほぼ等しい。なお、狭端推定幅は28.0cmで、平面形は長方形に近い。

瓦当文は5弁を中心飾りとし、5回反転する唐草を左右に配する。周縁は脇が上下両側よりもやや広くなる。また、その上面は平滑に仕上げられる。平瓦部の後端近くには径11mmの釘孔が設けられており、250では一边6mmの釘の一部が遺存している。

平瓦部凹面の調整は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。

#### 丸瓦（図196、図版44-2）

253～255。254は仕切りが設けられており、軒丸瓦29式の後方端部である。

丸瓦253は凹面に糸切り痕と布目、たるみをもつ吊り紐が見られる。紐は留め箇所を除いて表出する。凸面は縦方向のナデで、それに先行する細かい繩目叩きが見られる。255は棟近くで用いられる無段式の丸瓦で、玉縁となるところを丸くおさめる。

#### 平瓦・道具瓦（図197～199、図版45）

平瓦の破片は多量に出土したが、形状をうかがうことができるのは256と260である。

256は長さ37.0cm、厚さ2.0cm、260は長さ39.2cm、推定広端幅31.0cm、推定狭端幅28.5cm、厚さ1.9cmである。いずれも凹面は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。

道具瓦のうち257は丸瓦の側縁中央に弧状の割り込みを設ける。258は面戸瓦で幅9.2cmを測り、先端を台形に切りそろえ凹面側は面取りを行う。259は雁振瓦で、玉縁部の基部幅11.3cm、長さ4.1cmである。凹面には糸切り痕が顕著に残り、凸面の調整は丁寧なナデである。

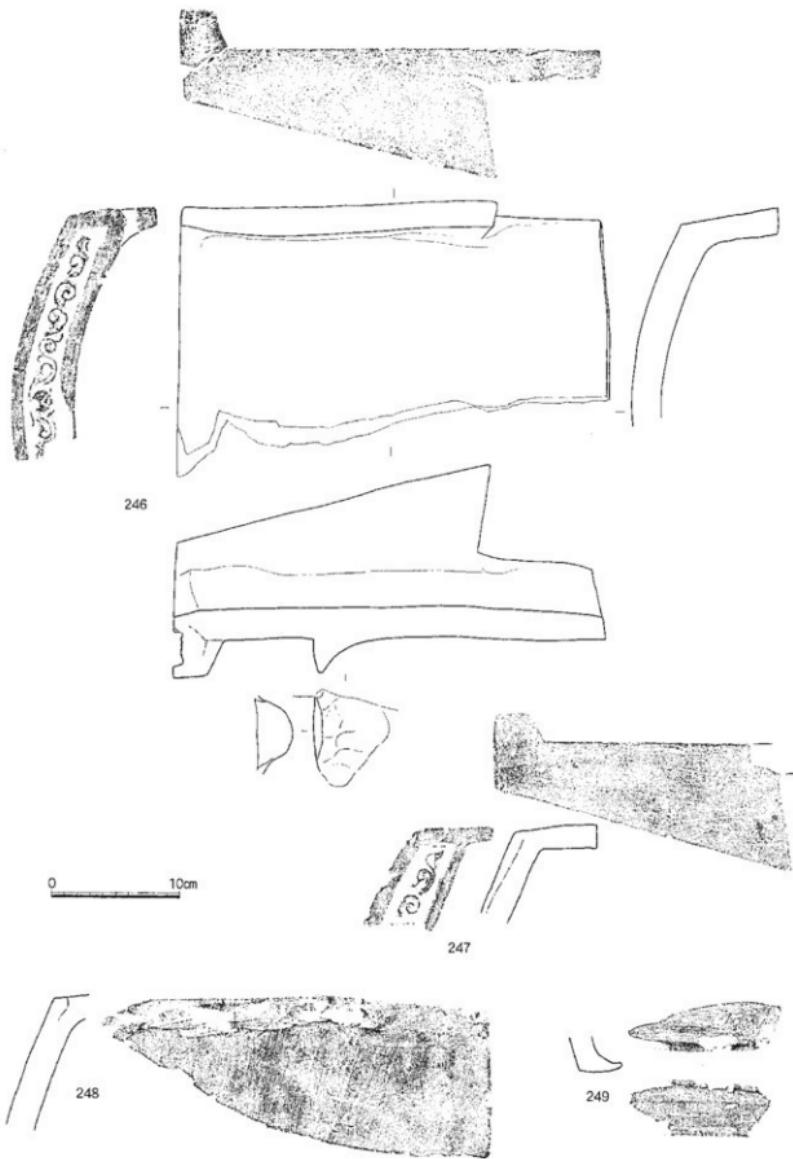


図194 軒平瓦33式（2）（1/4）

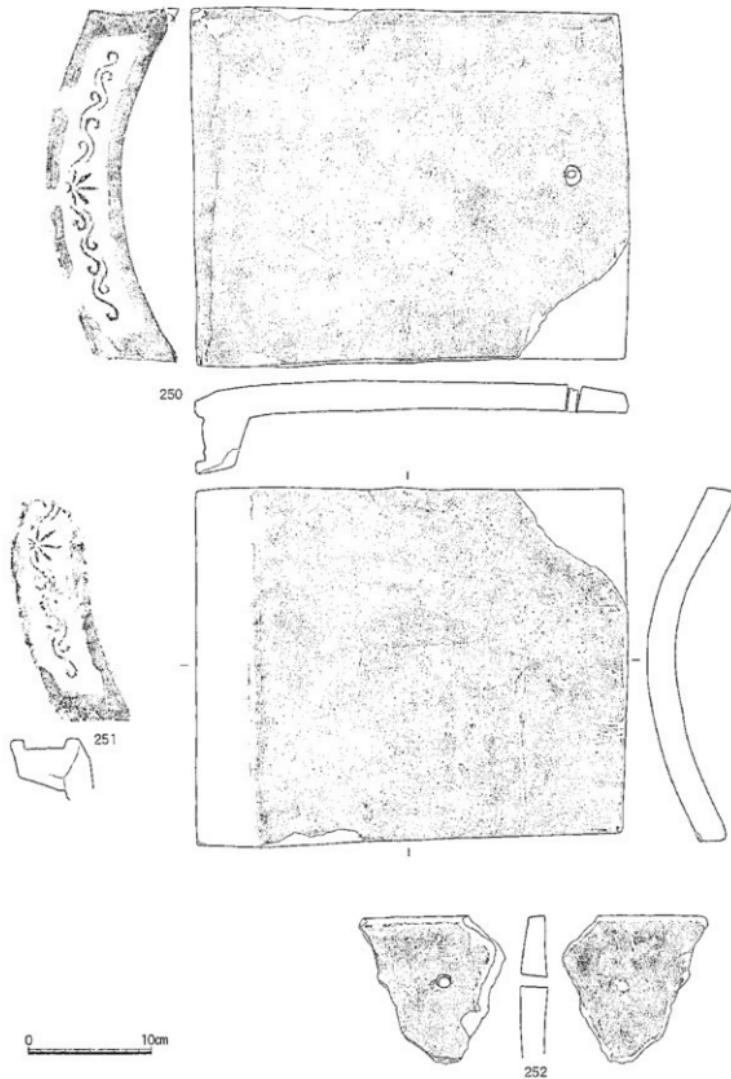


図195 軒平瓦34式 (1/4)

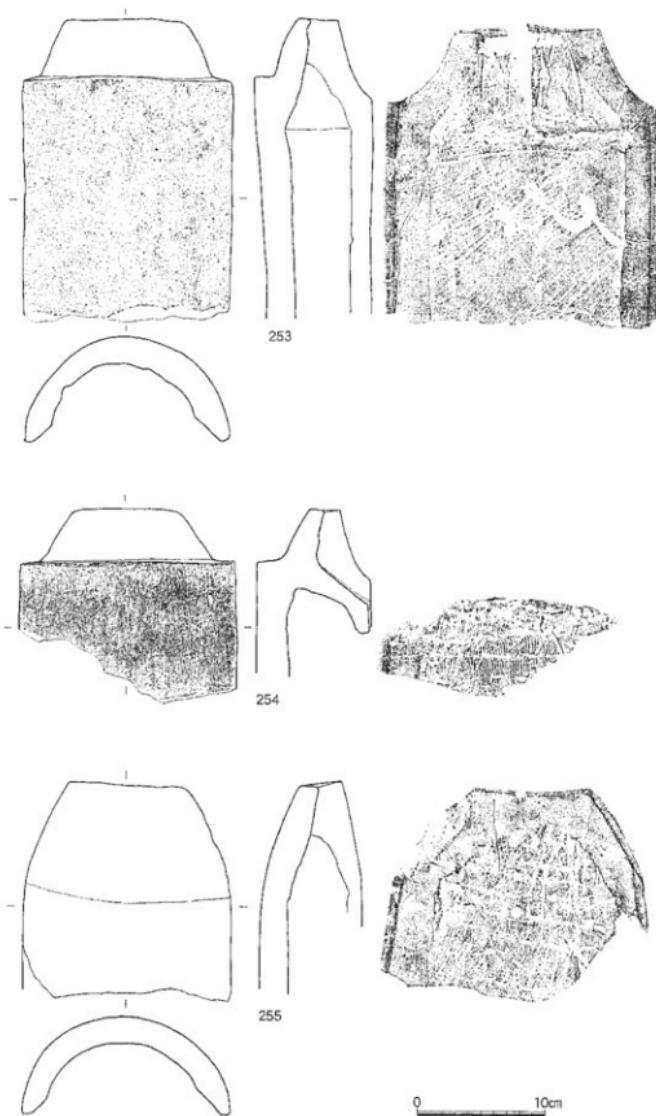
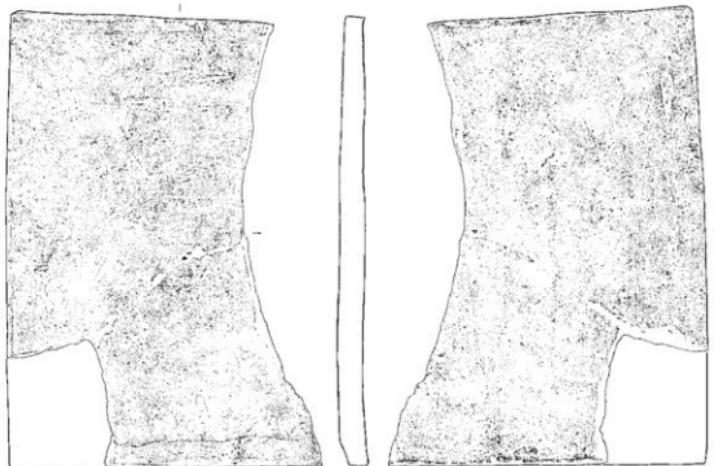


図196 丸瓦 (1/4)



256

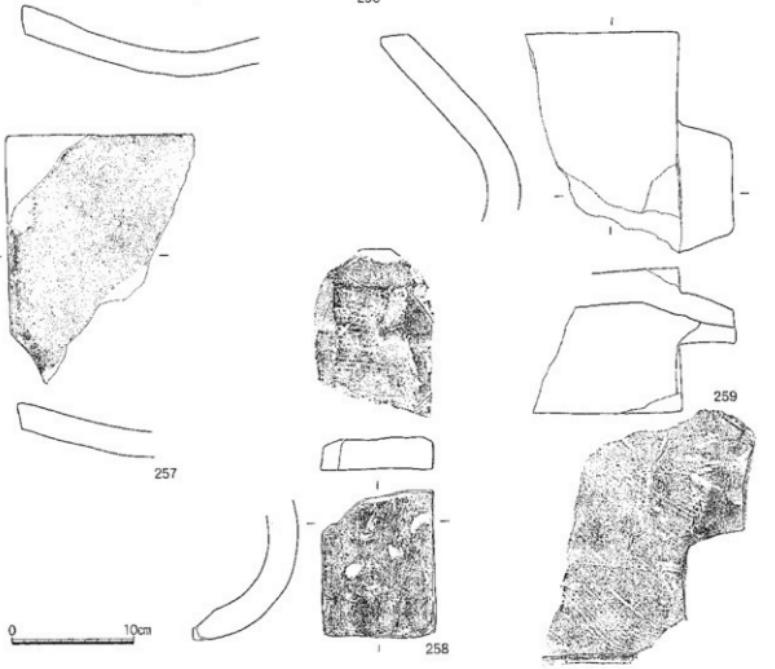


図197 平瓦（1）・道具瓦（1）（1/4）

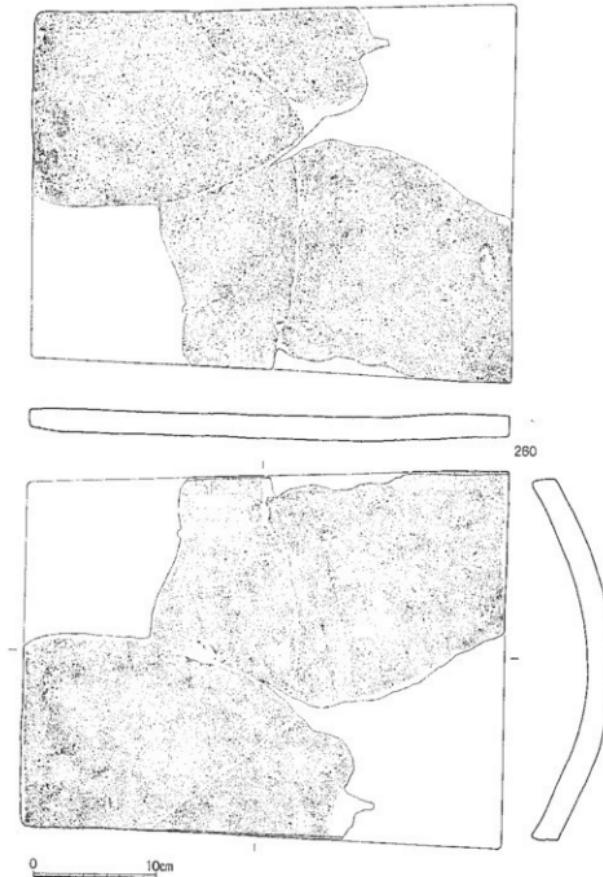


図198 平瓦（2）（1/4）

261は道具瓦で、幅9.0cm、厚さ3.1cmを測り、上端はやや斜めになり左側は丸みをもつ。破片右寄りの位置に器形と相似形の輪郭が描かれ、その中に円文が押捺される。裏面中央のやや窪む部分はケズリのちナデ、側縁近くは糸切りのようである。

#### 鬼瓦（図199・200、図版45）

鬼瓦の破片はかなりの数が出土しているが、小片となつたものが大部分であり復元はむずかしい状態にある。ここに示したものでは約半数が瓦質の色調をとどめるが、破片全体ではそうしたものは少数で、大部分が褐黄色に変わっており、火災の炎を受けて破碎したとみられる。

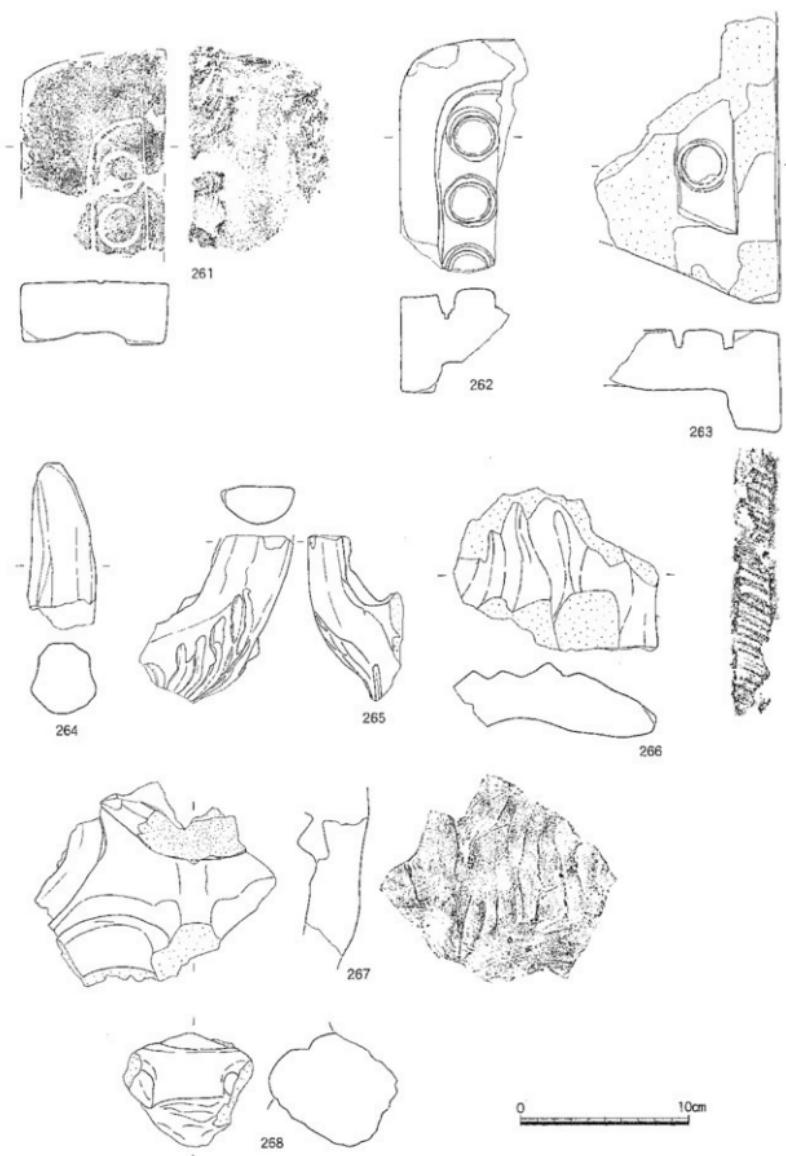


図199 道具瓦（2）・鬼瓦（1）（1/3）

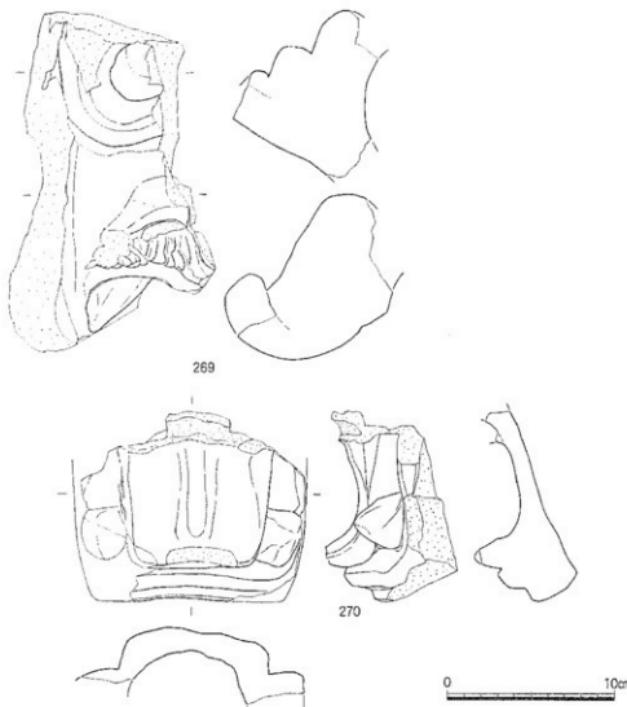


図200 鬼瓦（2）（1/3）

262・263は鬼瓦側縁部の破片で、262は周縁よりも一段低い位置に径2.5cmの珠文をめぐらせる。珠文の基部には円形の圧痕がめぐっているが、珠文と位置がややずれる場合があり、円文で位置を決めて別作りの珠文を貼っているようである。なお、263の裏面の調整はナデであるが、周縁部上面には糸切り痕が顕著に残る。

264は鬼の角、265は角の基部付近とみられる。267は断面位置を軸線として左右に下降するカーブを描いており、立体的な鬼の表現がうかがわれる。鬼面の額付近の破片で、破片左下に目が位置すると考える。268は鼻とみられる。269が最も大形の破片で、鬼面の左端が残る。丸い目と鼻の下の鬚、大きく開いた口からのぞく牙が見られる。鬼面は中空で立体的である。270も立体的な鬼瓦の一部で、大きく開いた口の下頬部分である。舌と牙が見られる。この破片のみ赤色に色が変わっており、器表の状態もやや異なり、他の多くの破片とはやや焼成が異なっていたのかもしれない。

以上が16世紀と推定される再建講堂の焼失時の瓦である。軒丸瓦29式と軒平瓦33式のセットが主体を占め、軒平瓦34式が少量混じるという構成である。軒平瓦34式と軒丸瓦27式が組み合う可能性

も考えられるが、軒丸瓦27式は講堂東部の包含層にまとまり29式と共に存しないためそれよりも先行すると推定した。ただし、局部的に用いられたため平面分布が異なる可能性もある。軒丸瓦29式には凹面にループした吊り紐が表出した状態で見られる。また、軒平瓦33式は瓦当貼り付け技法が用いられており周縁は平滑に仕上げられる。これらの点から軒丸瓦29式・軒平瓦33式の年代はおおむね15世紀後半で、軒平瓦34式はその補修瓦とみられる。これらはすべて滑り止めや釘孔が設けられており建物の屋根は勾配の強いものであったとみてよい。中世の講堂建物がどのような変遷をたどったかの復元はむずかしいが、15世紀後半に屋根の勾配が急なものになったとみられ、大規模な改修があったと推定できる。奈良時代の礎石の配置が変えられたのもこの時点であった可能性があると考える。

#### (12) 近世瓦 (図201)

271は講堂調査区石垣裏から出土した軒丸瓦で、瓦当径12.8cmを測る。周縁は広く平滑で、珠文は大きい。やや軟質の瓦質で灰色～灰黒色を呈し、砂粒のごく少ない胎土である。17世紀代とみられる。

272も同じく講堂調査区石垣裏から出土した軒平瓦で、三巴の中心飾り付近の破片である。胎土・焼成とともに271と同一である。17世紀代とみられる。

273は講堂調査区の近世溝から出土したもので、完全な瓦質で表面は光沢のある黒色、破面は白色である。江戸時代後期、文化文政期以降のものである。

これらは講堂の焼失後に設けられた小堂に用いられたものとみられる。

#### (13) 文字瓦・戯画瓦 (図202~205)

274は講堂東側北面回廊付近に形成された近世の溝から出土した平瓦破片である。講堂ないし回廊に用いられていた可能性が強い。焼成の良好な平瓦で表面は暗灰青色、破面は暗赤色を呈する。凸面には鰐目叩きが施されており創建期・奈良時代の平瓦である。

凹面の右端から3行にわたって文字が刻まれているが、上下を欠損する。また瓦の中軸線は右から3行目付近であり、左にさらに2行があった可能性がある。文字は流暢に書かれており、次章で述べる文字瓦とは全く異なる。文字は焼成前に刻まれており、右端の行では周縁部整形のヘラケズリが文字の端にかかるており、製作の途上に文字が書かれたことがわかる。

文字は右から1行目：男奴床□、2行目：之田奈比、3行目：□召志良である。2行目第1字は之以外の可能性もあり、2字目は田のほか由の可能性もある。奈良時代の文字資料であり貴重な資料であるが、解読については今後の課題とせざるをえない。



図201 近世瓦 (1/4)



図202 文字瓦・戯画瓦（1）（1/2）

275～285も奈良時代の瓦であり、275～281が平瓦、282～285が丸瓦である。これらは戯画その他が刻まれたものであるが、図示したもののがそのすべてであり、瓦全体のなかでごく少量である。275～277は凸面に棒状工具の先端で幅広の沈線を刻む。線の配置は不規則である。また、280・281は鋭利な工具の先端で弧状の刻みを連続して設けている。

278は稚拙な絵画のようであるが、何を表現しているか明確でない。279は平瓦の端部、おそらく狭端面に×を記しており、後述の文字瓦と共通する性格のものかもしれない。

282は丸瓦凸面中央付近に文様を記したもので、工具先端で4～5本の浅い沈線を1単位として方向を変えながら縦方向に刻む。一方、283は丸瓦凸面の側縁近くに記号状に刻む。棒状工具の先端で深い沈線が刻まれている。284は丸瓦凹面に弧線が刻まれるもので、蓮弁を描いているとみられる、285も丸瓦凹面の小片で、線はしっかりしておりある程度の広さをもつ文様の一部とみられる。

288は鎌倉時代の軒平瓦28式の狭端部破片で、凹面に隅から釘孔付近にかけてのびる沈線が複数見られる。286・

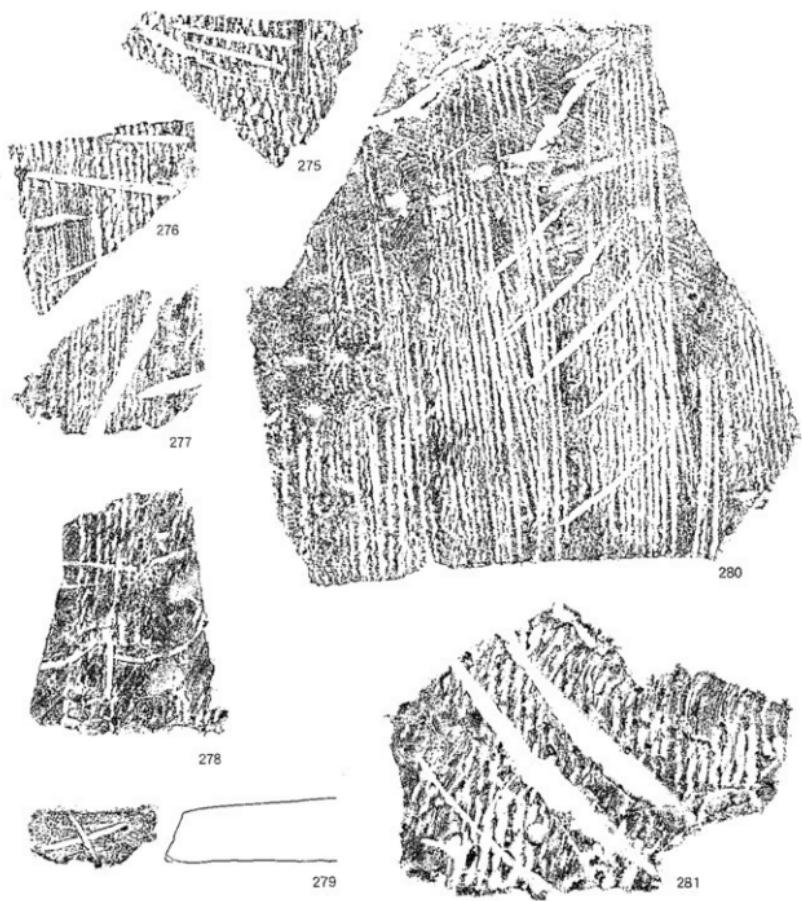


圖203 文字瓦・戲画瓦（2）（1/2）

287・289は平安時代後期の平瓦破片で、286には二重の弧線、287には複数の線による文様が見られる。289は軽いタッチで描かれた戯画の一部とみられるが、上側の主要部分が失われているため全体像は不明である。

290は室町時代後半、軒丸瓦29式の段階とみられる道具瓦の破片で、木葉が描かれている。



図204 文字瓦・戯画瓦（3）（1/2）

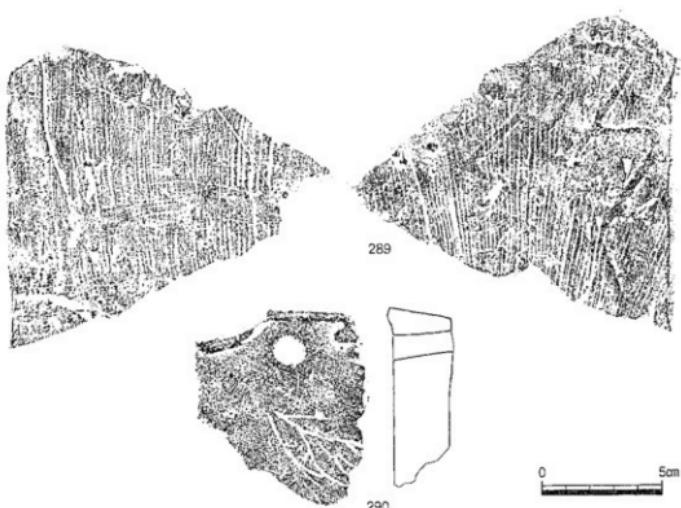


図205 文字瓦・戯画瓦（4）（1/2）

## 引用・参考文献

- 荒木誠一1940「奈良時代の寺跡」『改修赤磐郡誌』岡山県赤磐郡教育会
- 池田浩ほか1997『服部廃寺』長船町埋蔵文化財発掘調査報告2 長船町教育委員会
- 伊藤晃1991「備前」『新修国分寺の研究 第4巻 山陰道と山陽道』吉川弘文館
- 上原真人1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所
- 上原真人1987「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ—もの・ひと・みち—』帝塚山考古学研究所
- 上原真人1994「前期の瓦」『平安京提要』角川書店
- 上村和直1994「後期の瓦」『平安京提要』角川書店
- 大本啄壽1953「吉備古瓦別選 熊山その一」『吉備考古』第86号
- 岡本寛久1980「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』37
- 岡本寛久2006「半田鹿寺」『邑久町史考古編』瀬戸内市
- 岡山県教育委員会1995「松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99
- 尾上元規2006「東備地域における中世瓦の変遷」「来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』199
- 梶原義実2005「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『考古学研究』第52巻第1号
- 草原孝典2002「平城宮式瓦の展開」「新道遺跡」岡山市教育委員会
- 草原孝典2004「ハガ遺跡」岡山市教育委員会
- 草原孝典2006「川入・中振川遺跡」岡山市教育委員会

#### 第4章 遺物

- 小嶋博巳2000「日本廻国の旅と信仰」『浅草寺仏教文化講座』第44集 浅草寺
- 近藤喬一編1977『平安京古瓦図録』雄山閣出版
- 田代健二1988「備前市内探査の遺物について」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- 玉井伊三郎1941『吉備古瓦図譜』第式編
- 土肥経平1778『寸箋之應』
- 永山卯三郎1925「備前国分寺址」「備前国分尼寺址」『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5冊 岡山県史蹟名勝天然記念物調査会
- 花谷浩・毛利光俊彦・佐川正敏1992「瓦の変遷」『法隆寺の至宝－昭和資材帳－』第15巻 小学館
- 備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10 岡山県教員委員会
- 平井泰男1999「平安時代中期の瓦」「加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- 前田義明1993「平安宮内裏の焼亡と搬入瓦」『平安京歴史研究』
- 前田義明1994「中期の瓦」『平安京提要』角川書店
- 松本亮 江戸後期『東備郡村誌』
- 矢部秋夫1975「森末妙興庵寺址出土瓦」『瀬戸町史料集』岡山県瀬戸町
- 山崎信二2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所
- 山崎信二2003「大和における平安時代の瓦生産」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社

## 第2節 奈良時代平瓦・軒丸瓦の検討

備前国分寺跡から出土した瓦の大半は創建時期の奈良時代のものである。それらのうち平瓦にはしばしば文字が刻まれており、また、軒丸瓦からは多様な製作手法をうかがうことができる。それらを手がかりに瓦の生産体制について考えてみる。

## (1) 文字瓦

## 文字の特徴

奈良時代の平瓦にはしばしば「文字」が刻まれる。いずれも焼成前、完成時に刻まれたとみられ、文字の大きさは小さいもので縦3cm、大きいものは7cm程度である。刻まれる位置は291以降に示すように、294・311のように狭端側の場合もあるが、広端側を基本とする。1次から3次までの瓦総数約2100箱からの検出総数は210点である。この箱数は室町、平安・鎌倉時代の瓦を含んでの数字であるから奈良時代の資料に限ればより高い比率となる。破片の状態にもよるが、コンテナ数箱から10箱以内に1点程度の検出比率である。コンテナ1箱に平瓦2から3枚弱の破片が含まれるとみなせば、平瓦の10枚から20枚に1点という比率で文字が記されたということになる。

## 文字種

刻まれた文字の種類はほぼ限定され、一・二・三・四・八・十・上・I・O・rの10種であり、他に

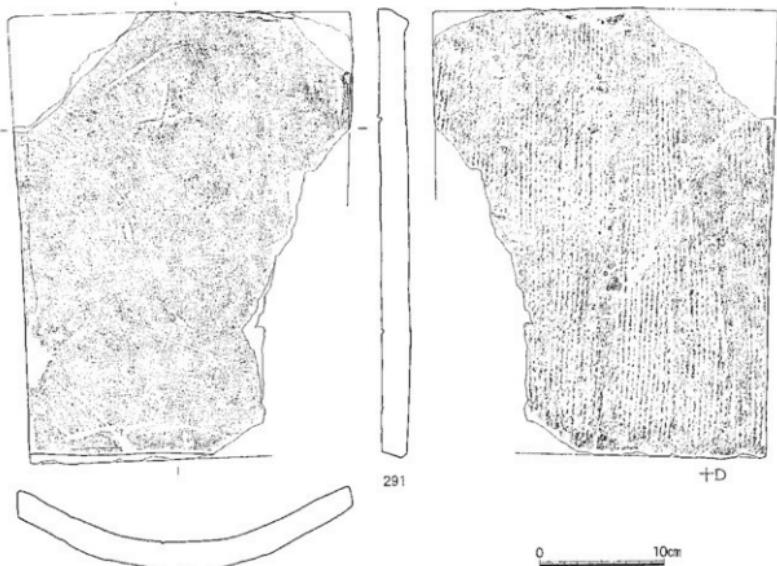


図206 文字瓦 (1) (1/4)

その他の可能性が考えられるものが若干ある。

数字と記号によって構成されるが、五・六・七は認められない。十は数字の十以外に、記号、あるいは七の変形とみることもできる。これらの文字ごとの数は均等ではなく、二と|が60点前後と多く、他は10から20点、少ない四は2点とばらついている。大部分がヘラ状工具の先端で刻まれているが、鋭利な先端を切り込むように入れるもの、先端が棒状で銳利ではないものなど多様である。四と○は先端の広い工具で浅く書かれる点で共通しており、あるいは○は四の簡略形であるかもしれない。ま

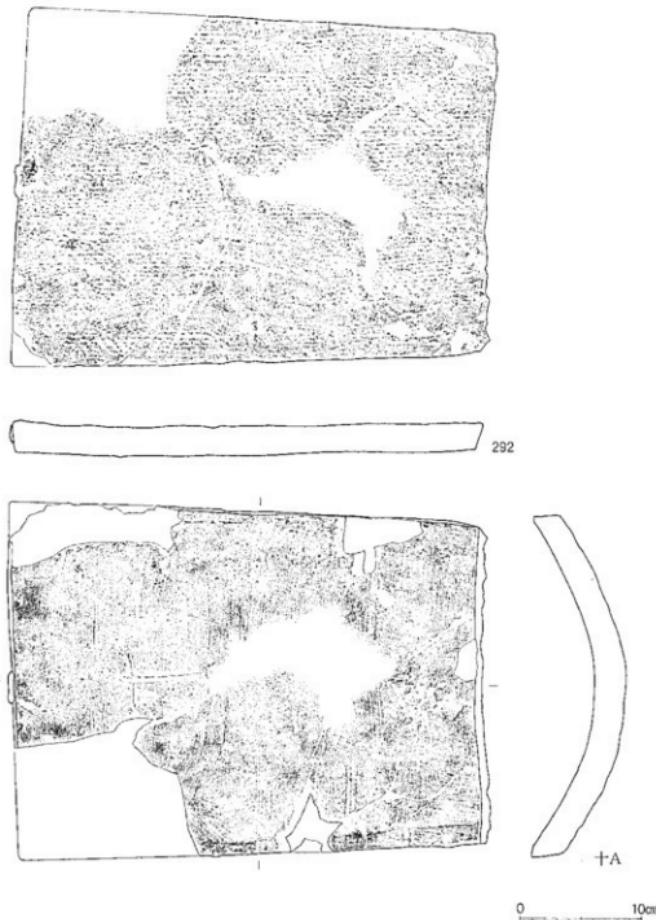


図207 文字瓦（2）（1/4）

た「は」はさらに太く、指頭による可能性がある。

#### 細別

注目されるのは、それぞれの文字が異なる筆跡によって構成されることである。画数の少ない文字が多く、特徴が出にくいか、八・上などを例にとれば、整った字形、いわゆる金釘流といった相違があり、○では梢円、正円、やや角があるものという差違を見ることができる。画数の少ない「」でも線の深さや起点、先端の処理に差が見られるし、二でも直線を二段に重ねたもの、「こ」に近いものと



293

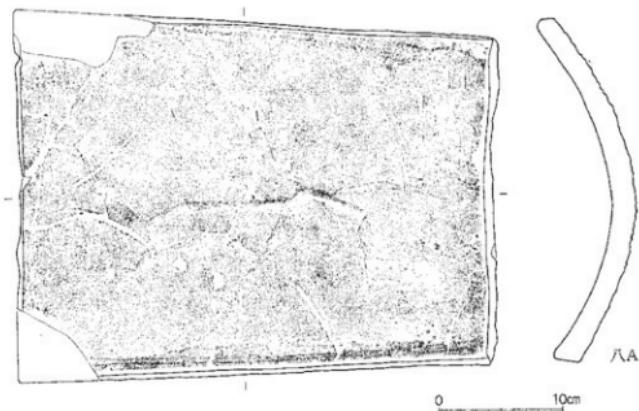


図208 文字瓦（3）（1/4）

といった相違がある。ただし、特徴が少ない一・二・|は区分がむづかしいものがある程度含まれる。

こうした筆跡による区分の数を示したのが図213であり、出土点数に比例して二と|で多くなる。そのため、個別の筆跡ごとの出土点数はおおむね数点となっており、著しく点数が多くなる筆跡は見られない。

瓦の生産がかなりの期間にわたっており、同一人物の筆跡が変わったという可能性も考えられるが、三や八のように文字の形状そのものが大きく異なるものが見られることから、それぞれの筆跡は個人を示すと考えられ、文字は瓦製作の完了段階で記されることからその個人は製作にあたった工人とみて

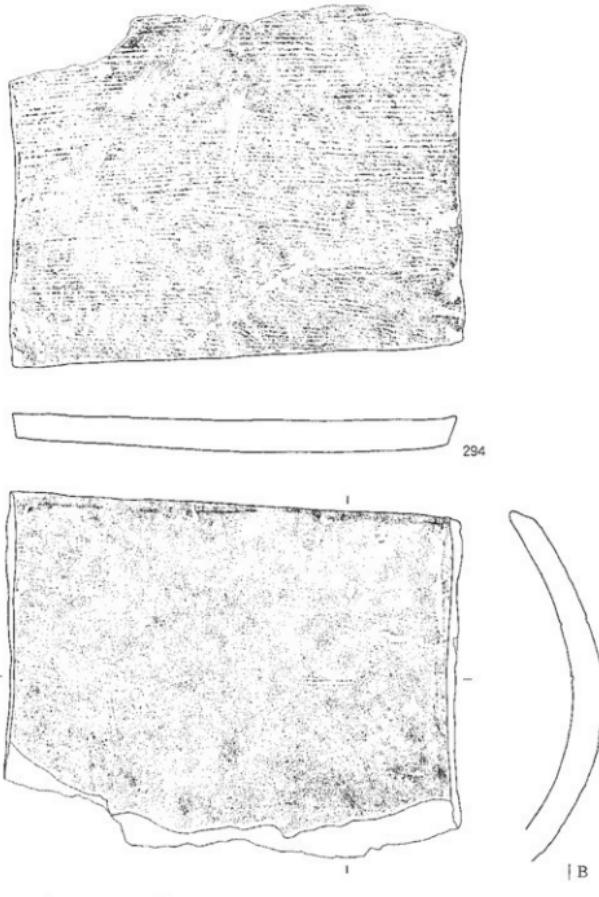


図209 文字瓦（4）（1/4）

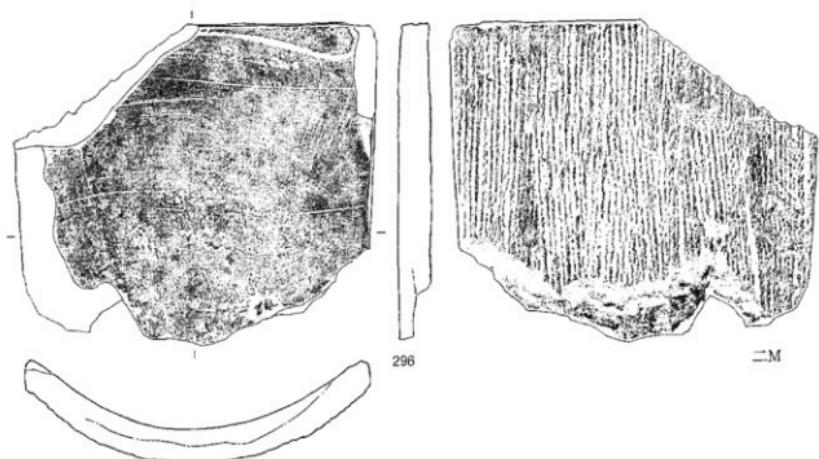
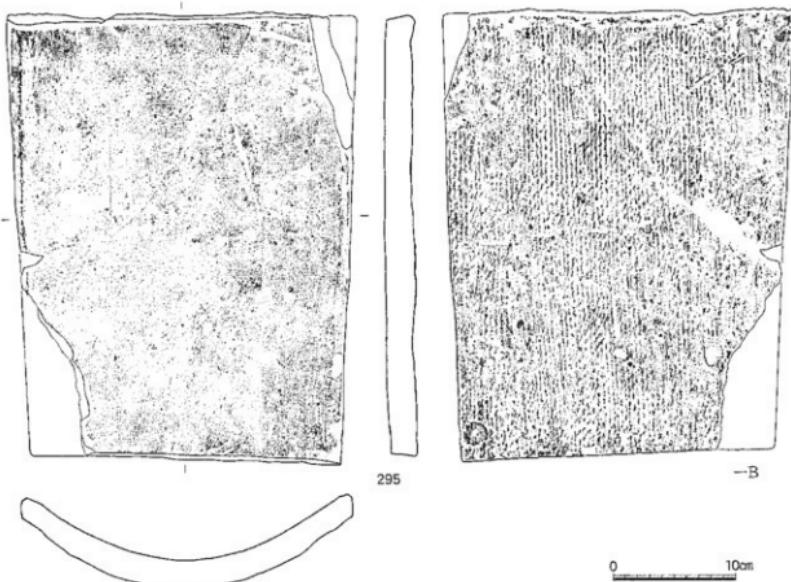


図210 文字瓦（5）（1/4）

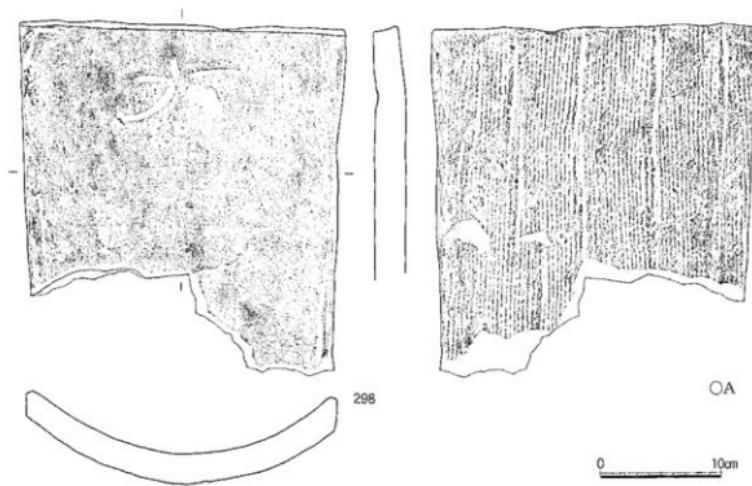
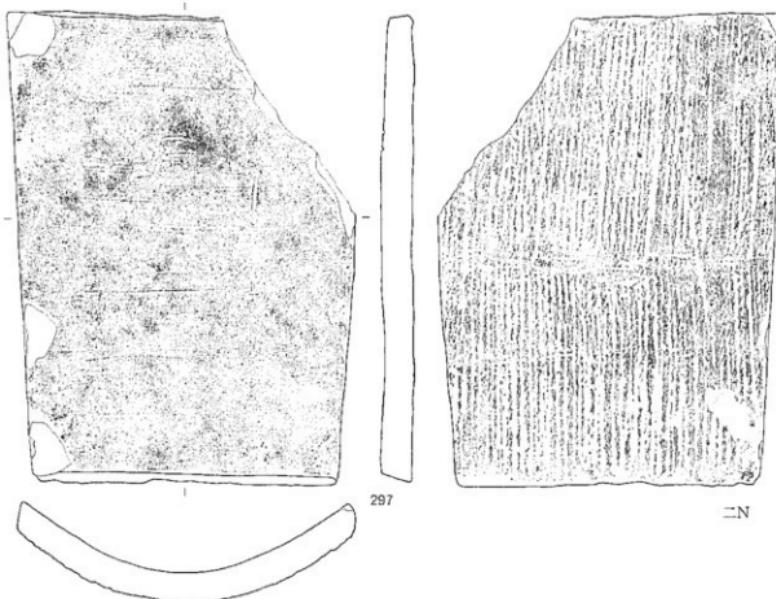


図211 文字瓦 (6) (1/4)

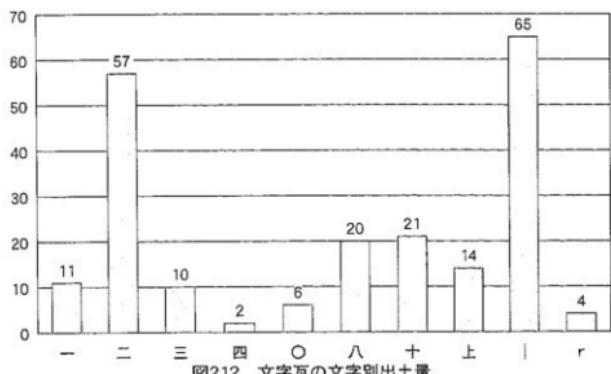


図212 文字瓦の文字別出土量

|   | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | 計  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 一 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 6  |
| 二 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 14 |
| 三 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 5  |
| 四 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| 八 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 8  |
| 十 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 6  |
| 上 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 5  |
| ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 12 |
| r |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3  |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 62 |

図213 文字瓦の細別

よい。つまり、同じ文字を瓦に記す工人が少ないものでは数人、多いグループでは10人以上いたと考える。

361は三A319の凸面の叩き目、363は三A362のそれである。同じ三A、つまり同じ筆跡と判断しているが、繩目の太さは異なり、叩き原体は別であったとみられる。したがって、361と363は製作の時期が異なり、その間に叩きの繩が取り替えた、あるいは道具が個人に属していなかったため別の道具を用いることになった、などが考えられる。

文字のうち三、八、上などは比較的整った字体と見ることができるが、そのうちの上341の筆順をみると(369)、最初に三画目の横棒を書き、続いて縦線、最後に斜めの斜線を記している。一画目と二画目の筆順は異なることはありうるが、三画目から書いていく筆順ではなく、これらが字としてではなく形だけが写された、つまり記号として記されたと理解できる。

#### 出土傾向

これら文字瓦の堂塔ごとの出土状態であるが、ある程度の偏在が指摘できる(表2)。三は出土量が少ないもののすべて講堂からの出土であり、金堂は二と|が著しく多い。さらに、塔は表には含めたものの暗渠等からの出土であり、文字瓦の確実に伴う例がないという大きな特徴をもつ。

#### 文字瓦の性格

以上の諸点から、備前国分寺出土の文字瓦は瓦製作工人の編成・作業にかかわるものと考える。す

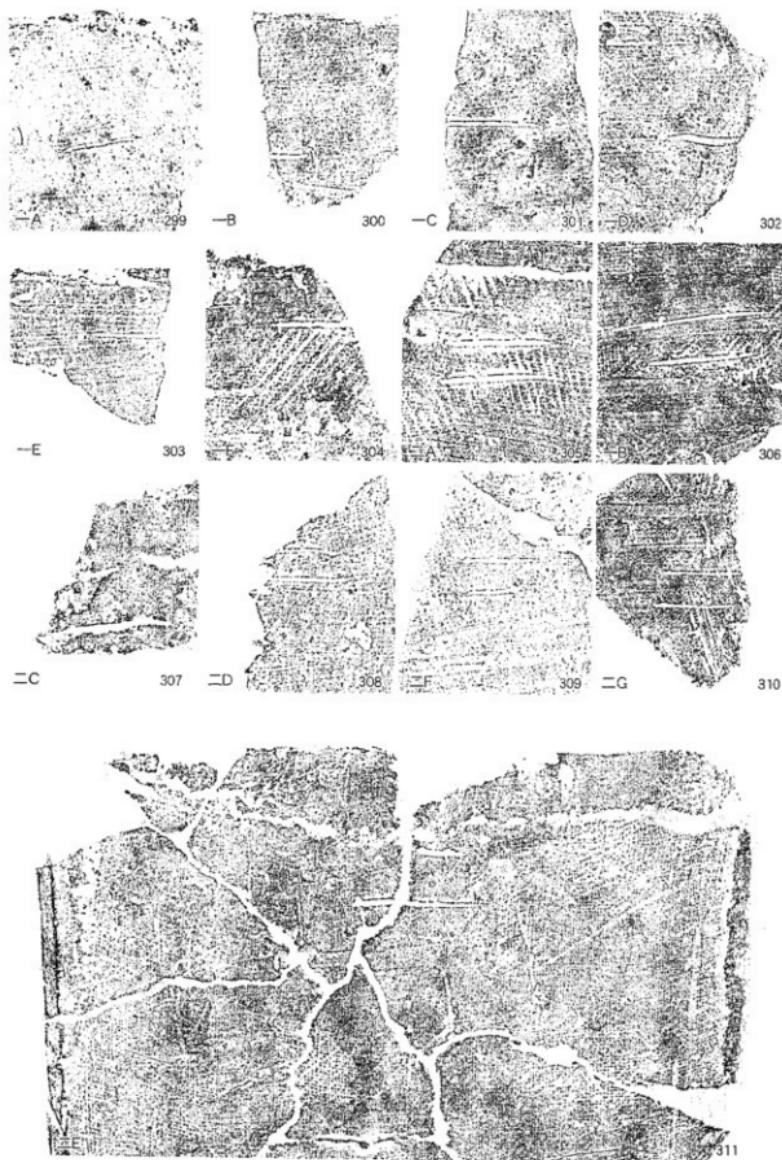


図214 文字瓦（7）（1/2）

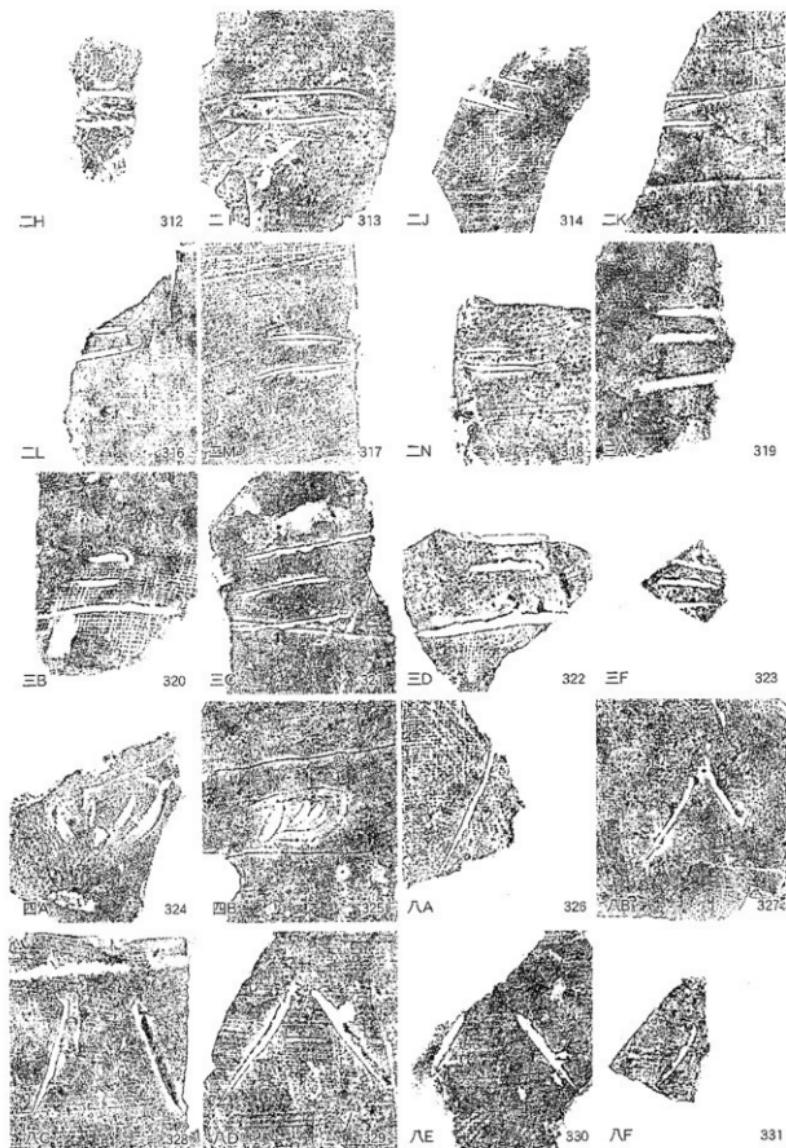


図215 文字瓦 (8) (1/2)

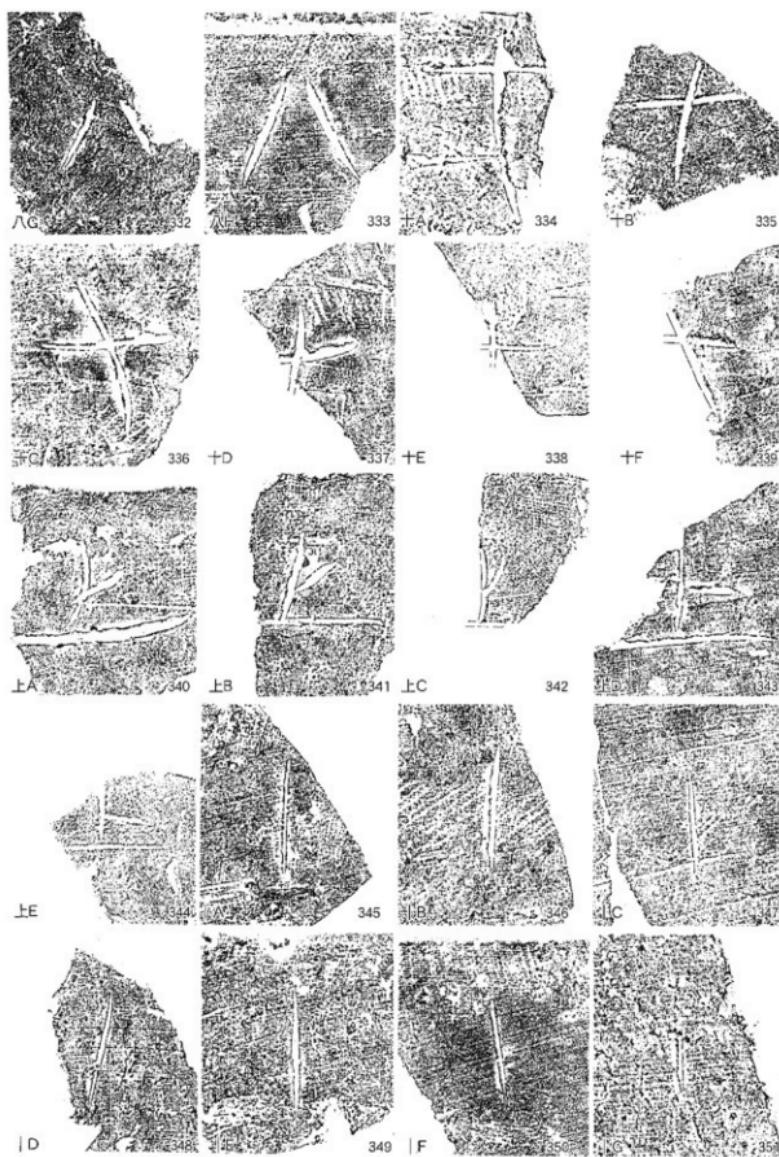


図216 文字瓦 (9) (1/2)

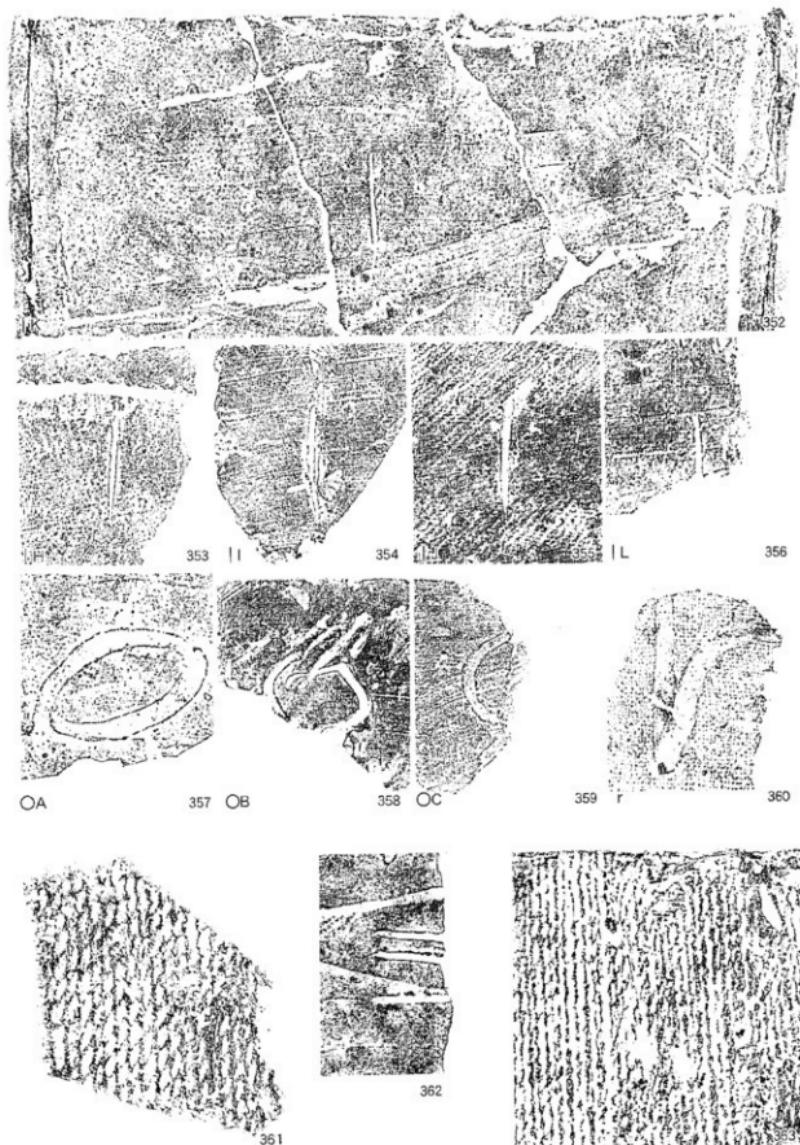


図217 文字瓦 (10) (1/2)

表2 備前国分寺跡出土文字瓦一覧

|              | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | 総数 |
|--------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 金堂 一         | 2 | 3 | 1 | 1 |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 6  |
| 二            | 5 | 4 |   | 2 | 1 | 2 | 6 | 3 | 2 |   |   |   |   |   | 24 |
| 八            |   |   |   | 2 | 3 |   | 1 | 3 | 1 |   |   |   |   |   | 10 |
| 十            |   | 6 | 2 | 1 | 4 |   | 2 |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| 上            |   |   |   | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| ○            |   | 8 | 4 | 3 | 6 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 25 |
| r            |   | 2 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 0  |
| 講堂 一         |   |   |   |   |   | 2 |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| 二            |   | 2 |   |   |   | 1 |   | 1 |   | 1 | 1 |   |   |   | 4  |
| 三            |   | 1 | 1 |   |   | 2 | 1 |   |   |   |   |   |   |   | 4  |
| 四            |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 八            |   | 1 | 2 |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 3  |
| 十            |   | 1 | 3 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3  |
| 上            |   | 3 | 1 |   | 2 | 2 |   |   |   |   |   |   |   |   | 5  |
| ○            |   | 2 | 1 | 1 | 2 |   |   |   | 1 | 1 |   |   |   |   | 7  |
| 回廊 T4 一      |   |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 二            |   |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 三            |   | 1 | 1 |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| 十            |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 上            |   | 1 | 1 |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   | 1  |
| T5 二         |   | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |   | 2  |
| 八            |   |   |   |   |   | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| T6 二         |   | 1 |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   | 1 |   |   | 1  |
| 八            |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 南門中門造構 一     |   |   |   | 1 |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   | 2  |
| 二            |   |   | 1 | 1 | 1 |   |   |   |   |   | 1 |   | 1 |   | 5  |
| 三            |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 十            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 上            |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| r            |   | 2 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 0  |
| 南門中門添堆積他 二   |   | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 | 1 | 3  |
| 三            |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 四            |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 0  |
| 八            |   |   |   |   |   |   | 1 |   | 1 |   |   |   |   |   | 2  |
| 上            |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| r            | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 0  |
| 南門中門添石塗裏込み 一 |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   | 1  |
| 二            |   |   | 1 | 1 | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 三            |   | ○ | 1 | 1 | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 4  |
| 七            |   | 二 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 | 1  |
| 四            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 五            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 六            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| 七            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| T13 二        |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |   | 2  |
| 八            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| T15 二        |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2  |
| 三            |   |   |   |   | 1 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1  |
| T16 一        |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |   |   | 1  |

(アミカケは分布の多い部分)

なむち、複数の工人からなる単位が設けられ、それが複数稼働する形で瓦の製作がなされ、それぞれの単位ごとの作業量を把握し、他の作業単位の製品と混乱することを避けるため単位ごとの符號として平瓦10枚から10枚数に1枚の割合でその順番にあたった工人によって文字が記されたと考える。文字の数が同時に勤いた工人単位の数を示すとすれば10となる。それが恒常的なものであったかどうかは不明であるが、大規模・集中的な生産であったとみてよい。なお、国分寺瓦を生産した窯はまだ判明していない。

先に塔塔によって文字瓦が偏在することを述べたが、これは生産された瓦がまとまって搬入され、仮置きされることなく作業箇所に運ばれて蓋かれたため、まとまることになったと考える。

こうした符号としての文字瓦は備前国分寺瓦の大きな特徴である。これは国分寺の造営が急速に進

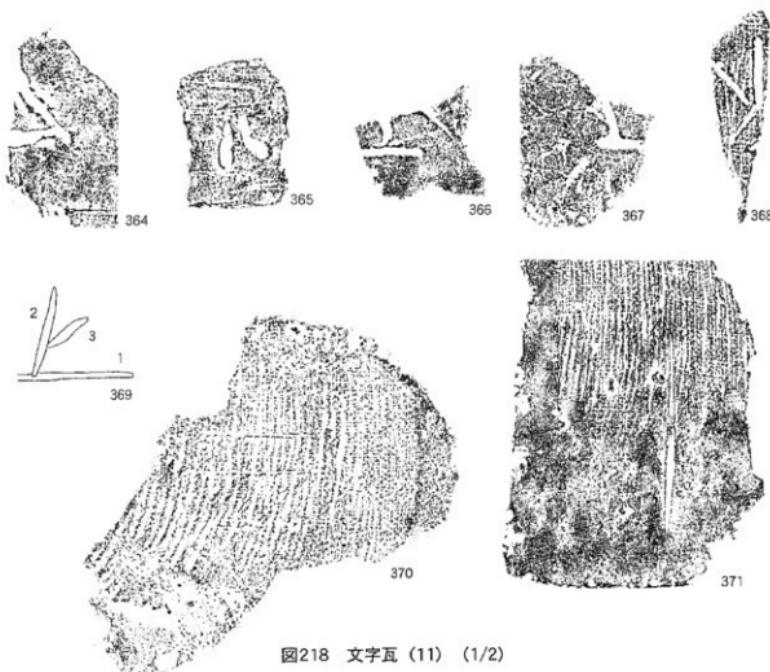


図218 文字瓦 (11) (1/2)

められた結果、短期間で多量の瓦が必要となり、それに対応するため大規模な工人の編成がなされたことに起因すると考えられる。作業にあたった下級の工人は識字層ではなく、長文の文字瓦274を記したのはそれらを統括する「領」や「司工」などと呼ばれた上級工人であったと推定される。

#### その他の文字瓦

上記以外の文字瓦として平瓦では364～368がある。いずれも平瓦凹面に記されている。

364は太く深い沈線で三角形の一部を記す。

365はごく小さくハ字形を記す。前述の文字瓦八とは文字の大きさが著しく異なるため別に扱つたが、八 I とすべきかもしれない。

366・367はそれぞれ漢字の一部とみられ、366は企などであろうか。368も漢字の一部のような表現であるが字の推定はむずかしい。沈線は浅く弱い筆致である。

部分的な破片でありそれぞれ1点しか出土していないため、ここでは文字瓦からは除いた。これらが文字瓦と同種であるとすれば、文字瓦の文字種はさらに多かったことになるが、出土量は僅少であり主要な構成文字種ではなかったとみられ、副次的・臨時に編成に加わった工人が用いたと考える。

370・371は丸瓦凹面に施文を行うものである。370は文字瓦二G、371は| Eとみられ、丸瓦に文字が刻まれることもあったことが知られるが、出土点数は少なく、確認できたのはこの2例のみであり通常は丸瓦には文字は刻まれなかつたとみられる。

## (2) 軒丸瓦 1式の製作工人一刻みの分類一

創建期の軒丸瓦 1式は出土量が多く、破片数373点を数える。先に記したように瓦当側面の調整がナデ、ケズリに分かれ、さらにケズリの方向も多様である。これらにもとづいて区分を行うことも可能であるが、ここではある程度の小片からでも区分が可能で資料数が多い、丸瓦部の刻みについて検討を行う。

軒丸瓦 1式では瓦当部との接合の際に丸瓦部の先端に刻みを施すものがかなりの量認められる。しかしこれはすべての個体に施されるのではなく、図123 3のように刻みがないものもかなりの量がある。また、刻みを施す場合も丸瓦の凹凸両面に施すものほか、6のように凸面にのみ施すものがある。そうしたやや多様な状態に対して資料となる破片の状態も一様ではない。破損して丸瓦が瓦当部からはずれた状態であれば丸瓦先端の状況を把握できるが、必ずしもそうした状態の破片ばかりではなく、一部のみが確認できるものや剥離した破片に転写されたものなど資料の状態は多様である。また、文字瓦の場合と同様、区分がむずかしいものも少なくない。

丸瓦部の区分は以下のとおりである。

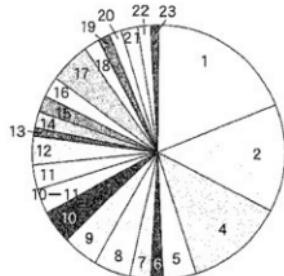


図219 刻み分類の出土比率

- 1) 凹凸両面に刻みがない。
- 2) 凸面に刻みがない。凹面の状況は不明。
- 3) 凹面に刻みがない。凸面の状況は不明。
- 4) 平行刻み。間隔は密。
- 5) 平行刻み。間隔は粗。
- 6) 粗い格子。施文はやや雑。
- 7) 大きな格子。均整な施文。
- 8) 大きな格子。7) に似るが左下がり斜線のうち右下がり斜線で、施文の順が逆になる。
- 9) 横長の格子。右下がり斜線のうち左下がり斜線。
- 10) 斜め格子。左下がり斜線のうち右下がり斜線。
- 11) 斜め格子。右下がり斜線のうち左下がり斜線。
- 12) 斜め格子。施文幅は狭い。
- 13) 細かい格子。
- 14) 粗く雑な斜め格子。沈線は太い。

表3 刻み分類ごとの出土状況

| 刻み種類 | 1      | 2 | 3  | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|------|--------|---|----|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 金堂   | 3      | 3 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 4  | 3  | 1  | 1  | 1  | 1  |    |
| 講堂   | 8      | 5 | 17 | 4 | 1 | 1 | 2 | 5 | 2 | 5  | 2  | 2  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |    |
| 回廊   | T4     | 3 | 2  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |    |
|      | T5     | 4 | 1  | 5 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
|      | T6     | 1 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 南門中門 | 遮横・包含層 | 2 | 7  | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 南門中門 | 池堆積物   | 4 | 2  | 8 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 南門中門 | 南石垣裏込め | 1 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 塔    | T13    | 7 | 4  | 7 | 9 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 墓地   | T15    | 2 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
|      | T16    | 1 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
|      | T17    | 1 | 1  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| その他  | T9     | 4 | 2  | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |

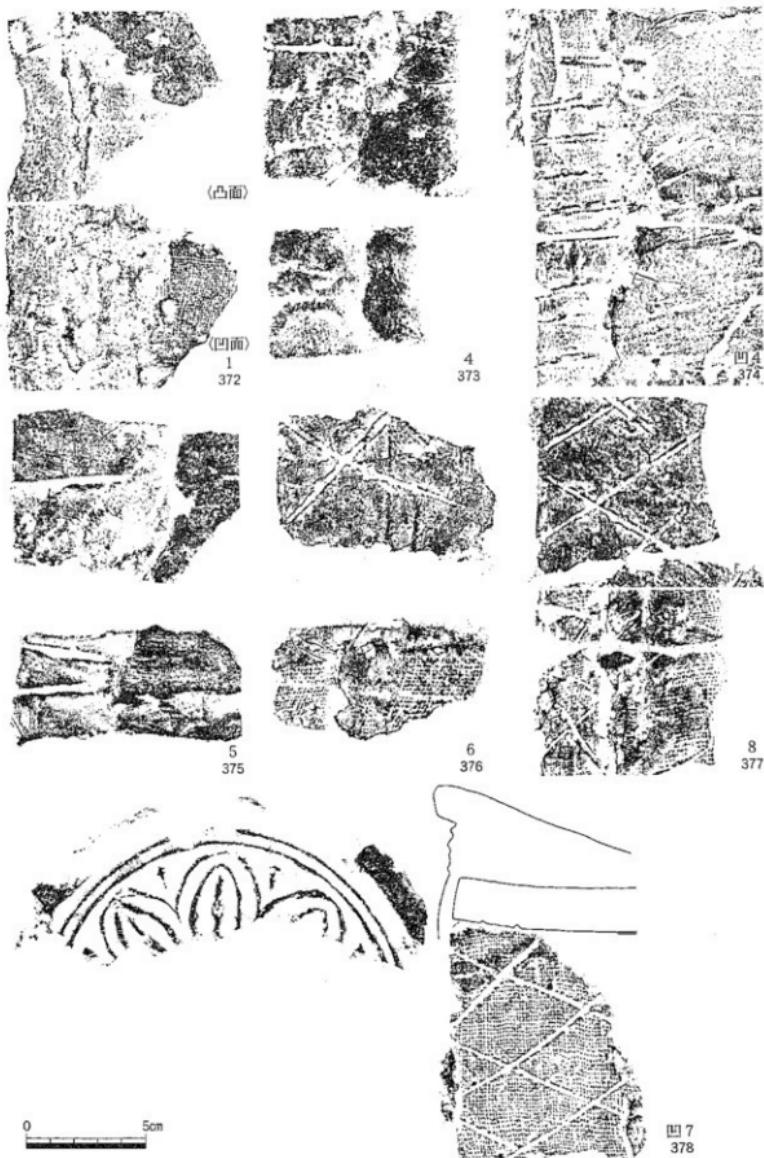


図220 刻みの分類 (1) (1/2)

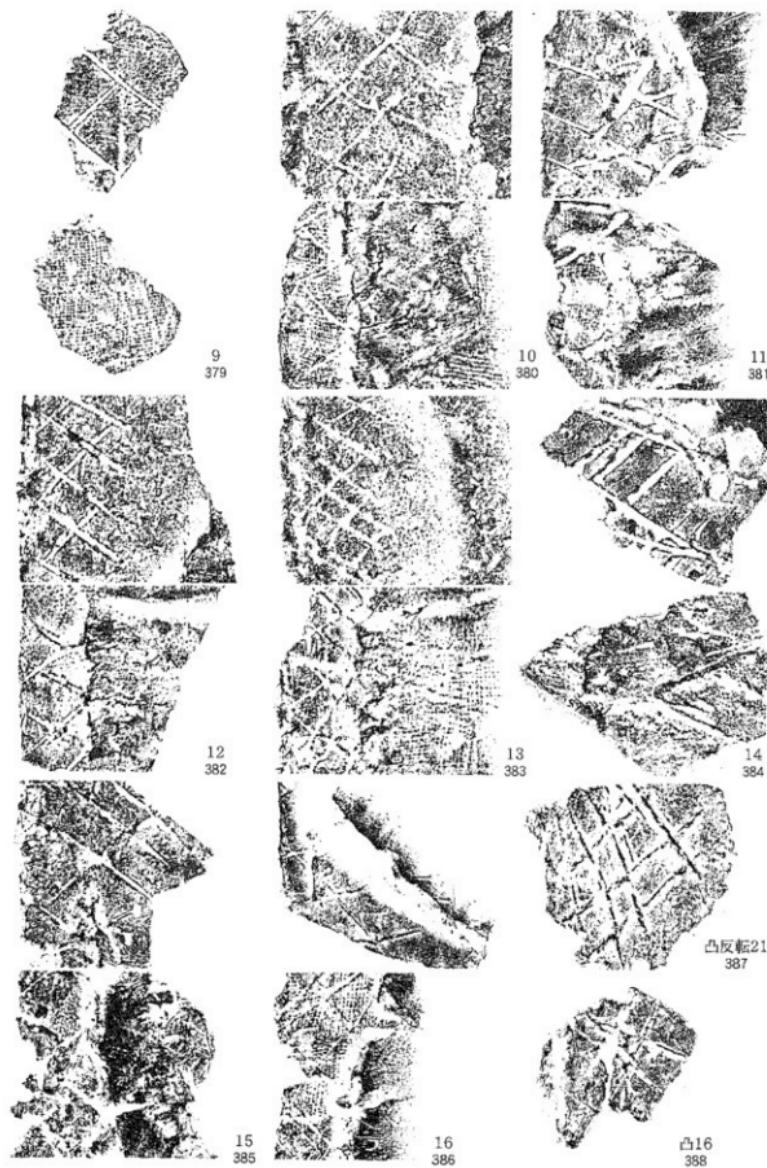


図221 刻みの分類 (2) (1/2)



図222 刻みの分類（3）（1/2）

15)～23)については説明を省略するが、格子の形状、つまり、右下がり沈線と左下がり沈線の角度や密度で区分したものである。なお、22)、23)の拓本は省略した。また、1片1種類となるため分類に加えなかったが、さらにここに示した以外にも数種類の設定が可能である。

刻みの沈線はいずれも玉縁側に抜けており、玉縁側を手前に置いた状態で記されたことがわかる。また、密な格子ではいずれも右下がりないし左下がりの一方を連続して施した後にもう一方の傾きの沈線を施している。図220～222には374・378・390・391を除いて、上段に凸面、下段に凹面を示したが、基本的に両面の文様は揃うと言える。ただし、380や386のように凹面側は必要範囲を考慮してややす詰まりに施す場合がある。376凹面や384凹面はそのことは考慮せず広く施した例であるが、沈線は丸瓦接合時のナデがかかるため拓本には明瞭には表れない。

なお、ここで検討した資料のうちの2)・3)、また、378などは瓦当面の一部が残存している。それら以外も基本的に軒丸瓦1式とみてよいが、丸瓦部のみとなったものを含むため、1式以外を一部に含む可能性がある。分類したうちの13)は確実に1式とは異なると判断しがたかったためここに含めたが、軒丸瓦4式59に刻みの特徴が類似し、発色もまた近いためそれに属する可能性がある。丸瓦部に刻みを施すものとして軒丸瓦1式以外に3・4・5・7・10式がある。このうち10式は丸瓦が小さいため混入の可能性はなく、3・4・5式が問題となるが、13)以外にその可能性が考えられるものはないこと、また、瓦当部の出土点数は1式が圧倒的に多く他はごく少量であるため、他の型式が含まれるとしてもごく一部であり、基本的に軒丸瓦1式の区分としてよいと考える。

さて1)～36点、2)～26点、3)～48点が刻みをもたない資料である。このうち凹面に刻みがない3)は、凸面に刻みがない1)の一部である可能性が多分にあるが、凸面にのみ刻みを施す6・392のような例を考慮する必要があり、図219の比率には含めていない。4)以下の総数は129点であり、3)の大部分が刻みなしとすれば全体のほぼ半分、かなりが凸面に刻みをもつとみなせば全体の約4割程度が刻みをもたず、残りが刻みをもつことになる。刻みをもつものと、もたないものがどのように作り分けられたのか。観察の限りでは两者に何らかの差を見出すことは困難であり、技術・手法の相違と考え

えざるをえない。つまり、約半数が刻み手法で製作され、半数がそれを用いず製作されたと言える。

ここに示した分類は刻みという表に現れない部分の特徴であり、また、変化していく必要や要因を考えにいくことから工人の個性とみることができ、個々の工人をおおむね反映すると考える。つまり、軒丸瓦1式は20人、場合によっては30人ちかくの数の工人、そして、刻み手法を用いないものがほぼ同数ありそれらもその比率で製作されたとみなせば総数50人程度の工人によって製作されたことになる。これは文字瓦から推定した工人の総数62に近く、軒丸瓦が多くの工人によって製作されたと推定することができる。

1)～3)を別とした場合、分類それぞれの出土点数は2～10とややばらつく。またそれらの堂塔ごとの出土傾向は講堂において8)と10)がやや多いものの、基本的に大きな偏りはなく各堂塔に分散する。それに対して塔における構成は特徴的で、刻みをもつもの20点のうち9点が4)と著しい偏りを示す。上記の理解にもとづけば、塔以外の堂宇の軒丸瓦1式は多数の工人が生産にあたったのに対し、塔は特定の工人の関与が高かったことになる。つまり、塔の瓦製作に限っては工人の大量勤員体制がとられなかったことになるが、これは先に示した文字瓦の出土傾向とも一致する。

### (3) 軒丸瓦1式の製作手法

軒丸瓦1式は出土個体数が多く、その中には製作の際の粘土接合痕を確認できるものを含んでいる。以下、それらを手がかりに製作の工程について整理しておく。ただし、個別の個体ごとに製作工程を確認できたわけではなく、また、観察が可能な破片数は限られるため、比率等に関しては不明な部分も多い。

1. 図125 9・10に示したように、瓦釜の縁にそって環状をなすように塊状の粘土を順に入れていく。9では8回に分けて粘土を入れる。

瓦釜にむかってユビオサエがなされており、8・9以外にも剥離を生じているものがある。瓦当下半は目的とする厚さまで形成するのに対し(図223 1-(2))、上側では低くなる(1)。

2. 瓦当中央部に粘土を充填する(3)。

3. 板状工具の先端で丸瓦接合面を形成する。接合面は必ずしも水平ではなく、左右両側にむかって下がることが多い。接合面と丸瓦先端との間には2～5mmの空隙が生じていることが多い。これは接合面、丸瓦先端ともに水平でないことに起因するとみられるが、丸瓦を瓦当側に強く押さえ込んでいないことを示すのである。なお、丸瓦接合面から瓦当外側(瓦釜)までの厚さは10mm前後のものが多いが、薄いものは5mm、厚いものは20mmと、ばらつきが大きい。

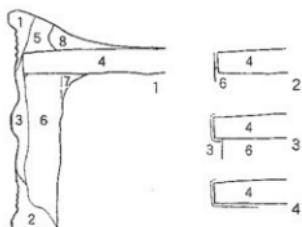


図223 制作手法の分類

この丸瓦接合面の形成ー丸瓦の接続については、粘土の接合痕や遺存する調整から、大別して2種類、細かくは3種類があったと考えている。

A 1. (1)・(2)の充填後、(6)に先行して行う(図223 2)。

1に示したように丸瓦凹面先端側で(3)・(6)の間に細い隙間を生じており、丸瓦を置いた後に(6)が充填されたとみられる。また、2のように(6)が丸瓦設置面と丸瓦の先端にはみ出した状態をなすものがしばしばある。これは丸瓦を置く際に(6)の一部が押し込まれた可能性もあるが、押圧によ

つて(6)の先端が空隙に出た可能性を考えている。

この種では(6)の丸瓦側には布目や後述の刻みがよく転写される。

A. (3)を彫り込んで設置面を形成する。設置面にはナデが加えられる(図223-3)。

B. 設置面から(6)の丸瓦凹面側にかけてナデが加えられており、その後に丸瓦が置かれたとみられる。つまり、Aとは異なり(6)の充填が丸瓦の設置に先行する(図223-4)。

以上のA・Bにおいて(5)の充填時期はよくわからないが、(6)と一連の工程になると考えられる。

4. (5)・(6)上面に押圧を加える。(5)の上面には連続する指頭押圧を加え、丸瓦との圧着を行う。この指頭押圧の面で剥離を生じている破片が多い(図123-3瓦当裏側拓本)。

なお、瓦当が厚い個体では(6)に(7)が追加される。

5. (8)を補充した後、外面調整を行う。

以上の製作工程を復元できる。

接合部の状態が明瞭なものばかりではないため、工程の復元は容易でないが、資料の状態は多様である。3-A、3-Bの相違、丸瓦接合面の厚さのばらつきなど、共通の手法によって規格的に製作されたとは考えにくい状態であり、軒丸瓦1式の製作にあたっては工人ごとにさまざまな手法が用いられた可能性が強い。

#### (4) 創建期瓦の特色

以上、(1)から(3)において備前国分寺創建の時期に製作された瓦の分析をおこなった。

分析を通じて明確になったのは文字(符号)瓦から導かれる多数の工人の存在であり、それは軒丸瓦製作手法の多様性とも合致する。備前国分寺においては工人の大量動員によって瓦の生産がなされたことを示すと考へてよい。他の官寺や氏寺の建立状況・瓦生産と比較検討する必要があるが、短期間での造営が課せられた備前国分寺がそれを可能とするためにとった対応策が工人の大量動員であったとみられる。

また、分析を通じて明確になったのは塔の瓦の特色である。いずれの要素をとっても塔の瓦は他の堂宇とは差異をもっており、上記の集中的な瓦生産の体制によらなかったことになる。他の堂宇の造営と同じ時期に、塔のみが生産体制の枠外にあったと考えることはできないため、他の堂宇の造営時期と若干の時期差をもつと考えるべきであろう。軒平瓦・軒丸瓦の構成も塔は他と異なることが明らかになっており、軒平瓦1A式の存在から他の堂宇に先行する可能性がある一方、基壇下に所在し瓦片を含む溝19の存在、軒丸瓦1式よりも年代が下る軒丸瓦2式がかなりの比率で出土することを考慮すれば新しく考へることができる。

矛盾する要素をもつことになり判断がむずかしいが、塔の建立が先行するとみなした場合、溝19に瓦が含まれることが理解しがたくなること、また、塔が所在する南東隅が最も低くなるという地形から見て、寺域全体の造成において後になる可能性が考えられることなどから、塔建立の主要期間は他の堂宇が竣工し生産体制が縮小した段階であったと考える。この理解にもとづけば、軒平瓦1A式は塔付近に仮設的に用いられた堂に用いられたものを転用した、あるいは瓦生産の初期に試作された製品を最終的に用いたということになる。

このほか、記載部分に示しここでは改めて述べなかったが、創建期平瓦の製作手法について、粘土塊の接合によるところと考えた。これがどの程度の普遍性をもつか、今後他の資料の検討を行っていただきたい。

## 第3節 瓦の変遷からみた堂塔

ここまで備前国分寺から出土した瓦の記載を行ってきた。江戸時代を含めれば軒丸瓦30型式・軒平瓦36型式に達し、寺院の長い歴史を物語っている。年代の確定がむずかしい型式が多く、また、帰属する堂塔がやや明確でないものも含まれるが、それをまとめたのが図224である。

## 奈良時代

奈良時代の創建期の詳細な状況を知るには軒丸瓦1式・軒平瓦1B式の微細な範囲の検討が必要であるが、軟質の焼成で微細な傷の比較が困難なものも多いため、今後の課題とせざるをえない。最も問題となるのが、塔の建立時期であるが、これについては前述のように塔の完成が最も遅れたと考えておく。

備前国分寺以外で創建瓦および早い段階の補修瓦がもたらされるのは、至近の位置に所在する仁王堂池遺跡（備前国分尼寺）と、香登庵寺、妙興庵寺であり、後二者は備前国分寺の造営にかかわった郡司層の所在をうかがわせる。香登庵寺は備前東部の和気郡、妙興庵寺は同じく磐梨郡に所在する。備前における窯業生産が備前東部であることを考慮する必要があるが、この段階以降も瓦生産地や同瓦の分布は備前東半の邑久郡・和気郡などに偏る傾向にあり、西の御野郡や津高郡との関わりは薄かったようであり、備前東半の郡司層を中心に国分寺が維持されていた可能性がある。なお、備前国分尼寺については、その比定地：仁王堂池遺跡が奈良時代にはじまる寺院ないし官衙であることは確実であるが、寺院である、換言すれば高月駅家でないことの証明はまだなされていない。

備前国分寺の瓦の特色の一つに同文様の保持がある。創建時の軒丸瓦1式の文様は軒丸

| 世紀 | 出土瓦  | 金堂   | 講堂   | 回廊 | 南門 | 中門 | 塔 | 伽藍 |
|----|--|--|------|----|----|----|---|----|
| 奈良 | 軒丸1<br>軒丸2<br>軒丸3<br>軒丸4<br>軒丸5<br>軒丸6<br>軒丸7<br>軒丸8<br>軒丸9<br>軒丸10  | 軒平1A<br>軒平1B<br>軒平2B<br>軒平3  |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸6<br>軒丸15  | 軒平5  |      |    |    |    |   |    |
|    |  | 軒平9<br>軒平10<br>軒平14<br>軒平15<br>軒平13  |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸11<br>軒丸17<br>軒丸18<br>軒丸19<br>軒丸20<br>軒丸21<br>軒丸22<br>軒丸14<br>軒丸19<br>軒丸20<br>軒丸21<br>軒丸22<br>軒丸14<br>軒丸19<br>軒丸20<br>軒丸21<br>軒丸22<br>軒丸23 | 軒平21<br>軒平22<br>軒平23<br>軒平25<br>軒平17<br>軒平18<br>軒平19<br>軒平20<br>軒平21<br>軒平22<br>軒平19<br>軒平20<br>軒平21<br>軒平22<br>軒平19<br>軒平20<br>軒平21<br>軒平22<br>軒平23 | 金堂解説 |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸23   | 軒平28   |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸24   |  |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸25   | 軒平29<br>軒平30   |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸27<br>軒丸28   | 軒平35<br>軒平34<br>軒平31<br>軒平32   |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸26   |  |      |    |    |    |   |    |
|    | 軒丸27   |  |      |    |    |    |   |    |
| 平安 |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
| 鎌倉 |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
| 室町 |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |
|    |  |  |      |    |    |    |   |    |

図224 堂塔の変遷

瓦では2式、6式、10式と保持される。11世紀には軒丸瓦22式として復刻され、これには軒平瓦2式の復刻である軒平瓦26式も伴う。こうした文様の保持はこの地域の他の古代寺院には見られない特色であり、瓦当文がこの寺の伝統と格式を表示するものになっていたとみられる。

#### 平安時代

堂塔の完成後、平安時代中期に塔が失われ、続いて金堂が倒壊したとみられる。

なお、中門の存続期間については基壇および瓦だまりの上部が失われているため詳細は明らかにしがたい。また、僧房は平安時代中期に瓦葺きから掘立柱建物に変化したことが明らかになっている。

平安時代後期には金堂が復旧され、講堂・南門も補修されていく。この時期の瓦は平安宮や六勝寺と同様関係をもつものが多い。平安京内への瓦の搬入は国司の成功としてなされたものであるが、逆に言えば備前國分寺の修復に国衙が関与していたことを示すと言える。なお、この時期の軒平瓦の型式数の多さは特徴的であり、1つの型式がまとまって用いられず、きわめて多くの型式が少量ずつもたらされている。多くの型式を出土した講堂ではこの時期の瓦だまりが遺存していないため出土の数量が少なくなっているとも推定されるが、元々の絶対量が少なかった可能性が考えられる。これについては基本的には瓦を大量に生産する体制がなかったため複数の窯が生産にあたることになり、多種少量の形になったとみられるが、それだけでは説明しがたく、國分寺の補修・瓦の貢納が多方面からの寄進としてなされた可能性も考える必要があろう。

なお、平安時代後期の瓦の胎土は特徴的で、砂粒が少なく破面に暗灰色・白色の粘土薄層が表面と平行に重なって見えるものが主体を占める。これは焼成状態にもよるようであるが、前後の時期には見られないものであり、瓦の生産が須恵器生産の工人によってなされたことに起因すると考えられる。

このほか、國分寺創建以前に製作されたとみられる少量の瓦が金堂の再建に際して他の寺院から搬入された可能性が考えられたが、古い型式が必ずしも創建時期を示さないことになり、発掘資料の評価において参考となる事例と言える。

金堂再建時の状況が典型であるが、基壇周辺に倒壊によって形成された瓦だまりは撤去されずそれを残したまま再建がなされる。このため創建期の屹立した基壇の形状は半ば失われ周囲にスロープ状に瓦が残ることになる。この時期には完全な復旧を行うことが困難になっていたことを示すとみられる。南門もそれと同じ状況であり、奈良時代の瓦とは規格が異なる軒丸瓦20式・軒平瓦25式が多く出土することからみて平安時代後期に倒壊し再建された可能性が強い。

平安時代末に講堂と回廊が焼失する。

金堂上層瓦だまりに焼土は含まれていないため金堂がともに焼けたかどうかは明確でないが、金堂には軒丸瓦23式・軒平瓦28式を伴っておらず、またこれ以降の瓦も見られることから、同時に焼損して倒壊した可能性がある。以降、金堂は復興されず伽藍の中心は講堂となる。なお、この火災は寿永2（1183）年の木曾義仲の備前侵攻「即焼払備前國帰去」に起因する可能性もあると考えている。

#### 中世

鎌倉時代には講堂が復興され、南門も補修される。平安時代後期からはじまる傾向であるが、南門からは基本的に主要伽藍と同じ瓦が出土する。ただしその多くが後に水田石垣の裏込めに始末された状態での出土であり、確実な共伴関係を示すものではない。しかしながら他の地点から瓦が持ち込まれて埋め込まれたとは考えにくい状況であり、それらは南門に伴うものであり、耕作の支障となる瓦だまりの上層が水田の端に埋め込まれたと考えている。中世を通じて寺院は講堂と南門で構成されて

いたとみられる。現在市道として用いられている南門を通過する道はこの軸線を示しており、中世の参道を反映したものと考える。

室町時代以降講堂は継続して機能し、南門も保持される。15世紀後半以前の瓦が小形であったのに対し、この段階で講堂には滑り止めをもつ軒丸瓦29式・軒平瓦33式が鬼瓦を伴って用いられる。屋根全体の状況が変わったとみることができ、この時期に大規模な改修がなされたと推定され、調査で確認された奈良時代の礎石の再配置はこの時点でなされた可能性もある。南門にはこの組み合わせは用いられておらず、建物の規模は小さかったとみられる。

出土土器類から16世紀後半から17世紀初頭に講堂が焼亡したとみることができ、寺院としての備前国分寺は失われる。備前国分寺の魔絶については文明年間に備前西部の有力国人・松田氏によって焼き払われたとの推測が定説化していたが、これは年代が隔たるため否定される。あるいは土肥1778に異説として記す、熊山戒光院と争い焼き払われたというのが妥当であろうか。

寺院そのものの機能は南西700mの円寿院に継承され、現地には小堂が設けられることになる。小堂は焼失した講堂の中央付近に維持され、現在も薬師如来が祀られている。

なお、南門北側の池は江戸時代の地誌にいう「にふもんの池」とみられ、南門が仁王堂と呼ばれていた可能性がある。

備前国分寺跡出土瓦の情報量は膨大であるため、評価を十分におこなえていない部分も少なくない。各型式の組列に関してはおむね問題ないであろうが、個々の型式の年代に関しては今後さらに検討が必要であり、図224での年代は多くが目安という以上のものではない。本章で記した評価とあわせて、多くの教示を得られれば幸いである。

#### 追記

創建の軒丸瓦1式では周縁と圓線の間に浅い範傷が生じている（図123 2 左下側間弁の外側3・4では右上）。この範傷は講堂・塔・南門・中門の資料に認められるが、金堂ではこれが無いものと有るものとの2者が見られ、前者が多い。したがって、金堂の瓦が最初に生産されたとみられ、國分寺の造営は金堂からはじまったと判断できる。また、これにもとづけば、瓦当部が厚く側面をケズリ調整するものが早い段階であり、後にはナデ仕上げになるとみられる。

それ以後この傷はあまり進行しないようで、これを手がかりに他の堂塔の関係をうかがうことは容易でない。

7は南門中門調査区池堆積からの出土であるが、これと同様に瓦当面全体に著しい範傷が見られる製品が南門南西外側トレンチの瓦だまりから出土している。

以上のことから、造営は金堂、講堂・回廊・中門の順に進み、南門の竣工後に軒丸瓦1式は瓦筒の傷みによって2式に改修されたため、並行して建立がなされていた塔は軒丸瓦の構成が1式に2式が加わるものになったと考える。

## 第4節 土器

備前国分寺跡からは瓦類の出土が最も多かったが、次に出土量が多いのは土器類である。土器類の中でも遺構と関わりが強いものについては、第3章の遺構の概要において記載してきた。創建段階である奈良時代後半の土器から、江戸時代初頭の土器までが認められる。中でも、北面築地（T11）や北面回廊西側では一括りの高い土器が出土し、遺構の時期を決定し、伽藍の変遷を考える上で有効なものとなっている。

ここでは、遺構との関連性は低いが、備前国分寺跡の性格を考えるために重要な意味をもつ土器を中心に概要を述べる。

## (1) 施釉陶器等 (図225・226、図版50-3・54)

393～400は施釉陶器である。奈良三彩をはじめ各地で生産された緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。

393は緑・褐・白釉がみられ、唐三彩の陶枕と考えられる。全国的にも出土例が少ない資料である。394は現状で二彩しか認められないが、緑釉が鮮やかに発色しており奈良三彩の瓶と考えられる。395・396は奈良二彩でいずれも金堂の礎石抜き取り穴の埋土から出土した。396は円孔が認められ、多口瓶である。397は無高台の椀の底部で奈良三彩の可能性がある。

398・399は緑釉陶器の碗である。398は有段輪高台で近江産である。時期は10世紀後半と考えられる。400は灰釉陶器の手付瓶で9世紀後半に属する。

このほか小片のため図化できなかった資料を合わせると、緑釉陶器については平安京周辺産が11点、近江産が3点出土している。平安京周辺ないし東海産と考えられるものも1点ある。時期は平安京周辺産が9世紀後半～10世紀、近江産が10世紀後半に属する。灰釉陶器については東海産、中でも東濃産の製品とみられる。碗や手付瓶など7点が出土し、9世紀後半のものが多数である。

総合的に各地の施釉陶器が確認され、また時期も幅広い。

貿易陶磁は小片のため図化できなかったが11世紀後半～12世紀の白磁・青磁や、12世紀の同安窯産の青磁が出土している。

401～404は円孔をもつ須恵器である。401は円孔が筒状にのびるので、多口壺とみられる。403は円孔の周囲1.2cmに剥離した痕跡が認められる。404は内面に當て具痕跡が残る。これらの土器は仏具関係の器であろうか。405は内面に2条の凹線が認められるが、器種等は不明である。

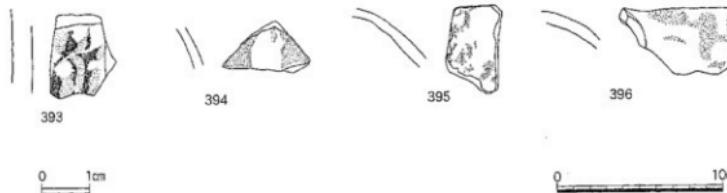


図225 施釉陶器等 (1) (1/1・1/3)

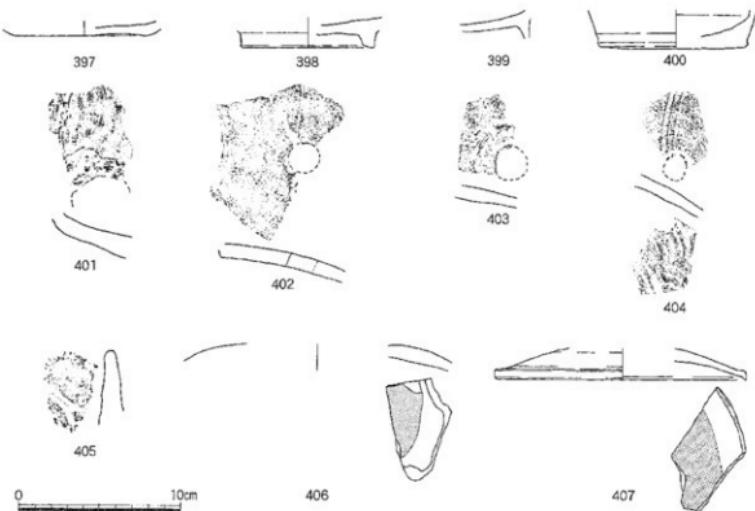


図226 施釉陶器等（2）（1/3）

406・407は転用砾である。いずれも須恵器の杯B蓋であり、墨の付着はないが内面がかなり磨耗している。

#### （2）中・近世土器（図227、図版51-1）

講堂調査区から出土した当該期の土器については、再建された講堂の時期と関係するため、講堂の項で詳しく触れた。ここでは、講堂調査区以外で出土した中・近世に属する土器についてみていく。

408～411は備前焼の擂鉢である。408・410・411は主に南門・中門調査区の中門上に設けられた池1の埋土から出土した。409は金堂調査区の水田造成の際に邪魔となった瓦等を集積した溝から出土したもので、出土状況からは遺構との関係を言及し難い。408の口縁端部上面は平坦で、内側がやや突出している。時期は14世紀初頭と考えられる。409の口縁端部はやや尖る。16世紀前葉に属する。410は放射状のスリメのみで、口縁外面に凹線が2条めぐる。時期は17世紀中葉である。口縁外面の凹線が3条みられる411は17世紀初頭に属すと考えられる。

412は美濃焼の折縁菊皿で16世紀末に属する。413は口縁が玉縁状の白磁碗IV類で、時期は11世紀後半から12世紀のものである。414は染付で16世紀中葉～後葉の時期と考えられる。415は瓦質土器の火鉢である。

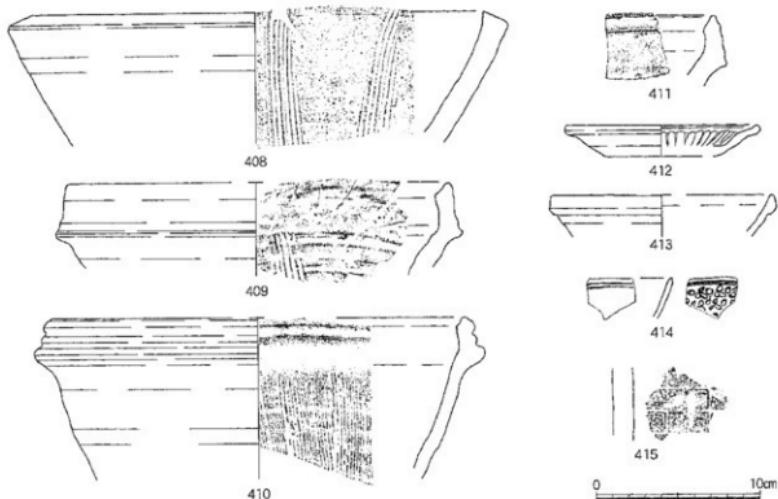


図227 中・近世土器 (1/3)

## 第5節 土製品・銅製品・石製品

## (1) 土製品(図228、図版51-2)

備前国分寺跡からは、土錘や製鉄・銅に関連する羽口、泥塔、用途不明の土製品が出土している。羽口のうち、T17の東面築地雨落ち溝17およびその東側の黒褐色粘質土から出土したものは、青銅製品の鋳造関連遺物と共伴しており、溶解炉に用いられたものと推測される。ここでは、包含層や後世の水田造成土から出土し、直接的に遺構と関わらない土製品を記載する。

416は講堂北東部から出土した泥塔である。土師質で、残存長4.5cm・残存幅2.8cm・最大厚2.1cmをはかる。表裏に層塔が表現されており、一方は特にはっきりとしている。層塔は現状で三層であるが下部が破損しているため、何重の層塔であったかは不明である。表裏の層塔表現が対称となっておらず、それが生じていることから、表裏2つの型に挟み込んで成形したものと考えられる。

岡山県内出土の泥塔については、2つの型を合わせて成形する断面形が方形もしくは円形の泥塔と、1つの型を粘土板に押しつけて成形する断面形が扁平の泥塔の2種に分類され、時期差や分布差があることが指摘されている(草原2004)。前者が古代的で、後者が中世的としており、備前国分寺跡出

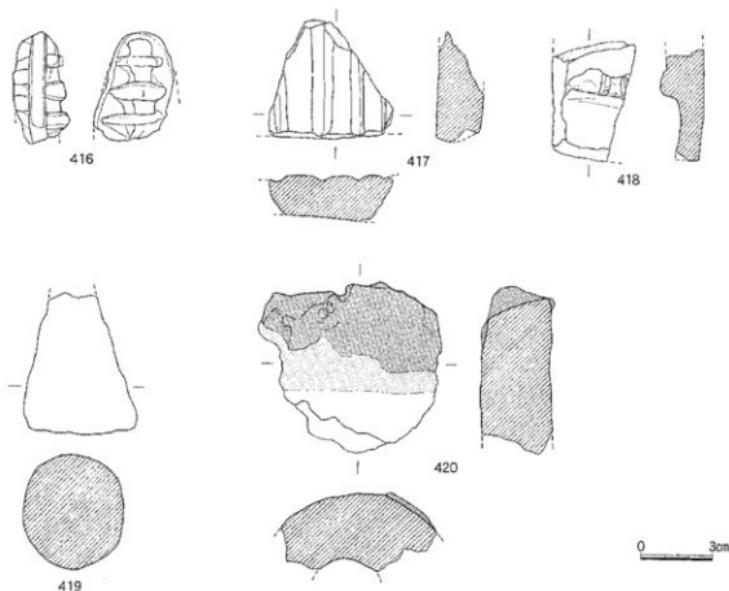


図228 土製品(1/2)

土の泥塔416は2つの型を合わせて成形していること、断面形が扁平でないことから、時期は古代に属すと推定される。

417～419は不明土製品である。

417は金堂調査区の溝2から出土した。瓦と同様の焼成で黄褐色を呈し、残存長4.9cm・残存幅5.0cm・最大厚1.9cmをはかる。4条の溝状の筋が認められ、その筋で挟まれた間は凸状を呈している。

418は講堂調査区から出土したもので、青灰色を呈し瓦と同様の焼成である。裏面には布目の痕跡が残る。突帯が貼り付けられ、さらに突帯に刻み目が付けられている。突帯を境に段差がつき、残存長4.9cm・最大厚1.8cmをはかる。突帯から1cm離れた箇所にも、突帯が剥離した痕跡が認められる。

417の凸状の筋および418の刻み目をもつ突帯の表現は、丸瓦列を模したものと見受けられる。小形すぎるが、瓦塔の可能性もある。

419は講堂調査区の包含層出土で、土師質である。断面楕円形で、円錐形をなしている。最大長5.7cm・厚4.9cmをはかる。420は羽口で金堂調査区の水田造成土から出土した。先端にはガラス質滓、黄色の付着物がみられる。残存長6.9cm・最大厚2.9cmである。

これらの土製品は造構に明確に伴わず、時期を明らかにすることは困難であるが、寺院としての性格を象徴する遺物が多い。

## (2) 銅製品 (図229、巻頭図版2-2)

421は銅印で、印文は「常」の陽刻である<sup>(1)</sup>。文字中央の「口」部分の左半を欠損しており、そのため廃棄された可能性がある。印面は3.1cm四方の正方形であり、鉢を含めた高さは3.0cmをはかる。鉢形態は、苔鉢式で花弁状を呈しており、径0.5cmの鉢孔がみられる。また、鉢の基部には4～5条の刻線を有している。重さは40.8gである。

僧房のP-12から出土したもので、P-12は創建当初の礎石建ち建物が廃絶した後につくられた掘立柱建物に伴う柱穴であると考えられる。時期は平安時代中期に属すと推定される。

この銅印は、一字印であることや鉢・印面の形態から「私印」と考えられる。印にある「常」の文字は、「常行」、「常行堂」といった仏教関係の語句に由来する可能性や、「常口」といった人名の一字を刻した可能性がある。岡山県下の銅印は、今回の出土例を含めて計6例を数える。すべて、一字印で苔鉢有孔という点で共通している（高田2007）。

422は講堂の礎石30の落とし込み穴から出土した。厚さ0.1cmの薄い青銅板であるが、どのような製品であるのかは不明である。423は銅錢「至和通宝」である。

## (3) 石製品 (図230、図版52-2)

424・425は石硯である。424は残存長6.4cm・最大厚1.5cmをはかるが、大部分が欠損している。側縁は溝状の筋が刻まれ、屈曲する。この形状から、四葉形硯ではないかと考えられる。425は長方形硯で、滴部と陸部が認められ、縁が一段高くなる。縁と陸部分に一部墨が付着しており、残存長6.3cm・縁部高さ2.4cmをはかる。講堂調査区の近現代に掘削された溝16から出土したものであるが、室町時代の可能性が強い。

426は、T17の東端褐色粘質土層から出土した砥石である。よく磨耗した一面を残し、他はすべて欠損する。青銅製品鑄造関係の遺物が共伴するので、これらに付随する砥石と考えられる。

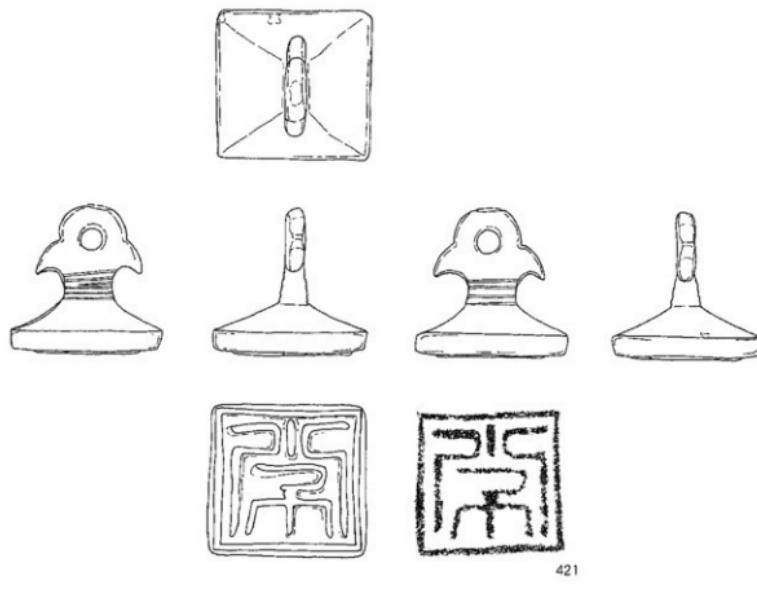


図229 銅製品 (1/1・1/2)

427は表面にノミ痕と思われる痕跡が残る凝灰岩である。残存長7.2cm・最大厚3.5cmをはかる。出土位置は金堂調査区に近世に形成された瓦廐棄土壙である。基壇外装等に凝灰岩片が認められず、外装に用いられた可能性は低く、燈籠などの石製品である可能性が強い。この凝灰岩の産地は香川県火山周辺と推定される<sup>(1)</sup>。

428は角礫凝灰岩（豊島石）製の石臼で、講堂調査区の瓦を用いた暗渠状造構から出土した。残存長15.8cm・残存幅13.0cm・厚7.1cmで、側面から下部にかけて被熱して赤色を呈している。

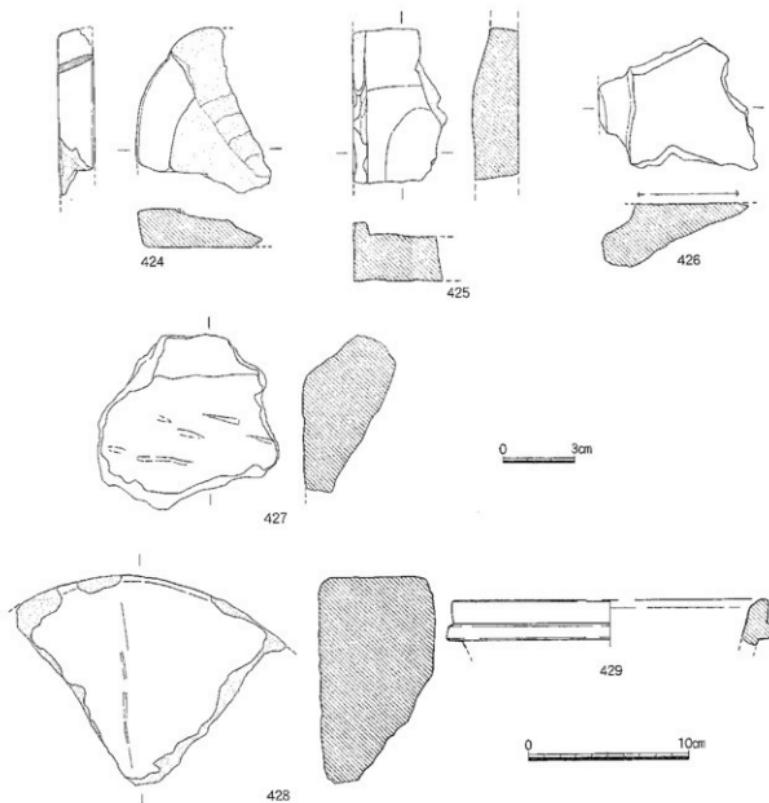


図230 石製品 (1/2 · 1/3)

429は滑石製の石鍋でT19Bから出土した。口縁部下に断面台形の鉗が削り出されている。口縁端部は外反気味に斜めになる。

## 註

- (1) 印文の判読は狩野久氏による。
- (2) 産地同定については、白石純氏にご教示いただいた。肉眼観察による。

## 引用・参考文献

草原孝典2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会

高田恭一郎2007「百間川兼基遺跡出土の銅印について」「百間川兼基遺跡4・百間川沢田遺跡5」『岡山県埋蔵

文化財発掘調査報告』208 岡山県教育委員会

## 第6節 古代の土器について

比較的まとまって出土し、堂塔の時期を決める上で重要な古代の土器について整理しておく<sup>(1)</sup>。

創建期の奈良時代後半の土器はT11の築地外溝である雨落ち溝19とカマド1周辺、T17の雨落ち溝17周辺で一定量が出土し、中でも須恵器の出土が顕著である。平安時代の土器は僧房から多く出土している。北面回廊西側上面から出土した一括性の高い土器群は、講堂と北面回廊が焼失した12世紀半ば～後半に属する各種土器が出土している。

### (1) 奈良時代後半の土器

寺域を画する築地周辺で当該期の土器が出土している。T11の雨落ち溝19とカマド1、T17の雨落ち溝17で主に確認されており、僧房(T7・8)出土の土器も必要に応じて加え、基本として図化できた土器を中心に整理を行うこととする。

須恵器は杯B(図106 215・216・図113 238～240・図114 251・図88 180)が主体で、杯A(図113 241・図88 179)が数点出土している。また、杯Bの蓋(図113 235～237・図114 248～250・図88 169・190・図89 202)も多くみられる。その他、皿(図113 244・図114 254)、高杯(図113 243)、壺(図114 255・256)、甕(図106 217)が出土している。

【杯B】7点出土している。口径と器高が判明するものについてみてみると、法量から第I群と第II群に分けられる。第I群は口径13.9～14.8cm、器高4.1～4.4cmにまとまる(251以外)。径高指数は29.5～30.3である。第II群は口径20.7cm・器高8.3cmで径高指数40.1の大型のものである(251)。

高台の断面形状については、端面が凹状になるもの(215・240・251)、断面四角形(238)、断面逆台形(180・216)が存在する。

また、T17出土の215が他より体部と底部の屈曲に近いところに高台が取り付く。さらにそれが顕著であるのが、T8出土の180である。

【杯B蓋】9点出土しているが、全形を把握できる資料は少ない。口径をみてみると、169が14.4cmで杯Bの第I群とセットになる。190はやや大きく、セットとなる杯Bが見当たらない。

つまみの形状は基本的に扁平な擬宝珠形で、上面中央が突出し、周辺がややくぼんでいる(235・248・249・190)。169のつまみは、碁石状の円形を呈する。つまみの大きさでも2種類に分けられる。直径が2.0～2.4cmの小型なもの(235・169・190)と2.6～2.9cmの大型のもの(248・249・202)が存在する。つまみの大きさの違いは、口径など法量の違いによるものと思われる。

口縁部付近の形状についても2種類に分けられる。A形態は縁部が屈曲し段をなし、端部が下方へ折れるもの(237・250・169)で、B形態は縁部が屈曲せず、頂部からの丸みを有したまま、端部が下方へ折れるもの(236・190)である。

【杯A】破片資料のみで、全体像はとらえられない。口縁端部は弱く外反している。

【皿】皿B(244)は白色を呈し、口縁端部は平坦面をなしている。254は、浅い皿で口縁端部が外方へ拡張している。

【壺】壺(256)については、頸部以上と高台が欠損しているが、胴部の稜線ははっきりしている。

一方、土師器については高杯と考えられるものや甕は認められるが、杯や皿等の器種がみられない。

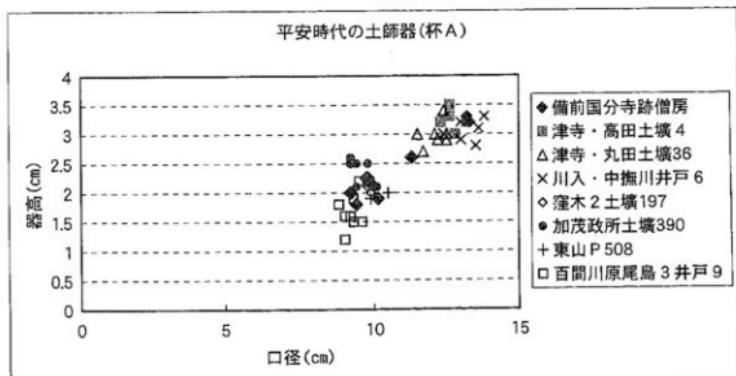
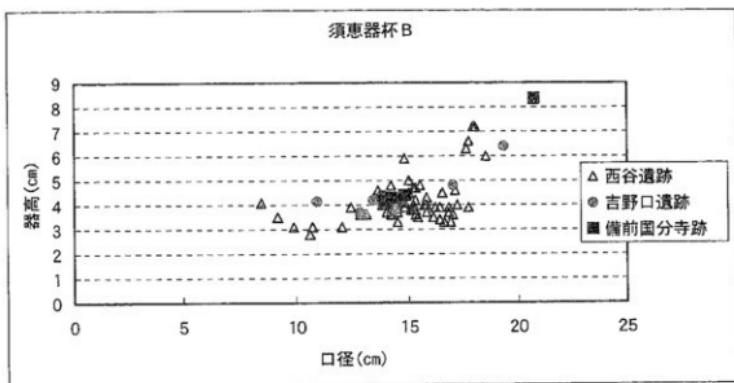
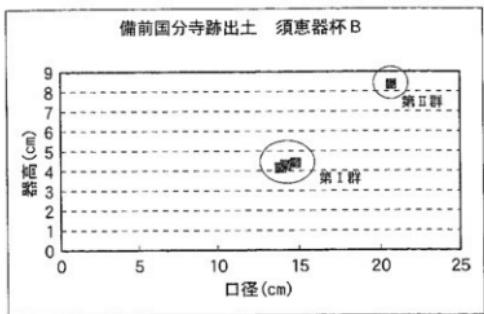


図231 土器の法量分布

また、須恵器においても杯Bとその蓋が多数で、杯Aなどの占める割合が低い。

須恵器の杯B・杯B蓋を中心にして遺跡との比較から、年代的位置付けを考えてみたい。

8世紀中葉に比定される岡山市吉野口遺跡溝2・3出土の杯Bは、法量から4種類に分けられるが、径高指数は平均約30である（草原ほか1997）。本遺跡の杯B第I群の径高指数が30前後であることと符合し、第I群の法量は吉野口遺跡の口径13～14.5cm、器高3.5～4.5cmの3種と共通する。杯B蓋の形状においても、A・B両形態が併存している点で共通している。

8世紀前葉に位置付けられている瀬戸内市西谷遺跡の杯Bの法量をみると、器高の割に口径が大きいものが多く、径高指数も平均約27となる（福田ほか1985）。すなわち、吉野口遺跡や備前国分寺跡と比べると口径のバラツキが大きく、西谷遺跡から吉野口遺跡・備前国分寺跡の資料に変遷する過程で、径高指数の増大が認められる。また、西谷遺跡出土の杯B蓋は、B形態が大半である。

なお、8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる岡山市ハガ遺跡のI期内郭溝から出土した杯Bは、口径に比して器高が高く、径高指数は32.8である（草原2004a）。杯Bの径高指数は時期が新しくなるにつれて大きくなる傾向がみられる。

したがって、備前国分寺跡の集地外溝を中心に出土した土器群は、8世紀中葉に位置付けられる吉野口遺跡溝2・3の土器群に近い様相を呈しており、国分寺創建期の8世紀中葉から後葉の土器様相を示していると考えられる。

## （2）僧房出土の平安時代の土師器

僧房調査区（T7・8）からは、最低2回の建替えに伴うように、平安時代の各時期の土器が出土している。時期の判断に有効な縁軸、灰釉陶器については前節および遺構のところで述べてきた。ここでは、それらを援用しながら、土師器の杯と皿を中心に検討を行い、年代的な位置付けを行う。

岡山県南部の9世紀から11世紀の土師器については、岡山市津寺遺跡や総社市窟木遺跡の出土資料を中心にいくつかの論考があり、法量分布と器種構成、底部調整などから検討されている（平井1998・平井1999・畠地2008）。僧房の土器は、基本的に柱穴や礎石抜き取り穴からの出土で、時期幅も広く、他時期の遺物の混入等も考えられるため、主に土師器の法量による分析を行いたい<sup>(2)</sup>。

礎石84出土の杯A（図88 174～176）は口径13.2～13.3cm、器高3.2～3.3cmで、法量としては津寺遺跡高田調査区土壤4や津寺遺跡丸田調査区土壤36出土の杯Aよりやや口径が大きい（江見ほか1997・岡田ほか1994）。両土壤の時期は、9世紀後葉～10世紀前葉と考えられている（平井1999）。礎石84出土資料は、これらより口径が大きく、川入・中撫川遺跡井戸6出土資料（草原2006）の法量分布とほぼ重なってくるため、9世紀後半と位置付けておく。共伴する縁軸陶器（181）や灰釉陶器（182）が9世紀代に属すので、この時期で妥当と考える。

礎石84の杯Aより口径の小さな一群が、礎石85の杯A（図88 183・185）や図89 205～208である。口径9.2～10.1cm・器高1.8～2.2cmをはかり、平均口径は9.7cmである<sup>(3)</sup>。窟木遺跡2土壤197や東山遺跡P508とほぼ法量分布が近く、10世紀後葉から11世紀中葉と考えられる。

なお、P-14から出土した皿（図89 194・195）は、10世紀前半の縁軸陶器等と共に伴するが、口径9.1～9.4cmをはかり11世紀後半～12世紀に属す段階のものと考えられる。

|           | 須恵器                 | 土師器                  | 縁鉢・灰陶器 白磁<br>吉備系土師質・須恵質土器類 | 遺構                     |      |
|-----------|---------------------|----------------------|----------------------------|------------------------|------|
| 8世紀       | 240<br>215          | 249<br>169<br>236    | 241<br>254<br>244          | 北面墳地<br>東面墳地<br>(一部假房) |      |
| 9世紀       | 171                 | 174<br>175<br>176    | 182<br>181                 |                        |      |
| 10世紀 950  |                     |                      | 199<br>200                 | 僧房                     |      |
| 11世紀 1050 | 183<br>185<br>205   | 206<br>207<br>208    |                            |                        |      |
| 1100      | 194<br>195          |                      |                            |                        |      |
| 12世紀 1150 | 6<br>21<br>33<br>32 | 38<br>42<br>49<br>53 | 57<br>52<br>53             | 60<br>63<br>65<br>66   | 北面回廊 |
| 1200      |                     |                      |                            |                        |      |

図232 備前国分寺跡出土の古代の土器 (1/8)

## (3) 平安時代末の土器

講堂と北面回廊が焼失したと考えられる12世紀の吉備南部における土器様相は、当地域に典型的な吉備系土師質土器の編年を中心に明らかになっている（山本1992・山本1993・草原2004b等）。

北面回廊西側から出土した土器群、具体的には北面回廊上層、下層、雨落ち溝4から出土した土器群は層位的に異なり、時期差がある。しかしながら、器種組成も似通っているし、土師器の皿、杯Aに胎土や底部調整の共通するものがある。各遺構から、指頭押圧・周縁ヘラ切り・中心までヘラ切り・糸切りなどの各種底部調整が認められる。とりわけ明瞭に判別できるものに、土師器の皿および杯Aにおいて、胎土がにぶい黄橙色を呈し、底部調整が指頭押圧によるもので、全体的な形状は丸みを帯びる一群が、共通して出土している。北面回廊下層の皿5・6、上層の皿19・20、上層の杯A38、雨落ち溝4の皿67・68、雨落ち溝4の杯A75がそれにあたる。したがって、本節においては北面回廊上層、下層、雨落ち溝4から出土した土器群を大きく同時期の資料としてみなし検討対象とする<sup>(4)</sup>。

器種は、土師器の皿・杯A・杯B・杯C・鍋・甕、吉備系土師質土器の須恵質土器の皿、白磁碗、黒色土器の碗からなる。土師器の皿、杯類で全体の約84%を占め、吉備系土師質や須恵質、白磁の碗は各1~5%程度でみられるのみである。

【吉備系土師質土器】上層から出土した1点のみ（図48 60）であるが、年代決定には有効な器種である。口径15.0cm・器高5.6cmをはかり、器壁のミガキは磨滅により明瞭でないが、外面には施されている可能性がある。また、口縁部に横ナデがみられ、器壁は薄く丁寧なつくりである。

内面のミガキが省略された段階である岡山市鹿田遺跡3次土壤8の資料は、口径15.7cm・器高5.6cmと大型の深楕形状である（山本ほか1990）。また、総社市窟木・宮後遺跡井戸4042の資料も器高15.5cm・器高5.9cmをはかる（谷山・高橋1991）。その次の段階に位置付けられる総社市備中国府跡SK003出土の碗は口径13.6~15.3cm、器高4.7~5.8cmの資料で、口縁端部が肥厚している（総社市教育委員会1989）。さらに、12世紀後半とされる岡山市百間川当麻（米田）遺跡井戸3の資料は口径14.0~15.3cm、器高4.7~5.6cmをはかるが、法量は縮小傾向にあり、内外面ともミガキは認めなくなる（福田1981）。さらに、12世紀末に位置付けられる瀬戸内市助三畠遺跡井戸3の出土資料は平均口径13.4~14.2cm、平均器高4.4~4.7cmとなる（馬場2006）。

備前国分寺跡から出土した吉備系土師質土器60は、法量と外面のミガキから鹿田遺跡3次土壤8や窟木・宮後遺跡井戸4042の出土資料より新しく位置付けられる。外面にミガキが施されている可能性があることと法量の分布範囲から、内外面ともミガキがみられなくなる百間川当麻遺跡井戸3よりも古相を呈している。よって、定型化した高台をもち、口縁端部が肥厚し器壁が薄く丁寧なつくりをしていることから、備中国府跡SK003出土資料に近い様相を呈しているとみてよい。

【須恵質土器】3点が出土しており、そのうち2点が底部近くに段をもつ。

百間川当麻（米田）遺跡井戸3の出土資料が口径16.4~16.5cm、器高4.8~5.1cmをはかるのに対し、北面回廊出土の資料（17・63・64）は口径14.6~15.4cm、器高5.6~5.9cmと口径は小さく器高は高い。また、百間川当麻遺跡井戸3が底部近くに段をもたないのに対し、備前国分寺跡では底部に段をもつものがある。碗は器高が低くなり、底部外面に段があるものからないものへと変化していく（石井・重根2005）、備前国分寺跡の資料は百間川当麻遺跡井戸3の資料より古相を示すと考える。

【土師器皿】土師器の杯Aと皿は、当該期の遺跡と比較しても明瞭な違いを抽出できなかった。しか

しながら、皿については12世紀後半とされる百間川当麻遺跡井戸3が平均口径8.78cm、12世紀後半～末とされる岡山市新道遺跡井戸3が平均口径8.13cmで口径7cm代の小さな皿が一定量を占めている（草原2002）。

また、北面回廊の皿の平均口径は9.04cmで、窪木・宮後遺跡井戸4042や備中国府跡SK003の皿が主に9cm代であることから、12世紀代に属す皿の口径は大きいものから小さいものへと変化している傾向がうかがえ、その中で位置付けが可能である。したがって、皿においても窪木・宮後遺跡井戸4042や備中国府跡SK003より後出で、百間川当麻遺跡井戸3より古い段階に位置付けられる。

こうして各器種を総括的に捉えると、備前国分寺跡北面回廊西側の一括資料は、12世紀前葉～中葉の窪木・宮後遺跡SK003等の資料に後出し、12世紀後半～末の百間川当麻遺跡井戸3や新道遺跡井戸3の資料より古相の段階に位置付けられると考えられる。したがって、12世紀中頃～後半の時期を与えよう。この時期に北面回廊および講堂が焼失し、備前国分寺の変遷の中で大きな転換を迎える。鎌倉時代以降の伽藍に推移していくものと思われる。

最後に、奈良時代後半の土器と僧房出土の土器等は、限られた資料から検討していることや礎石抜き取り穴等の出土状況がよくない資料を扱っていることから、今後再考が必要であることを付け加えておく。なお、T11の北面築地より西側の北門付近の築地外溝からも、奈良時代後半の土器が比較的多く出土している（平成18年度第4次調査）。僧房においても、第4～6次調査で全容が明らかになりつつある。

## 註

- (1) ここでは、平安時代までを古代とした。
- (2) 共伴する須恵器や綠釉陶器・灰釉陶器の年代観から、当該期の土師器杯Aは時期が新しくなるにしたがって小型化することが指摘されている（平井1998）。
- (3) 器高が低く、浅い形状をしているため、器種としては皿とすることができようが、いわゆる古代末以降の皿とは形状が違うため、杯として扱った。
- (4) 北面回廊の土器群については、上層・下層・雨落ち溝4の出土層位を考慮した検討を行わなければならない。

## 参考・引用文献

- 石井啓・重根弘和2005「備前焼」『中近世土器の基礎研究』XIX 日本中世土器研究会  
 江見正己ほか1997「高田調査区」「津寺遺跡4」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 岡山県教育委員会  
 岡田博ほか1994「丸田調査区」「三手遺跡・津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 岡山県教育委員会  
 会  
 草原孝典ほか1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会  
 草原孝典2002『新道遺跡』岡山市教育委員会  
 草原孝典2004a『ハガ遺跡』岡山市教育委員会  
 草原孝典2004b「中國一中世前期における備前・備中・美作を中心にー」『中近世土器の基礎研究』XVII 日本中世土器研究会  
 草原孝典2006『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会

#### 第4章 遺物

- 古代の土器研究会1992『古代の土器 1都城の土器集成』真陽社
- 神野恵2001「聖武朝の土器－平城宮－」『古代の土器研究－聖武朝の土器様式－』古代の土器研究会第8回シンポジウム資料集
- 総社市教育委員会1989『畿中国府跡緊急確認調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告7
- 谷山雅彦・高橋進一1991「岡山県立大学進入路・排水路工事に伴う調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報1』総社市教育委員会
- 西弘海1976『平城宮I～VIIの大別』『平城宮発掘調査報告VII』奈良国立文化財研究所学報26 奈良国立文化財研究所
- 畠地ひとみ2008「古代の土器について」「南溝手遺跡・窪木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214 岡山県教育委員会
- 馬場昌一2006「助三塙遺跡（助三塙地点）」『邑久町史考古編』瀬戸内市
- 平井泰男1998「古代の土器について」「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会
- 平井泰男1999「平安時代の土師器」「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 岡山県教育委員会
- 福田正継ほか1985『西谷遺跡』長船町教育委員会
- 福田正継1981「百間川当麻遺跡1」「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査II」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 岡山県教育委員会
- 山本悦世ほか1990『鹿田遺跡II』岡山大学構内遺跡発掘調査報告4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世1992「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』VIII 日本中世土器研究会
- 山本悦世1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡III』岡山大学構内遺跡発掘調査報告6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 第5章 総括

### 第1節 伽藍配置の復元

#### (1) 造営軸の復元

昭和49年度調査で伽藍主軸が算出されており、これに基づきトレンチ設定を行った。しかし、調査の過程で当時の伽藍主軸（以下「S49年度復元軸」という）が若干の誤差をもつことがわかった。さらに、すべての堂宇が統一的な軸線をもっているのではなく、講堂、金堂、中門、南門、塔といった主要伽藍がもつ軸線（以下「主要伽藍造営軸」という）のほかに、僧房と東・西・北築地塀がそれぞれもつ軸線、この3種類の軸線が存在することが判明した。伽藍の軸線は、伽藍配置や建物の復元作業において基礎となるものである。したがって、以下では、S49年度復元軸をもとに主要伽藍の主軸を復元し、これと他の2種類の軸線がどのような関係にあるのか、また、真北との関係についても検討してみたい。

なお定点の座標値は、S49年度調査成果によるグリッドをあてはめ、Y軸をS49年度復元軸、X軸をAAラインとして算出した。

#### 主要伽藍造営軸とS49年度復元軸の振れ

主要伽藍造営軸を算出するには、ある程度長い距離を確保することができ、主要伽藍の方位を考えるうえで基準となる定点が必要である。この定点の条件にあてはまるのが、回廊礎石心である。回廊には、原位置をとどめる礎石が多く、また、ある程度数値的に距離をとることもできるからである。しかし、備前国分寺にこの条件を当てはめようとすると、北面回廊東側や東面回廊では礎石が遺存せず根石しかないと認め完全に満たすことができない。したがって、ここではこのことを踏まえたうえで礎石がない場合は根石の検出状況から復元し、用いることとした。

表4にあげた遺構を基準として使用した。算出した振れの検証のために最低3組分の数値が必要であったが、南面回廊東側が調査対象ではなかったため礎石が不明である。このため、代わりに検出距離

表4 基準遺構の位置

| 点 | 遺構                | X座標    | Y座標    | 調査区      |
|---|-------------------|--------|--------|----------|
| A | 西面回廊<br>礎石50      | -30.39 | 122.23 | T 5      |
| B | 東面回廊<br>礎石54（根石）  | 32.77  | 120.23 | T 6      |
| C | 北面回廊西<br>礎石44     | -17.22 | 171.28 | 講堂調査区    |
| D | 北面回廊東<br>礎石47（根石） | 22.80  | 170.00 | 講堂調査区    |
| E | 南面回廊西<br>礎石63     | -15.89 | 81.88  | 中門・南門調査区 |
| F | 中門<br>礎石58（根石）    | -2.02  | 81.44  | 中門・南門調査区 |

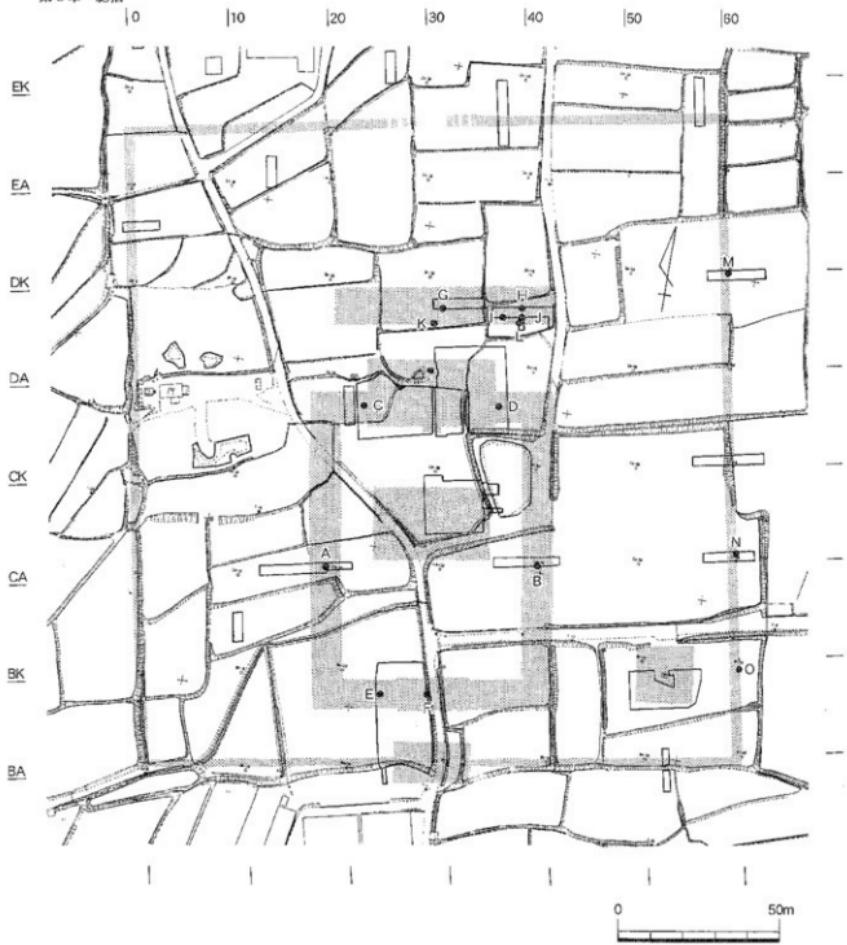


図233 検出遺構および堂塔の基準点 (1/1,500)

は近いが中門礎石、なかでも根石の遺存状況の良い礎石58を使用することとした。また基準点は、講堂基壇端、東・西面回廊礎石(T 5・6)、北面東西側回廊の礎石がそれぞれ平行になり、かつ柱心として妥当である位置に決めた。

表4の数値を用いてS49年度復元軸に対する方位の振れを算出したのが表5である。3地点とも北が東に振れる方位を示し、方位の振れは近似する。この各区间での方位の振れのうち、検出距離の長いものにより方位の信頼性はあるので、区間の距離がもっとも長いABが妥当な振れを示していると考えられる。したがって、S49年度復元軸に対する主要伽藍造営軸の振れはN 1° 48' 49" Eとする。

表5 遺構の方位の振れ

| 区間 | 遺構          | X座標の差 | Y座標の差 | 方位の振れ      |
|----|-------------|-------|-------|------------|
| AB | 東・西面回廊中央礎石間 | 63.16 | 2     | 1° 48' 49" |
| CD | 北面回廊東・西の礎石間 | 40.02 | 1.28  | 1° 49' 54" |
| EF | 南面回廊西と中門礎石  | 13.87 | 0.44  | 1° 49' 1"  |

## 僧房と主要伽藍造営軸の振れ

僧房はトレンチ調査であり、また基壇上面が削平されていたため、基準となる定点の条件がよくない。表6にあげた礎石、南基壇端を基準となる定点として使用したが、本来の約半分程度しか検出していない礎石や根石、あるいは小規模なトレンチのなかで検出した雨落ち溝を定点とせざるをえない。また、トレンチを互い違いに設定していることもあり、ある程度の長い距離を確保できる遺構を選定するのも難しい。また、基壇端のKLを結んだ線を僧房の軸線に直交する線と考え、これと平行し、かつ柱心として妥当である位置を定点とした。

表6の数値を用いてS49年度復元軸に対する方位の振れを算出したのが表7である。いずれも北で東へ振れるが、3区間のうちIJの方位の振れが他の2区間とは約9'異なる。IJは検出距離が短く、検出距離は短ければ、その分方位の信頼性は劣ると考えられる。このため、IJでは他の2区間とは異なる方位の振れが算出されたのである。この場合、検出距離に応じた加重平均<sup>(1)</sup>で得られる数値も参考にしたほうが信頼性がある。そこで、加重平均を算出するとN0° 48' 27"Eという数値が得られる。この数値はGHとKLの方位の振れに近く、IJで算出された方位の振れが短い検出距離によって

表6 僧房基準遺構の位置

| 点 | 遺構       | X座標   | Y座標    | 調査区      |
|---|----------|-------|--------|----------|
| G | 礎石78     | 7.10  | 200.48 | T 7      |
| H | 礎石80（根石） | 30.73 | 200.14 | T 8      |
| I | 礎石83（根石） | 24.76 | 197.00 | T 8      |
| J | 礎石85（根石） | 30.67 | 196.93 | T 8      |
| K | 南基壇端（西）  | 4.16  | 195.82 | S49年度調査区 |
| L | 南基壇端（東）  | 29.95 | 195.45 | T 8      |

表7 僧房遺構方位との振れ

| 区間            | 遺構              | X座標の差 | Y座標の差      | 方位の振れ      |
|---------------|-----------------|-------|------------|------------|
| GH            | 礎石78と礎石80       | 23.63 | 0.34       | 0° 49' 27" |
| IJ            | 礎石83と礎石85       | 5.91  | 0.07       | 0° 40' 42" |
| KL            | 南基壇端（西）・南基壇端（東） | 25.79 | 0.37       | 0° 49' 19" |
| GH・IJ・KLの加重平均 |                 |       | 0° 48' 27" |            |
| 新主軸との振れ       |                 |       | 0° 59' 30" |            |

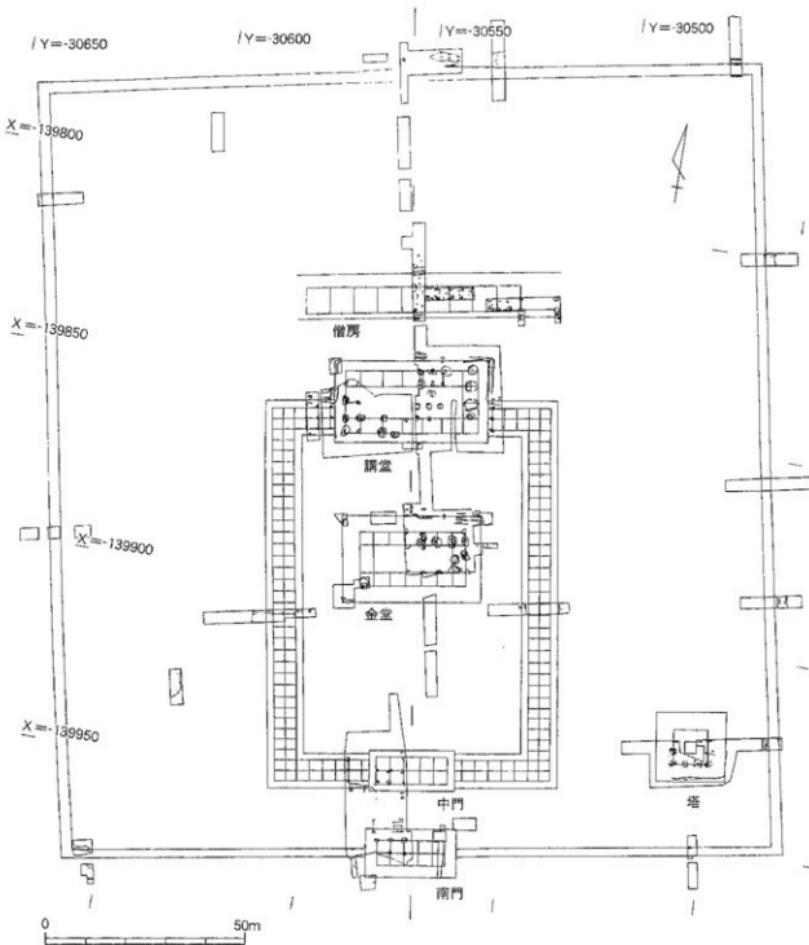


図234 伽藍配置復元図 (1/1,250)

生じたことを裏付けていよう。この加重平均で算出した数値から、GHとKLのうち、より近似する数値であるKLの方位の振れ ( $N 0^\circ 49' 19'' E$ ) が僧房とS49年度復元軸の振れになると想われる。

また、S49年度復元軸に対する主要伽藍造営軸の方位の振れが  $N 1^\circ 48' 49'' E$  であることから、主要伽藍造営軸に対する僧房造営軸の方位の振れは、 $N 0^\circ 59' 30'' W$  と北で西へ振れる。100mで約1.7のずれが生じることとなる。

### 東築地壇と主要伽藍造営軸の振れ

築地壇は、南築地壇と東築地壇とで軸線が異なり、南築地壇が主要伽藍造営軸と合致するのに対し、東築地壇は僧房の軸線はもちろんのこと、主要伽藍造営軸とも合致せず、これらとは異なる別の軸線で築かれたと考えられる。ただし、東築地壇は、長大な距離のうちのごく一部を検出しただけであるので、算出してもその数値に誤差が含まれている可能性も十分考えられる。ここでは、この点を踏まえたうえで、主要伽藍造営軸との振れがどの程度あるのか、大枠の傾向だけでも知るためにあえて算出してみたい。

T17、T19B、S49年度調査時に塔に設けたトレンチで、東築地壇に伴う外溝である雨落ち溝17を確認している。この雨落ち溝17の西肩口が、すなわち現状での東築地壇の東肩口となる。本来は、築地壇の基底部を基準とすべきところであるが、S49年度調査時の塔トレンチでは、東側の基底部を検出できていない。このため、現状での東築地壇東肩口である雨落ち溝17の西肩口を基準点として設定した。

表8の数値を用いて、各トレンチ間でのS49年度復元軸との方位の振れを算出したのが表9である。組み合わせを変えて3区間に算出したが、MN・MOが北で西へ振れるのに対し、NOは北で東へ振れるというように、軸線の振れに大きな差異が生じている。上面を削平されたあの溝の肩口を基準としていること、先述のように約200mの長大な築地壇のなかのわずか3点を定点としていることなどの調査上の制約のほか、地形的な制約によって築地壇が直線ではなく、蛇行していた可能性も考えられる。これらのことを考慮に入れると、軸線の振れにばらつきが出るのも当然のことであるかもしれない。したがって、ここではMOの数値しか残らないことになるが、異なる方位を生じさせる要因となっているT17を基準点から除外することとする。MOは3区間のなかでもっとも検出距離が長く、検出距離に応じた加重平均N $0^{\circ} 0' 33''$ Wが合致することから、正確性には劣るがMOを基準となる数値とし、方位の振れとしたい。東築地壇の旧伽藍配置との軸線の振れはN $0^{\circ} 0' 33''$ で、北

表8 東築地壇の基準遺構の位置

| 点 | 遺構       | X座標   | Y座標    | 調査区      |
|---|----------|-------|--------|----------|
| M | 東築地壇 東肩口 | 93.36 | 209.67 | T19B     |
| N | 東築地壇 東肩口 | 93.67 | 120.61 | T17      |
| O | 東築地壇 東肩口 | 93.38 | 85.15  | S49年度調査区 |

表9 東築地壇遺構方位との振れ

| 区間            | 遺構                | X座標の差 | Y座標の差  | 方位の振れ                  |
|---------------|-------------------|-------|--------|------------------------|
| MN            | 東築地壇 (T19B・T17)   | 0.31  | 89.06  | - $0^{\circ} 11' 57''$ |
| MO            | 東築地壇 (T19B・S49年度) | 0.02  | 124.52 | - $0^{\circ} 0' 33''$  |
| NO            | 東築地壇 (T17・S49年度)  | 0.29  | 35.46  | $0^{\circ} 28' 6''$    |
| GH・IJ・KLの加重平均 |                   |       |        | - $0^{\circ} 0' 33''$  |
| 新主軸との振れ       |                   |       |        | - $1^{\circ} 48' 16''$ |

(-) は北で西へ振れる

表10 各造営軸との方位の振れ

|         | S 49年度復元軸との方位の振れ | 座標北との方位の振れ    |
|---------|------------------|---------------|
| 主要伽藍造営軸 | 1° 48' 49"       | - 9° 19' 20"  |
| 僧房造営軸   | 0° 49' 19"       | - 10° 18' 50" |
| 東築地壇造営軸 | - 0° 0' 33"      | - 11° 8' 42"  |

( - ) は北で西へ振れる

で西へ振れるが、S 49年度復元軸とはほぼ一致する。

東築地壇の主要伽藍造営軸との軸線の振れは、N 1° 48' 16" Wとなり、100mで約3mのずれが生じることとなる。この軸線の振れが西築地壇においても同様である場合、この主要伽藍造営軸との振れは、すなわち南築地壇との軸線の振れとなる。この両者の振れに基づいて築地壇を復元すると、築地壇南東隅は鋭角気味に、南西隅は鈍角気味になる。

### 真北との振れ

つぎに、これまでに算出した主要伽藍造営軸、僧房造営軸、東築地造営軸と真北の振れについて検討する。

3種類の造営軸の算出に際して基準としたS 49年度復元軸に対し、平面直角座標系第V系（いわゆる国土座標）の座標北はN 11° 8' 9" Eとなり、北で東へ振れる。この数値を使って、それぞれの座標北との方位の振れを算出したのが表10である。備前國分寺跡の造営方位となると考えられる主要伽藍造営軸の振れ（N 9° 19' 20" W）を筆頭に、座標北で西へ約1° ずつ、9°～11°の範囲で振れており、どの軸線も座標北とは一致しない。平面直角座標系の座標北は真北に近いが、正確に言えば同一ではない。ただし、座標北に対する角度が大きく異なる軸線は認められないことから、ある程度真北を考慮に入れて造営方位が決められたと推測される。また、主要伽藍造営軸（講堂・金堂・中門・南門・回廊）、僧房、東築地壇の3種類の造営軸の振れは、築造された時期や、建物群としてのまとまりの違いによるものと考えられるが、それらは少しずつ振れてはいるものの、それぞれがばらばらの造営方位を用いるのではなく、近い振れの数値をもつことは特筆されよう。

### （2）単位尺の復元

完結した1つの堂宇で礎石が原位置を保ってほぼ完全な形で遺存している場合、礎石をもとに柱間を割り出し、そこから単位尺を復元することが可能であるが、備前國分寺の場合、これまでに述べてきたようにそのような遺存状況ではない。このため、別の復元方法を考えなければならなくなる。そこで、礎石が遺存する回廊の柱間からの復元と合わせて、講堂、金堂、中門、南門、東西面回廊、塔、僧房の堂塔間距離からの復元、この2つの方法を用いて単位尺を復元したい。なお、8世紀頃の建築に用いられた尺の単位は、1尺=29.5cm～29.8cmであると想定されている。

まず、堂塔の堂塔間距離からの復元を試みたい。心々間距離を算出し<sup>(2)</sup>、これに当時の尺の単位をあてはめて復元する方法である。各堂塔の推定心の座標を示したものが表11である。この座標をもとに堂塔間距離を算出するが、座標の基準としているS 49年度復元軸と主要伽藍造営軸との間にN 1° 48' 49" E、また僧房との間にはN 0° 49' 19" Eの振れがあるため、これを考慮して算出する必要がある。つまり、東西距離（X座標の差）でx m、南北距離（Y座標の差）でy m離れた2点間の距

離Lを方位の振れ ( $\alpha = 1^\circ 48' 49''$ ) を考慮して距離に換算する計算式は、東西距離は  $L = x \cos \alpha \pm y \sin \alpha$ 、南北距離は  $L = y \cos \alpha \pm x \sin \alpha$ <sup>(3)</sup> となる。

この計算式で堂塔間距離を算出し、さらに堂塔間距離それぞれを1尺=29.5cm~29.8cmで換算したものが表12である。このなかで完数に近い値を算出するものが単位尺である可能性が高い。1mm単位での差であるため顕著な差が生じにくいが、1尺=29.7cmもしくは29.8cmに絞られてくる。

つぎに、1尺=29.7cm、29.8cmのどちらが単位尺として妥当であるのかを実際に礎石が遺存する北・西・南面回廊の柱間にあてはめて検証する。

北面回廊柱間は、1尺=29.7cmの場合、角2間×9尺と講堂取付き部4尺を除き3間×10尺と復元できる。これに対し1尺=29.8cmの場合、角2間×9尺と講堂取付き部3尺を除き3間×10尺と復元できる。これによって、主要伽藍造営軸から北面回廊端の柱までが、前者で115.5尺、後者で114.5尺となり、1尺分の差が生じる。いっぽうの南面回廊柱間は、いずれの単位尺を用いても角2間×9尺と中門取付き部6尺を除き5間×11尺と復元できる。そして、主要伽藍造営軸から南面回廊端の柱までは115.5尺となる。

本来、北面回廊と南面回廊の東西端とその主軸の距離は同じでなければならない。しかし、1尺=29.8cmを用いた場合、主要伽藍造営軸—北面回廊端柱間で1尺分短くなり、成り立たない。したがって、この単位尺を使用したとは考えにくく、単位尺には1尺=29.7cmが用いられたと考えられる。

表11 堂塔心の推定座標

| 遺構          | X座標    | Y座標    |
|-------------|--------|--------|
| P 講堂心       | 2.98   | 174.81 |
| Q 金堂心       | 1.7    | 135    |
| R 中門心       | -0.09  | 81.37  |
| S 南門心※      | -0.19  | 60.56  |
| T 西面回廊 磚石50 | -30.39 | 122.2  |
| U 東面回廊 磚石54 | 32.77  | 120.21 |
| V 塔         | 70.5   | 85.3   |
| W 僧房        | 4.11   | 201.4  |

※南門は主要伽藍造営軸となるが、心はこの軸線上にはない

表12 堂塔間の距離

| 区間          | 実長(m) | 0.295 | 0.296 | 0.297 | 0.298 | 計画値(尺) |
|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| PQ 講堂心—金堂心  | 39.8  | 134.9 | 134.4 | 134   | 133.6 | 135    |
| QR 金堂心—中門心  | 53.5  | 181.5 | 180.9 | 180.3 | 179.7 | 180    |
| RS 中門心—南門心  | 20.8  | 70.5  | 70.3  | 70    | 69.8  | 70     |
| TU 東西回廊中央磚石 | 63.1  | 213.8 | 213.1 | 212.4 | 211.6 | 210    |
| 造営軸—塔心      | 70.1  | 237.6 | 236.8 | 236   | 235.2 | 235    |
| PW 僧房—講堂    | 26.6  | 90.2  | 89.9  | 89.6  | 89.3  | 90     |

### (3) 伽藍配置と堂塔間の距離

前項の表12で、主要堂塔間の実際の距離と設計上の計画値を示した。ここでは、さらに4周を囲む築地塀の全長も含め、備前国分寺全体の伽藍配置、堂塔間距離について検討したい。

#### 築地塀の復元

まず築地塀の全長を復元するにあたり、2つの問題点がある。1つは、築地塀が東・南・北面の各総延長のうちのごく一部の調査であるため計算式を用いて算出される距離に誤差があるということである。特に西築地塀は確実な遺構を検出できていないため、推測の部分が多い。2つ目は、検出した遺構の制約から用いた座標が築地内溝肩であるため、築地の全長を知るためには算出した数値にさらに築地基底部幅、9~10尺<sup>(4)</sup>を考慮した数値を加える必要があることである。

そこで、各築地塀のS49年度復元軸との方位の振れを考慮して、堂塔間距離と同様の計算式を用いて算出した数値が表13である。これに築地基底部幅を考慮すると、南・北築地塀は600尺、東・西築地塀は軸線の異なる南築地塀のために全長が異なり、東築地塀が670尺、西築地塀が655尺となると推測される。このように築地塀は、やや不整形な南北に長い長方形として復元できる。

#### 伽藍配置と堂塔間距離

備前国分寺の伽藍配置に堂塔間距離を示したものが図235である。伽藍配置は、講堂と中門の両梁行に南北長330尺（実長331尺）、東西長240尺（実長243尺）の回廊がコ字状にとりつき、金堂がそれらの堂宇に囲まれる。中門・金堂・講堂は南北一直線に並び、金堂心は中門心から180尺、講堂心から135尺と講堂寄りに位置する。さらに、中門心の南70尺に南門心が、講堂心の北90尺には僧房心が位置し、中門心より北へ62m、主要伽藍軸から東へ235尺に塔心が位置する。このように備前国分寺は、主要建物が一直線上に並び、回廊の東へ塔を配置する、国分寺式伽藍配置をとる。そして寺域を区画する築地塀が、南北に長い長方形に堂塔を囲む。

しかしここで問題となるのが、表12の計画値と実長値の関係である。金堂一中門間は180尺（実長180.3尺）、中門一南門間は70尺（実長70尺）、僧房一講堂間は90尺（実長89.6尺）というように実長を尺に換算してみるときわめて完数に近い数値になるものがある一方で、講堂一金堂間は実長が計画値よりも約30cm短く、東・西面回廊心々間では約73cm、主要伽藍軸一塔間では約30cm実長が長くなるという誤差が生じるものもある。

前者が当初の計画どおりに配置、造営されていったのに対し、後者はそうではなかったと推定される。堂塔間距離の長い金堂一中門間ではほぼ誤差なく、また北西から南東へ傾斜する地形にあって、

表13 築地塀の全長<sup>(5)</sup>

| S49年度復元軸との方位の振れ | 実長(m)      | 計画値(尺) |
|-----------------|------------|--------|
| 南築地塀            | 1° 48' 49" | 175.4  |
| 北築地塀            | -0° 0' 33" | 175.2  |
| 東築地塀            | -0° 0' 33" | 196    |
| 西築地塀            | -0° 0' 33" | 191.7  |

1尺=0.297m換算。

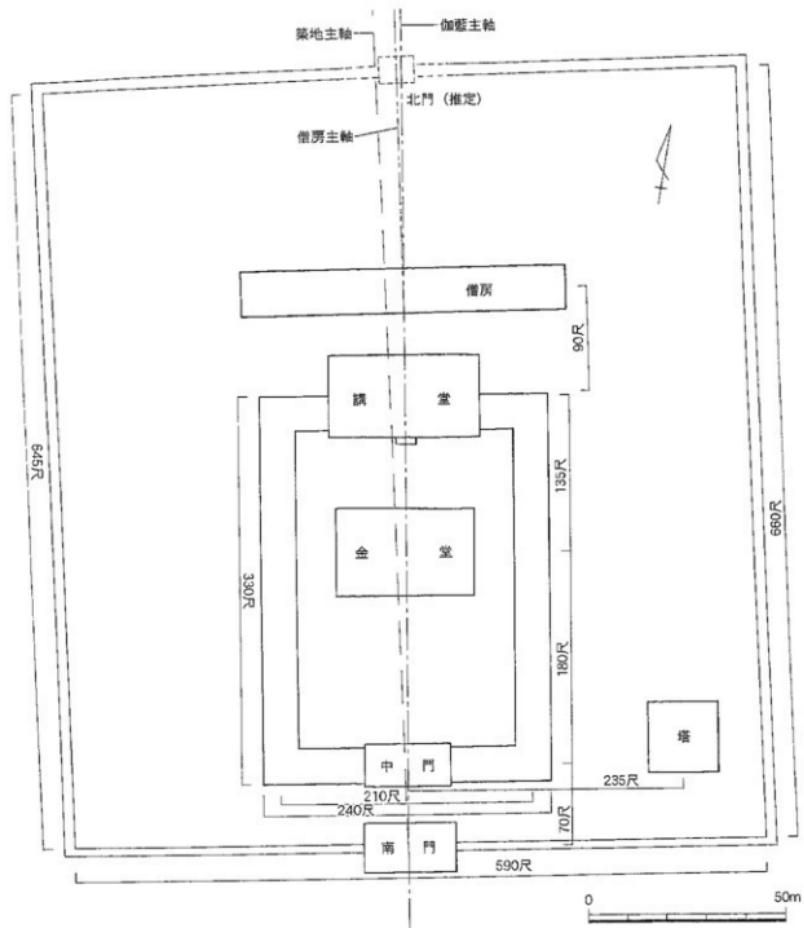


図235 伽藍配置および造営軸の復元 (1/1,250)

東西方向である東・西面回廊心々間距離と主要伽藍軸一塔間での誤差を比較した場合、距離の短い前者の方が誤差が大きいことから、堂塔間距離の長短や地形の傾斜によってこの誤差が生じているものではないと考えられる。むしろ実際に占地を行っていく際に、他の堂宇とのバランスや個々の地形などに合わせたために計画とはややずれた位置に造営することになったのではなかろうか。

また、S49年度調査時に中門と南門の心々間距離が70尺で、両者がきわめて接近していることが

指摘されているが、新たに主要伽藍軸を復元して算出した中門—南門間の心々間距離も70尺と変更がない。したがって、中門—南門間が近接していたことが確実となった。とはいえ、中門南の雨落ち溝10から南門北の雨落ち溝12までの間には南北約5.3mの空間が広がっており、近接するのは確かだが、ある程度は距離が保たれていたことがわかる。

#### (4) 造営順序

さきに算出した堂塔の軸線の振れ、昭和49年度発掘調査と本報告書で報告する第1次から第3次の調査によって得た知見を参考に、造営の順序について検討をおこないたい。

備前国分寺では、主要伽藍軸にのる講堂・金堂・中門・回廊・南門・塔のほか、僧房、東・西・北築地壇、これら3つの軸線が用いられていることはすでに指摘したところであるが、これらの軸線は単に相互の軸線の振れを示すだけでなく、建築順序の差を反映していると考えられる。備前国分寺として主要堂宇が完成するまでにはそれなりの歳月を費やしたと推測される。そして造営にあたっては、主要堂宇のなかでも金堂と塔の造営が優先されたように、そのほかの堂宇についても優先順位があつたと推測される。その優先順位によって造営時期に違いがあり、それが軸線の振れとなって現れたと考えられる。したがって備前国分寺では、大きく3工期に分かれて造営が行われたと推定される。

まず、1期に金堂と塔を含む主要伽藍軸に基づいて造営された堂宇、講堂・金堂・中門・回廊・南門・塔が造営されたと考えられる。この主要伽藍軸に基づいて造営された堂宇間の前後関係を検討してみると、塔の軒瓦には古い様相と新しい様相が混在しその竣工が遅れた可能性があり、まず金堂が塔に先立って造営されたことが想定される。金堂が先行して造営される例は、遠江や隣国の大作国分寺で認められる（平岡2002）。なお、この金堂造営にともなうと推測される据立柱建物（図26P-5～9）が、講堂の造営予定地に建てられている。

つぎに造営されたのは、金堂をとり囲む講堂・中門・回廊であったと考えられる。講堂・中門と回廊との取り付け部の基壇に盛土の連続性があることから、これらの堂宇はほぼ同時期に、一連の工程で造営された可能性が高い。

主要伽藍軸のなかで最後に造営されたと考えられるのが、南門と南築地壇である。南門と南築地壇は、両者の取り付け部の基壇盛土の連続性から、同時に一連の工程で築かれ、主要伽藍軸と同じ軸線で築かれている。しかし、南門心は軸線上にのらない。原因は定かではないが、金堂や塔、講堂・中門・回廊の造営よりも少し時間をおいて造営が始まったか、あるいは当初とは南門の規模を変更したなどの理由を考えられよう。

2期に造営されたのは、僧房であろう。主要伽藍軸との軸線の振れが小さく、金堂や講堂などと軸線をそろえようとしていたと推測される。1期との時間的隔たりはさほどなかったのかもしれない。

南築地壇と東・西築地壇の接続部の様子を確認できていないので確実ではないが、3期になって1期に築かれた南築地壇に東・西・北築地壇が付け足されたと考えられる。これらの軸線は主要伽藍軸とは振れ、南築地壇に対して東・西築地壇は斜交し、北築地壇も平行にはならない。つまり、寺域を不整形な長方形の築地壇が囲むようになる。

このように堂宇の軸線の振れから、備前国分寺の諸堂宇の造営が大体で3時期に分かれるとして推定される。1～3期をみていくと、1主要伽藍→2生活域（僧房など）→3その他の周辺施設（築地壇）という順序になっていることがわかる。そして先述のとおり1期のなかで主要伽藍は、①金堂→②塔

→③講堂・中門・回廊→④南門・南築地塀の順で造営される。寺域全体にわたる調査ではないため現在わかっている堂宇に限定されてしまうが、備前国分寺ではまず、寺の重要な施設である金堂、塔、講堂などの主要伽藍が造営され、つぎに寺に常駐する僧のために必要な僧房などの生活城、そして最後に周辺施設が造営されたと推定される。実際はもっと複雑で、ここで分けた3時期も重複したりしていたであろうが、大枠での傾向としてはこのような造営過程を経たと復元される。このことから推測するに、造営にあたり、あらかじめいくつかの性格を同じくする施設群に分けて一つの施工区とし、施工区ごとに順序立てで造営していったのではないかろうか。『続日本紀』の記載から、国分寺の造営になかなか着手しなかった國があったことが知られている。備前国分寺もこれらと同様に着手が遅かったのかどうかはわからないが、造営自体は計画的に行われていったと考えられる。

本報告書で報告した調査成果によって、主要伽藍とその他の堂宇の軸の振れ、造営時に用いた単位尺などを復元することができた。これらは、今後の調査によって修正が必要になるかもしれないが、備前国分寺の調査・研究の基礎になるものと期待したい。

本節および以下の節の記載にあたっては箱崎和久氏から多くの教示・指導を得た。記して感謝の意を表したい。

#### 註

- (1) 加重平均は、各方位の振れに検出距離乗じ、この和を検出距離の和で割ることで求められる。
- (2) 箱崎和久2003「2 伽藍配置の復元」『吉備池廃寺』P162～163を参考。
- (3) 南北方向で一方からもう一方をみたときに、第1・第3象限にある場合は減法（-）、第2・第4象限にある場合は加法（+）となる。また東西方向では、同様に一方から一方をみたときに、第1・第3象限にある場合は加法（+）、第2・第4象限にある場合は減法（-）となる。
- (4) 中・南門調査区とT19Bの調査成果から基底部幅は9～10尺であったと考えられる。
- (5) 築地塀内溝の座標を使用しているため、正確には築地幅分足した数値が全長である。

#### 引用・参考文献

- 箱崎和久2003「2 伽藍配置の復元」『吉備池廃寺発掘調査報告』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所  
平岡正宏2002「2 塔建立の時期について」『美作国分寺跡塔跡発掘調査報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告  
書72 津山市教育委員会  
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所2003『古代の宮術遺跡！遺構編』  
備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10  
岡山県教育委員会

## 第2節 堂塔の考察

### (1) 各堂塔の総括

前節において伽藍造営軸、単位尺の検討から伽藍内の堂塔の造営順序を推定復元した。

国分寺式伽藍配置をとる備前国分寺は、南門・中門・金堂・講堂・僧房の主要建物が一直線上に並び、中門と講堂を結ぶ回廊の東へ塔を配置している。寺域を区画する築地塀は南北に長い長方形となり、堂塔を囲繞する。

ここでは、こうした伽藍内の個々の堂塔について検討してみたい。以下に、堂塔の基壇、建物規模の一覧を示す。なお、個別遺構・遺物の小結と重複するところもあるが、全体をまとめて総括したい。遺物のうち瓦については第4章第3節にまとめている。

#### 金堂

金堂は回廊内に独立して配置されている。建物の心々距離みると、中門から180尺、講堂から135尺の位置になる。講堂寄りにあり、南門と中門間の距離が近接していることを考慮すると、回廊内における金堂前面の空間を広く確保した配置といえる。国分寺式の伽藍配置については、塔を回廊外に配置し、金堂前面の儀式空間を確保しているという積極的な評価もなされており（上原1986）、備前国分寺においてもその様相が認められる。

ところで、国分寺で営まれた法会の具体像については発掘調査からうかがい知ることは困難である。しかしながら、文献等には少ないながらも資料が残っていたり、安芸国分寺跡からは出土した土器に「安居」・「齋會」といった宗教行事の墨書きがみられたりして国分寺で行われた法会の実態が多少なりとも想起される（妹尾ほか2002）。

表14 堂塔規模の一覧

単位：尺 ( ) : m

| 名称   | 種別      | 柱頭(箇) | 桁行         | 桁件寸法             | 梁行        | 梁行寸法           | 軒の出      | 基壇寸法    |               |
|------|---------|-------|------------|------------------|-----------|----------------|----------|---------|---------------|
| 金堂   | -       | 7×4   | 88(26.14)  | 11 12 14×3 12 11 | 46(13.68) | 11 12 12 11    | 14(4.16) | 116×74  | (34.45×21.98) |
| 講堂   | -       | 7×4   | 111(32.97) | 13 17×5 13       | 54(16.04) | 13 14 14 13    | 8(2.38)  | 127×70  | (37.72×20.78) |
| 内陣講堂 | 身舎一両形式  | 5×4   | 53(15.74)  | 10 11×3 10       | 42(12.47) | 10 11 11 10    | 8(2.38)  | 69×58   | (20.48×17.23) |
|      | 内陣一外陣形式 | 5×5   | 53(15.74)  | 10 11×3 10       | 62(16.44) | 10 11 11 10 10 | 8(2.38)  | 69×68   | (20.49×20.20) |
| 中門   | -       | 5×2   | 61(18.12)  | 12×2 13 12×2     | 24(7.13)  | 12×2           | 6(1.78)  | 73×36   | (21.88×10.68) |
| 南門   | -       | 5×2   | 58(17.23)  | 11 12×5 11       | 22(6.53)  | 11×2           | 10(2.97) | 78×42   | (23.17×12.47) |
| 僧房   | 礎石建(1)  | -     | -          | 10               | -         | 10か11          | -        | 南北38か39 | -             |
|      | 礎石建(2)  | -     | -          | -                | -         | 11             | -        | -       | -             |
|      | 檼立柱(3)  | -     | -          | -                | -         | -              | -        | -       | -             |
|      | 礎石建(4)  | □×2   | -          | 8                | 20(6.94)  | 10×2           | -        | -       | -             |
| 塔    | -       | 3×3   | 30(8.91)   | 10×8             | 20(8.91)  | 10×3           | 15(4.46) | 80×60   | (17.82×17.82) |
| 回廊   | 楕圓式     | -     | -          | -                | 18(5.35)  | 9×2            | 6(1.78)  | 30      | (8.91)        |

金堂の建物は、桁行7間(88尺)×梁行4間(46尺)で、柱間寸法は桁行11・12・14・14・14・12・11尺×梁行11・12・12・11尺と復元される。基壇規模は東西116尺(34.45m)、南北74尺(21.98m)と考えられる。桁行5間×梁行4間の建物を除けば、国分寺の金堂としては平均的な規模であると思われる。他国の国分寺の中でも、大規模なものは相模國分寺跡のように桁行116尺×梁行56尺の建物規模をもつものも存在し、一様とはいえない。

金堂基壇は、基壇構築途中に礎石据え付け穴を穿って礎石を置き、さらに周囲に版築を施して完成されていることを確認できた。

金堂周囲の瓦だまりは上下2層に分かれており、この2層に含まれる瓦を検討すると、創建以来の金堂建物は火災以外の原因によって平安時代中期に大きく倒壊し、平安時代後期に再建を行っていることがわかる。再建された建物がいつ廃絶したかははっきりしないが、講堂のように鎌倉時代前半や室町時代に属す瓦が出土せず、講堂の焼亡と同時に廃絶した可能性が強い。寺の衰退とともに、その役割は講堂に包括されていったものと思われる。

### 講堂

講堂は、建物の心々距離で南門心から北へ385尺のところに位置する。東西辺の南よりに回廊が取り付き、中門と講堂を結ぶ回廊で囲繞された空間の一部を構成する。

創建時の建物は、桁行7間(111尺)×梁行4間(54尺)で、基壇規模は東西127尺(37.72m)×南北70尺(20.79m)と復元され、金堂建物よりやや大型である。他の国分寺と比べると、規模は大型の部類に含まれる。

建物は12世紀半ば～後半に火災に遭い焼失しているが、出土した瓦から鎌倉時代前半に再建されたとみられる。再建された建物は、基壇北東部に桁行5間(53尺)×梁行4間(42尺)もしくは内陣と外陣をもつ桁行5間(53尺)×梁行5間(52尺)の規模と推定される。再建建物の基壇は、1回ないし2回の改修を受けており、礎石の据え直しも行われていることから、再建後も改修を重ねたものとみられる。さらに、15世紀後半以前の瓦は小型であったが、15世紀後半に大型で滑り止めをもつ瓦に変化しており、屋根全体の形状が変わった可能性が強い。

この建物は16世紀後葉まで存続していたと考えられ、備前国分寺の伽藍の中で最後まで残った建物の一つである。

### 中門

南門心から中門心までは70尺と近接しているが、南門北側の雨落ち溝12から中門南側の雨落ち溝10までの間は南北幅約5.3mの空間がある。中門からは回廊が派生し講堂にとりつく。

中門の規模は、桁行5間(61尺)×梁行2間(24尺)で、柱間寸法は桁行12・12・13・12・12尺×梁行12・12尺と復元される。軒の出は6尺(1.78m)で、基壇規模は東西73尺(21.68m)×南北36尺(10.69m)となる。屋根は単層の切妻造りで五間三戸の門であったと推定される。他国の国分寺には3間×2間の規模も認められる中、備前国分寺跡では南門とほぼ同規模の中門をつくっている。

近世に中門跡に池1が掘られ、大幅に基壇が削平されてしまっている。

### 南門

南門の規模は、桁行5間(58尺)×梁行2間(22尺)で、柱間寸法は桁行11・12・12・12・11尺×梁行11・11尺と復元される。軒の出は10尺(2.97m)と推定され、基壇規模は東西78尺(23.17m)×南北42尺(12.47m)となる。屋根は重層の入母屋造りと考えられ、五間三戸の門である。中門よ

りも基壇規模が大きく、屋根形態も中門とは異なっていたと推定されるので、国分寺の表玄関として重厚感のあるつくりの門であったのではないかと考えられる。

南門は出土した瓦から、講堂と同様に補修を重ねながら維持された堂塔の一つであったと考えられる。

#### 僧房

僧房は不明な点が多くあり、詳細な規模の復元は困難であったが、今回の調査区では最低2回の建替えが認められた。創建時の僧房は東西規模の把握ができていないが、T 8の礎石80・85を東限に礎石の痕跡が認められなくなるため、ここを東限とした建物であったと考えられる。基壇南北には雨落ち溝が設けられ、塗行は2間もしくは3間と推定される。この建物から東へ8m以上離れたところで礎石86・87以東に続く別棟の建物が確認された。両建物は同一基壇上に造られており、同時併存していた可能性が高いと判断される。

これらの建物は、創建後9世紀後半頃に廃絶していると考えられ、その後掘立柱建物に建替えられたと想定される。さらに、T 7西端でみられた礎石建ち建物に建替えられた。僧房の最終的な廃絶時期は明確ではないが、古代末までは存続していたのではないかと考えられる。

#### 塔

塔の規模は、検出した根石から10尺等間の一辺30尺(8.91m)である。基壇規模は、一辺60尺(17.82m)で、軒の出15尺(4.46m)と復元される。他国の国分寺と比較すると、最大のもので柱間寸法12尺等間の一辺36尺の塔がみられるが、概して柱間寸法が10~11尺で一辺30~33尺の規模が多く認められ、国分寺クラスの塔としては標準的な規模といってよい。

礎石下の根石の積み上げは最大で高さ70cmを確認でき、根石を設置しながら盛土し基壇を構築していることが判明した。基壇を構築した後、もしくはその途中で礎石の掘え付け掘りかたを穿って礎石を置いたのではなく、基壇はベース面から根石の地業を開始させそのまま上面まで構築し続けられている。高層建物の基壇構築方法の一事例として評価できる。

塔の根石に二次的な改変は認められず、心礎上に鎌倉時代の作と考えられる石造七重層塔が立っていることや出土した土器・瓦から、塔は平安時代中期には廃絶し、その後、再建されることとなかったと考えられる。

#### (2) 回廊の復元(図236)

調査によって、複廊式の回廊が中門を発し講堂にとりつくことが判明した。全国の国分寺で複廊式の回廊をもつものは、管見では陸奥・信濃・遠江・三河・備前の5ヶ国のみである。また、その複廊が金堂を囲んで中門と講堂を結ぶ配置をとるのは、信濃と備前のみである<sup>(1)</sup>。いわゆる国分寺式の伽藍配置といえども、2ヶ国でしかみられない特徴的な伽藍といえる。

上原真人氏の伽藍配置を中門から発した回廊の閉じ方から分類した方法によれば、備前国分寺は「回廊が中門から講堂にとりつき、回廊内の伽藍中軸上に金堂のみを置くC6型」と認定できる(上原1986)。C6型の伽藍配置をとる国分寺は、出雲・長門・信濃・備前の4カ国である。そのうち、出雲と長門は回廊が複廊式でなく単廊式であり、回廊の形式が異なる。

さて、回廊については第3章で調査区ごとに北面回廊(講堂調査区・T4)、南面回廊(南門・中門調査区)、西面回廊(T5)、東面回廊(T6)の概要を述べてきたが、それらは南北に長い回廊の

ごくわずかな調査に過ぎず、回廊の全体像を把握するには至っていない。

そこで、それぞれの調査区で確認した柱間等の情報から、回廊全体を復元してみたい。

梁行寸法はすべて9尺等間である。北面回廊の桁行柱間は、角2間×9尺と講堂取り付き部を除き3間×10尺と復元できる。また、南面回廊の桁行柱間は角2間×9尺と中門取り付き部を除き5間×11尺と復元される。

しかし、西面回廊北端（北西角を除く）～T5西面回廊礎石間は、どの単位尺を用いても等間隔柱間割にはならない。したがって、西面回廊では等間隔柱間割とは異なる柱間割の方法が用いられたと考えられる<sup>(2)</sup>。三河国分尼寺跡のような異なる尺を混在させる可能性（前田2006）、また、興福寺の例のような回廊の途中に小門があり、その小門の位置と規模を決定したのちにその南北を均等に割る均等柱間割（興福寺1999）の可能性、この2つが考えられる。

前者の場合、北面回廊の桁行の柱間と南面回廊の桁行の柱間には違う尺が用いられていることを考慮すると、西面でも2つの尺が混在する可能性を否定できない。また、後者の場合、小門が果たして存在するのか現状ではわからない。このように両者のどちらであるのか判断しがたい。したがって、ここでは、とりあえず小門の存在の有無がわからないため、混乱を招かないように異なる尺が混在する柱間割の復元を図236で提示した。

この復元による東西面回廊の桁行寸法は、北角から2間×9尺、南角から2間×9尺、その間283尺で、桁行南北は319尺となる。回廊全体の規模は、棟通り心々で南北301尺（89.40m）、東西213尺（63.26m）をはかり、桁行総長は856尺（254.23m）と復元される<sup>(3)</sup>。

回廊の西半は、礎石が原位置をとどめ遺存状況が良好である。検出した礎石上面高は、南面回廊西側で20.05m、北面回廊西側（T4）で22.60m、その間の西面回廊（T5）で22.17mをはかる。南面と北面回廊の礎石上面高の比高差は2.55mであり、回廊は中門から講堂に向かって勾配2.85%（傾斜角度1.63°）のかなり緩やかな傾斜で設けられていたことがわかる<sup>(4)</sup>。

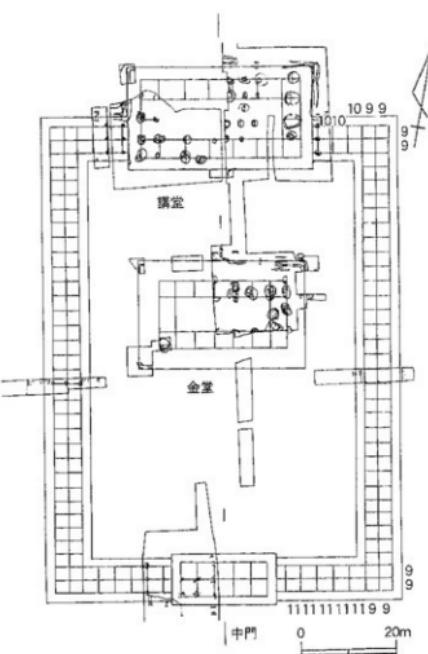


図236 回廊復元図（1/1,000）

### (3) 基壇外装の問題

第3章の遺構各説で述べてきたように、基壇外装に関しては昭和49年度の確認調査および今回の3次にわたる調査で、すべての堂塔においてその痕跡を認めることができなかつた<sup>(5)</sup>。基壇には通常、外面の保護や装飾を目的として外装が施されている。外装材の抜き取り痕跡までもが失われ、検出できなかつたことが考えられるが、基壇側縁がほぼ認められるなか、すべての堂塔で検出できなかつたことは特異な状況であるといえる。

もともと基壇外装自体が設けられていなかつた可能性もあるが、ここでいくつかの検討を加えてみたい。

まず、切石積、乱石積、瓦積の可能性があるが、すべての調査区において詳細に検出作業を行つたが、基壇側縁基底部には地覆石やその抜き取り痕跡等を確認することができなかつた。また、周囲に外装材と考えられる凝灰岩片や石材、瓦は認められなかつた。金堂基壇北辺には石敷1の南東に10個弱の石材が散布していたが、基壇からは遊離している状態であり、この石材は石敷1に由来する可能性が高く、基壇が乱石積であったとは即断できない。

それに対し、金堂の石敷1・北面回廊東側の石列1・塔の石列2は、いずれも基壇の一部分にのみ配され、また、創建時ではなく補修・追加の段階で配置されている。

博は合計12点が出土したが、その出土位置は特定の調査区にまとまらず、広範囲からみられた。基壇外装の痕跡として出土したものではなく、その総量からしても埠積基壇であったとは想定しがたい。

そのため、痕跡が遺存しにくい木製の基壇外装の可能性が出てくる。木製の基壇外装は三河、遠江国分寺跡で検出されている。三河では溝状の掘りかた内に角材を立て並べている（前田ほか1989）。遠江でも基壇外縁に板状の炭化物とこの板を支えた柱の痕跡が確認されている（磐田市教育委員会文化財課2007）。さらに、板材・角材やその掘りかたの痕跡が認められない奈良県吉備池廃寺では、切石状の壇正積の木製基壇を想定している（箱崎2003）。つまり、地覆材に束を立て、比較的厚い横板材を束の間に落とし込む構造であり、こうした構造であれば痕跡を残しにくくしている。乱石積や瓦積、埠積の痕跡をとどめず、板材等の痕跡もない備前国分寺の堂塔においても、このような木製基壇が想定可能であろう。

基壇に外装が施されていないことと関連して、基壇の外周にめぐる雨落ち溝においても、その痕跡が明確でないものがみられ、基本的に素掘りの溝が掘られているのみである。これらの雨落ち溝は、基壇側縁下部の斜面と段差をもって区分されるようなものではなく、基壇側縁下部から一連の斜面をなしている。雨落ち溝は、堂塔が建てられたベース面が傾斜し、排水処理が可能であれば必要ないとも考えられるし、基壇の高さによって基壇への雨水の浸入を防ぐことができると思われる<sup>(6)</sup>。実際に金堂の雨落ち溝1の最下層は砂質土であり、中門基壇南の雨落ち溝10では水成堆積による砂質土がみられ、雨水等が流れていたことが確認される。

以上、すべての堂塔で明確に基壇外装の痕跡を認めることができなかつたことから、想定されるいくつかの基壇外装とその外周の雨落ち溝について検討してきた。

すべての堂塔に痕跡がなかつたことから、基壇外装がもともと設けられていなかつた可能性があるが、するとただの土壇であったことになり、外面の装飾性は乏しく、基壇土の流出が懸念される<sup>(7)</sup>。切石積、瓦積、埠積はその外装材の出土がない、もしくは少ないことから想定しえない。乱石積につ

いても据え付け等の痕跡が検出できなかったことから想定しがたい。現状では、すべての堂塔で痕跡をとどめていない点から木製の基壇外装をその候補として想定しておきたい。それは掘りかたを明瞭に伴うものでなく、吉備池廃寺で想定されているように、「切石の壇正積基壇の石材を木におきかえたような構造」をもった外装であったと考えられる。

#### (4) 伽藍の変遷

今回の発掘調査で備前国分寺について明らかになったことは多い。とりわけ、主要堂塔について、創建期から16世紀後半に寺院としての備前国分寺が廃絶するまでの状況が知られるようになった。

第1項で個別堂塔について総括を行ってきたが、ここでは備前国分寺の伽藍全体の中で堂塔がどのように変遷していくのかみてみたい。なお、創建段階の造営順序等は前節で検討しているので、建立後の建物がどのように廃絶、再建を経たのかを中心にみていくこととする。

伽藍は、軒丸瓦1式と軒平瓦1B式の組み合わせで創建された。塔に用いられた軒瓦も基本的に軒丸瓦1式と軒平瓦1B式であるが、他に塔にはぼ固有の型式の軒瓦がみられ、それらの軒瓦は古い様相と新しい様相が混在し、塔の竣工が遅れた可能性がある。さらに、塔基壇下には瓦を包含する溝19が掘られており、塔基壇構築以前に伽藍内の別の場所で既に瓦を用いた工事が始まっていたとみられる。

伽藍の完成後、金堂は平安時代中期に倒壊し、平安時代後期に改修、再建される。講堂および回廊は平安時代末の火災によって焼失する。講堂は創建期の基壇の北東部において鎌倉時代前半以降に再建され、室町時代を通じて16世紀後半まで維持される。同じように、南門も補修を繰り返し、講堂とともに維持されている。

僧房は不明な点が多いが、創建時の礎石建ち建物は掘立柱建物へと建替えられ、さらに伽藍主軸付近で礎石建ち建物がつくれられ、存続している。塔は平安時代中期頃に倒壊したと推定され、その後再建されなかつたものと考えられる。

12世紀半ば～後半の講堂および回廊の焼失後、鎌倉時代前半以降に講堂が再建された段階には、伽藍の主要な堂塔である金堂・塔は失われていた可能性が高く、伽藍の中心は講堂となっている。

#### (5) 今後の課題

終わりに、残された課題についてふれておきたい。これまで述べてきたように平成15～17年度の3カ年の調査で備前国分寺跡の様相は遺構、遺物の検討により判明したことが多く、その後も継続して発掘調査を進めている。

調査においては、すべての堂塔で基壇外装を検出できず、また建物の構造として階段を確認したのは講堂の南面のみであり、外装等の基壇構造は今後議論と検証が必要である。回廊は調査面積が限られていたため、先の復元案の検証が必要となる。僧房は東西規模をはじめ不明な点が多いので、規模の把握が必要である。さらに、伽藍内の食堂、鐘楼、経蔵等の諸施設については配置すら明らかになっておらず、寺院の運営施設等の確認が必要である。堂塔の造営順序については、塔の基壇下で検出された溝19が西に向かってさらに掘られ、寺域の基準軸になると仮定できれば、回廊や中門との前後関係を確認したい。

さて、今回の調査は1974（昭和49）年度以来の本格的調査であって、学術的な成果は少なからず

収めてきたが、一般市民への史跡備前国分寺跡の周知、啓発が十分にできたとは必ずしも言えない。今回の発掘調査成果を市民に還元するとともに、備前国分寺のたどってきた歴史を感じられるように史跡の活用を図ることが求められる。これらを今後の大きな課題としたい。

註

- (1) 隆奥、遠江、三河の国分寺は複廊が中門から金堂にとりつく。
- (2) 第6次調査（平成20年度）において、西面回廊（T5）の礎石50を接んで桁行方向にトレンチを設け調査を行ったところ、桁行柱間12尺（3.56m）等間で2間分を確認した。本報告書では詳細にふれることができないが、追加して記しておく。次回以降の報告書において、回廊の桁行柱間については復元を行う必要がある。
- (3) 梁通り心々の東西は、講堂桁行111尺およびその取り付け部12尺、中門桁行61尺およびその取り付け部12尺を含んでいる。桁行総長は、講堂桁行111尺と中門桁行61尺を含んでいない。
- (4) 参考数値であるが、T11北面築地からT15南面築地の勾配は約3.5%である。
- (5) 第6次調査（平成20年度）において、僧房西端を確認するためのトレンチで、僧房基壇の一部で瓦積の外装を検出した。本報告書に掲載した第1～3次調査においてすべての堂塔に基壇外装が認められなかつた状況とは異なるのでここで追記しておく。次回報告書において検討し掲載する。
- (6) 築地塀や回廊で区画された内部にある建物の雨水処理は、基壇の高さやベース面の傾斜で可能だったかもしれないが、T11の築地外溝である雨落ち溝19やT5の西面回廊の雨落ち溝7はそれぞれの所から流入する雨水排水を処理するため、深く大きな溝を設けている。
- (7) 装飾性は乏しいが、基壇高が金堂で1.4m、講堂で0.8m、南門で1.1m、塔で1.2～1.8mと復元されるので、基壇外周に流れた雨水等が建物自体の基礎へ影響を及ぼすことは少ないと想われる。また、現在残っているように主要堂塔の基壇版築は強く焼き固められており、基壇側縁部の浸食は認められるが、致命的な基壇の損壊は免れていたものと考えられる。

引用・参考文献

- 磐田市教育委員会文化財課2007『平成18年度特別史跡遠江国分寺跡発掘調査概報』  
上原真人1986『仏教』『岩波講座日本考古学』4 岩波書店  
興福寺1999『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報II』  
妹尾周三ほか2002『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書IV』(財)東広島市教育文化振興事業団  
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所2003『古代の宮衙遺跡I 遺構編』  
箱崎和久2003『2遺構各説』『吉備池廬寺発掘調査報告』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所  
前田清彦ほか1989『三河国分寺跡』豊川市教育委員会  
前田清彦・高垣太一2006『史跡三河国分尼寺跡保存整備事業報告書』豊川市教育委員会  
宮本長二郎1979『飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔』『法隆寺と斑鳩の古寺』日本古寺美術全集第2巻 集英社

## 付載1 備前国分寺跡出土銅関連資料の自然科学的分析結果

国立歴史民俗博物館 齋藤 努

## (1) はじめに

岡山県赤磐市・備前国分寺跡から出土した銅関連資料について、拡大観察、主成分組成分析および鉛同位体比分析を行った結果を報告する。

## (2) 資料

分析対象資料は、講堂に取りつく北面回廊から出土した銅板1021点、寺城東側の築地外溝から出土した炉壁・銅滓各1点、僧房柱穴内から出土した銅印4211点の計4点である。

表1 分析対象資料と分析内容

| 資料  | 遺物 | 分析試料 | 分析箇所        | 分析項目 |       |                | 鉛同位体比分析番号 |
|-----|----|------|-------------|------|-------|----------------|-----------|
|     |    |      |             | 拡大観察 | 主成分組成 | 鉛同位体比          |           |
| 1   | 銅板 | 1A   | 鋸部分         | ○    |       | ○              | B9901     |
|     |    | 1B   | 内部に残存する金属部分 | ○    | ○     | ○              | B9902     |
| 2-1 | 炉壁 | 2-1A | 鉱物粒子残存部分    | ○    | ○     |                |           |
|     |    | 2-1B | ガラス質部分      | ○    | ○     |                |           |
| 2-2 | 銅滓 | 2-2A | 酸化物部分       | ○    | ○     | ○<br>(銅酸化物の箇所) | B9903     |
|     |    | 2-2B | 内部に存在する金属粒子 | ○    | ○     | ○              | B9904     |
| 3   | 銅印 | 3    | 表面の鋸部分      |      |       | ○              | B9905     |

## (3) 分析方法

拡大観察は、資料1、2-1、2-2に対して行った。資料の一部を切断し、エポキシ樹脂に埋包してダイヤモンド・ペーストで鏡面研磨したのち、表面に炭素蒸着を施した。この試料の金属組織や鉱物組織の観察を電子線プローブ・マクロアナライザー(EPMA:日本電子JXA-8200)で実施した。分析にあたっては反射電子像を撮影し、また各微小部分の組成はエネルギー分散型検出器によって調べた(組成データは省略)。

主成分組成分析は、資料1、2-1、2-2に対し、エネルギー分散型蛍光X線装置(日本電子JSX-3201M、Si(Li)半導体検出器)を使用し、大気中においてX線管球電圧50kVで分析を行った。いずれも、上記のEPMA分析用に採取した試料を用い、資料1については鋸の部分と内部に残存している金属の部分を、

資料2-1については拡大観察によって鉱物粒子が残存している部分と熔融してガラス質になっている部分を、資料2-2については酸化物の部分と内部に存在している金属粒子部分を行った。分析に際しては、それぞれ3箇所ずつを測定し、スタンダードレス・ファンダメンタルパラメーター法によって検出された元素の濃度を求め、平均値をとった。励起X線のコリメーター径と蛍光X線計数時間については表2～4に記載した。

鉛同位体比測定は資料1の錫部分と金属部分、資料2-2の表面に付着していた青銅酸化物部分と切断面から採取した金属部分、資料3の表面から採取した錫、の計5点に対して実施した。それぞれの箇所からキサゲ用いて微量の粉末を採取し、分析試料とした。試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて、フィラメント温度1200°Cで鉛同位体比を測定した。

#### (4) 結果

資料および分析箇所とその結果について、表1の「分析試料」の番号に従って記述する。

##### 1. 拡大観察

図1aに錫の部分（分析試料1A）、図1bに内部に残存する金属部分（分析試料1B）の反射電子像を示した。分析試料1Bでは、ほとんど腐食を受けていない状態の良好な金属部分が残っていることがわかる。

図2は、資料2-1の反射電子像で、図2aのように完全に熔融しておらず鉱物粒子の残る部分（分析試料2-1A）と、図2bのようにすべてが熔融してガラス化した部分（分析試料2-1B）がみられた。

図3は、資料2-2の反射電子像で、図3aは酸化物部分（分析試料2-2A）、図3bは内部に存在していた金属粒子（分析試料2-2B）のものである。図3aでは、酸化物の中にスズ酸化物、鉛-ヒ素の粒子、鉛粒子などが散在している。

##### 2. 主成分組成分析

表2～4に主成分組成の分析結果を示した。

表2 酸化物部分の主成分組成分析結果－1 (%)

| 分析試料 | MgO | Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | SiO <sub>2</sub> | K <sub>2</sub> O | CaO | TiO <sub>2</sub> | MnO | FeO  |
|------|-----|--------------------------------|------------------|------------------|-----|------------------|-----|------|
| 2-1A | 0.1 | 10.3                           | 72.0             | 3.3              | 1.4 | 2.3              | 0.4 | 10.2 |
| 2-1B | 0.1 | 10.1                           | 72.6             | 3.1              | 2.5 | 2.0              | 0.1 | 9.5  |

\*コリメーター径：4 mm、計数時間：200秒

資料2-1は、鉱物粒子の残る部分（2-1A）、ガラス化した部分（2-2B）ともにほとんど同じ組成であり、全体が炉壁であると考えられる。津の付着はみられなかった。

表3 酸化物部分の主成分組成分析結果～2(%)

| 分析試料 | MgO | Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | SiO <sub>2</sub> | K <sub>2</sub> O | CaO  | TiO <sub>2</sub> | MnO | FeO  | CuO | SnO | PbO | As <sub>2</sub> O <sub>3</sub> |
|------|-----|--------------------------------|------------------|------------------|------|------------------|-----|------|-----|-----|-----|--------------------------------|
| 2-2A | 0.7 | 17.0                           | 31.3             | 0.9              | 28.6 | 1.7              | 0.2 | 16.8 | 1.9 | 0.2 | 0.5 | 0.2                            |

\*コリメーター径: 4mm、計数時間: 200秒

表3は資料2-2の酸化物部分であるが、明らかに資料2-1とは組成が異なっている。中にスズや鉛の小さな粒子が散在していることや、分析試料2-2Bのような金属粒子が含まれていることから、資料2-2は鋳造に伴って発生した滓と判断される。

表4 金属部分の主成分組成分析結果(%)

| 分析試料 | Cu   | Sn  | Pb   | As  | Sb  | Fe  |
|------|------|-----|------|-----|-----|-----|
| 1B   | 91.1 | 0.4 | 3.5  | 4.5 | 0.4 | 0.1 |
| 2-2B | 70.5 | 9.8 | 11.1 | 5.8 | 0.4 | 2.4 |

\*コリメーター径: 1mm、計数時間: 300秒

分析試料1Bと2-2Bはともに青銅であるが、金属の組成に違いがみられ、用途の異なる原料が使われていたと考えられる。

### 3. 鉛同位体比分析

表5、図4に鉛同位体比測定結果を示した。

表5 鉛同位体比測定結果

| 分析試料 | 鉛同位体比<br>分析番号 | <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb | <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb | <sup>206</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb | <sup>207</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb | <sup>208</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb |
|------|---------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1A   | B9901         | 0.8475                               | 2.0915                               | 18.422                               | 15.612                               | 38.529                               |
| 1B   | B9902         | 0.8477                               | 2.0924                               | 18.426                               | 15.620                               | 38.555                               |
| 2-2A | B9903         | 0.8498                               | 2.1033                               | 18.522                               | 15.739                               | 38.956                               |
| 2-2B | B9904         | 0.8495                               | 2.1029                               | 18.530                               | 15.741                               | 38.968                               |
| 3    | B9905         | 0.8477                               | 2.0922                               | 18.425                               | 15.618                               | 38.549                               |

同一資料から採取した分析試料(1Aと1B、2-2Aと2-2B)はそれぞれほぼ同一の同位体比を示し、表面から採取した酸化物は、内部に残存する金属に由来するものであることがわかる。

馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできると報告している(馬淵・平尾、1982、1983、1987)。

W: 弥生時代に将來された前漢鏡が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

E: 後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

J: 日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されて

いない。

K：多鈕細文鏡や細形銅劍など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

ここでも、これらの領域とともに測定結果をあらわした。測定結果の表示には通常<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb比と<sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb比の関係（A式図）が使用されることが多く、それだけでは識別が困難な場合などは、必要に応じて<sup>206</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb比と<sup>207</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb比の関係（B式図）が併用される。

得られたデータのうち、資料1と資料3はきわめて数値がよく一致し、また奈良・平安時代の青銅製品や縁軸に頻出する数値範囲を中心とする領域、すなわち、齋藤（2001）、齋藤ほか（2002）、高橋（2001）で提示され、山口県長登銅山や藏目喜鶴山が原料供給地ではないかと推定されている、グループ「I」の範囲内に分布している。

資料2-2については、図4 aのA式図でちょうどEとJの重なる位置に分布しているので、B式図（図4 b）による表示も行った。図4 bで、資料2-2（分析試料2-2A、2-2B）のデータはEの領域内にあり、これは通常、中国の華中～華南産原料と判断される数値範囲にある。資料1、資料3のような国産原料に加え、資料2のように輸入原料も熔解して使用されていたものと考えられる。

#### 参考文献

- 齋藤努（2001）、「日本の錢貨の鉛同位体比分析」、『国立歴史民俗博物館研究報告』86、65-129。  
齋藤努、高橋照彦、西川裕一（2002）、「古代錢貨に関する理化学的研究 -「皇朝十二錢」の鉛同位体比分析および金属組成分析」、『IMES Discussion Paper』No.2002-J-30、日本銀行金融研究所。  
高橋照彦（2001）「日本における錢貨生産と原料調達」、『国立歴史民俗博物館研究報告』86、131-184。  
馬淵久夫、平尾良光（1982）、「鉛同位体比からみた銅鏡の原料」、『考古学雑誌』68（1）、pp.42-62。  
馬淵久夫、平尾良光（1983）、「鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）」、『MUSEUM』382、pp.16-26。  
馬淵久夫、平尾良光（1987）、「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に」、『考古学雑誌』73（2）、pp.199-245。

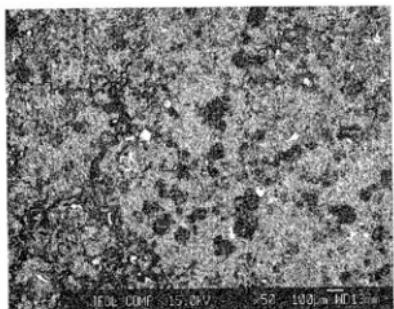


図1 a 分析試料1 Aの反射電子像

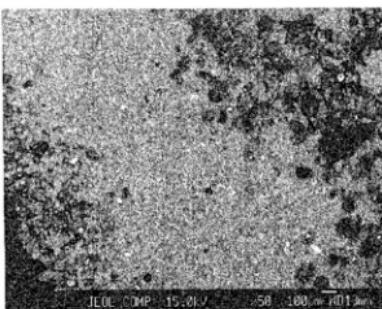


図1 b 分析試料1 Bの反射電子像

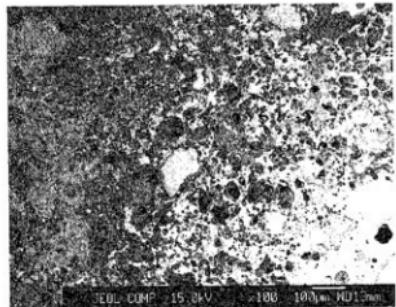


図2 a 分析試料2-1Aの反射電子像



図2 b 分析試料2-1Bの反射電子像

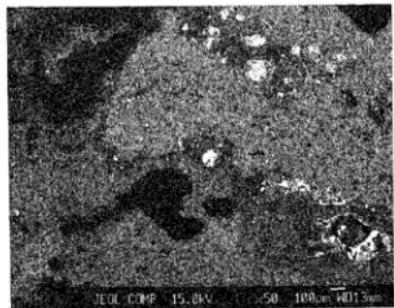


図3 a 分析試料2-2Aの反射電子像



図3 b 分析試料2-2Bの反射電子像

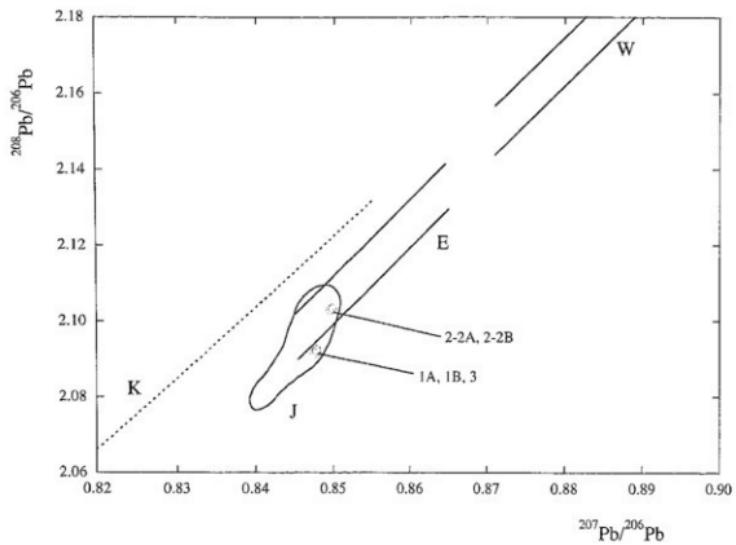


図 4 a 備前国分寺跡出土資料の鉛同位体比分析結果（A式図）

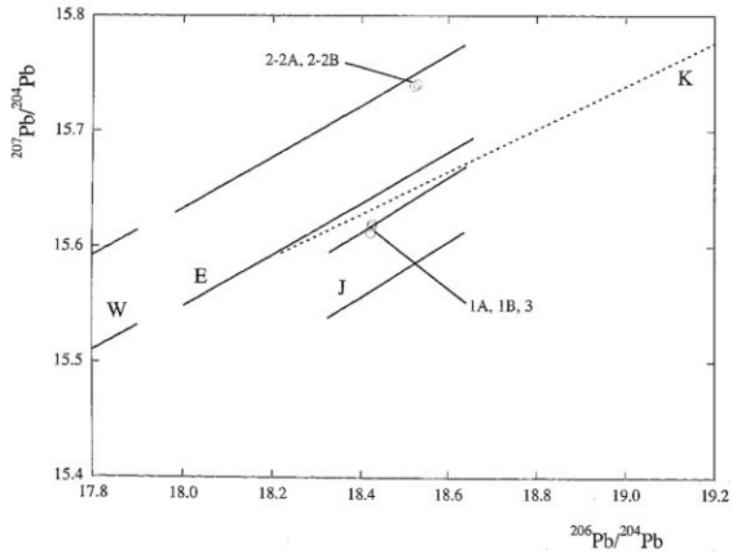


図 4 b 備前国分寺跡出土資料の鉛同位体比分析結果（B式図）

## 付載2 備前国分寺跡出土の白色物質について

岡山理科大学自然科学院研究所 白石 純

### (1) はじめに

備前国分寺跡から出土した白色物質が漆喰であるかどうか科学的な調査を実施した。

分析は、試料の表面の肉眼観察（実体顕微鏡観察）、蛍光X線分析法（成分分析）、X線回折分析法（鉱物などの同定）の複数の分析によりどのような成分で構成されているか調べた。分析試料は、①講堂礎石37（抜き取り跡）出土：再建講堂中世末焼失、②北面回廊北焼土中出土：平安時代末焼土層、③講堂調査区南暗褐色土層下部出土：再建講堂中世末焼失の3点である。

### (2) 分析結果

#### 1. 実体顕微鏡観察結果

実体顕微鏡により白色物質の表面および断面の観察を行った。

試料①は、きめの細かな質感で乳白色を呈し、1mm以下の石英粒が少量観察される。（写真1）

試料②は、淡灰白色を呈し、1mm～2mmの石英粒を多量に含みやや粗い質感である。（写真2）

試料③は、①と同じ砂粒が観察されるが非常にきめの細かな質感である。（写真3）

#### 2. 蛍光X線およびX線回折分析結果

表1に分析結果を示した。この結果から試料①・②・③ともCaO（酸化カルシウム）の含有量が0.45%以下と非常に少なく、主な成分はSiO<sub>2</sub>（酸化珪素）が70%前後とAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>（酸化アルミニウム）が20%前後含まれていることがわかった。

図1に試料①のX線回折図を示している。この図では石英鉱物の強いピークのみが検出された。また②と③の試料も同様の結果であった。

これら複数の分析結果をまとめると

- ・実体顕微鏡で観察すると、砂粒には石英のみが観察された。
- ・蛍光X線分析では、3点の試料とも主な成分はSiO<sub>2</sub>とAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>で、この両成分の合計が90%以上も含まれていることがわかった。また、漆喰の主要成分であるCaOは0.45%以下と非常少なかった。
- ・X線回折法でも3点の試料とも石英（SiO<sub>2</sub>）鉱物のピークしか検出されず、漆喰の成分である方解石（CaCO<sub>3</sub>）は検出されなかった。

以上の結果から、今回分析した備前国分寺跡出土の白色物質は、石英に由来する白色粘土であることがわかった。つまり、石灰岩や貝殻を原料とする漆喰ではなかった。

#### （参考文献）

安田博幸 1985「化学分析による古代漆喰の研究補遺」『末永先生米寿記念』末永先生米寿記念会

朽津信明 2006「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』vol.53 日本文化財科学会

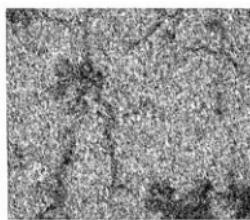


写真1 試料①表面観察

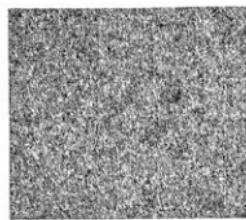


写真2 試料②表面観察

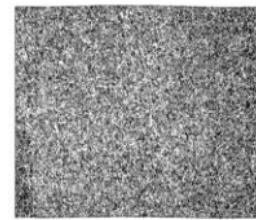


写真3 試料③表面観察

0 2mm

表1 備前国分寺跡出土の白色物質分析一覧表

| 試料番号                           | ①               | ②     | ③      |
|--------------------------------|-----------------|-------|--------|
| 試料名                            | 講堂              | 北面回廊  | 講堂     |
| 出土地点                           | 礎石37<br>(抜き取り跡) | 北焼土中  | 暗褐色土下部 |
| SiO <sub>2</sub> (%)           | 69.62           | 72.08 | 68.77  |
| TiO <sub>2</sub>               | 0.33            | 0.00  | 0.22   |
| Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | 20.42           | 19.64 | 21.31  |
| Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | 2.32            | 0.71  | 1.79   |
| MnO                            | 0.25            | 0.01  | 0.48   |
| MgO                            | 1.78            | 1.79  | 1.78   |
| CaO                            | 0.45            | 0.34  | 0.17   |
| Na <sub>2</sub> O              | 3.06            | 4.00  | 3.26   |
| K <sub>2</sub> O               | 1.53            | 0.29  | 1.91   |
| P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>  | 0.01            | 1.04  | 0.04   |

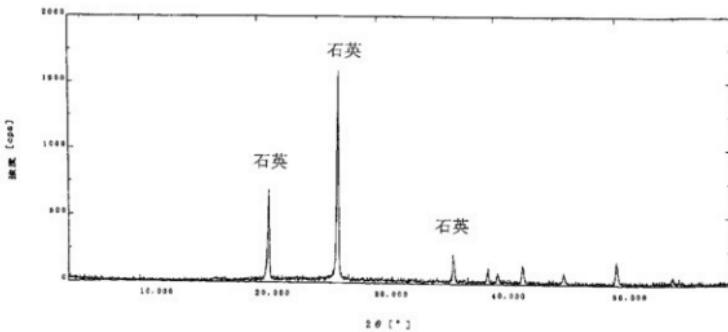


図1 試料①X線回折図

表15-1 土器観察表

| 项<br>号 | 器番<br>号 | 掲載<br>番号 | 出土地区 | 遺構・土器<br>名 | 種別    | 器種   | 計測値(cm) |       |        | 形態・手法の特徴など    | 備考                                     |
|--------|---------|----------|------|------------|-------|------|---------|-------|--------|---------------|--|
|        |         |          |      |            |       |      | 口径      | 底径    | 高さ     |               |  |
| 2      | 3       | 1        | 講堂   |            | 攢文土器  | 深鉢   |         |       |        | ヘラ描沈痕文        | 縦文晚期                                   |
|        |         | 2        |      |            |       | 深鉢   |         |       |        | 突帯文           | 縦文晚期                                   |
|        |         | 3        | T13  |            | 弥生土器  | 皿    | 8.0     | (4.0) |        |               | 弥生後期                                   |
|        |         | 4        |      |            |       | 高杯   |         | (2.8) |        |               | 弥生中期末                                  |
|        |         | 5        | T11  | 雨落ち溝19     | 須恵器   | 盤    |         |       |        | 波状文           | 古墳                                     |
|        |         | 6        | T13  |            |       | 盤    |         |       |        | 波状文           | 古墳                                     |
|        |         | 7        | T17  |            |       | 盤    |         |       |        | 口縁部下に突帯       | 古墳                                     |
| 2      | 24      | 1        | 金堂   |            | 土師器   | 皿    | 5.8     | (1.8) |        |               |  |
|        |         | 2        |      |            |       | 羽釜   |         |       |        |               |  |
|        |         | 3        |      |            |       | 羽釜   |         |       |        |               |  |
|        |         | 40       | 4    | 北面回廊       | 炉1    | 土師器  | 皿       | 8.7   | 7.4    | 1.5           |  |
|        |         | 5        | 北面回廊 | 下層         | 上師器   | 皿    | 9.0     | 6.3   | 1.5    | 底部/指押圧        |  |
|        |         | 6        |      |            |       | 皿    | 9.4     | 6.3   | 1.8    | 底部/指押圧        | ほぼ完形                                   |
|        |         | 7        |      |            |       | 皿    | 9.6     | 6.8   | 1.6    | 底部/ヘラ切り後ナデ    |  |
|        |         | 8        |      |            |       | 皿    | 9.0     | 7.1   | 1.5    | 底部/ヘラ切り       |  |
|        |         | 9        |      |            |       | 皿    | 9.9     | 8.0   | 1.8    | 底部/ヘラ切り後板目    | 白色系                                    |
|        |         | 10       |      |            |       | 皿    | 9.2     | 6.2   | 1.6    | 底部/糸切り        |  |
|        |         | 11       |      |            |       | 杯A   | 14.5    | 8.9   | 3.5    | 底部/ヘラ切り       |  |
|        |         | 12       |      |            |       | 杯B   |         | 7.2   | (3.2)  | 底部/板目 外面/丹塗り  |  |
|        |         | 13       |      |            |       | 杯B   | 15.0    | 7.1   | 5.4    |               |  |
|        |         | 14       |      |            |       | 鍋    | 26.9    |       | 15.6   | 外面口縁～胴上部/指オサ工 | スス付着                                   |
|        |         | 15       |      |            |       | 鍋    |         |       | (13.3) | 外面口縁～胴上部/指オサ工 | スス付着                                   |
|        |         | 16       |      |            |       | 甕    |         |       |        | 外面口縁部付近/ハケメ   |  |
|        |         | 17       |      |            | 須恵質土器 | 桶    | 15.4    | 5.8   | 5.9    | 底部/糸切り        | 重ね焼き痕<br>跡 滅前<br>焼12cm                 |
|        |         | 18       |      |            |       | 黑色土器 | 桶       | 15.1  | 5.4    | 4.8           | 内外面/ヘラミガキ 見込<br>み/長指円形の暗文 口縁<br>部内面/沈線 |
| 3      | 46      | 19       | 北面回廊 | 上層         | 土師器   | 皿    | 9.5     | 6.4   | 2.0    | 底部/指押圧        |  |
|        |         | 20       |      |            |       | 皿    | 8.8     | 7.4   | 1.8    | 底部/指押圧        |  |
|        |         | 21       |      |            |       | 皿    | 8.6     | 6.3   | 1.2    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 22       |      |            |       | 皿    | 9.4     | 7.0   | 1.7    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 23       |      |            |       | 皿    |         |       | 1.4    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 24       |      |            |       | 皿    | 8.4     | 5.7   | 1.1    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 25       |      |            |       | 皿    | 9.0     | 6.6   | 1.4    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 26       |      |            |       | 皿    | 8.6     | 5.5   | 1.9    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 27       |      |            |       | 皿    | 8.7     | 6.1   | 1.3    | 底部/周縁ヘラ切り     |  |
|        |         | 28       |      |            |       | 皿    | 9.0     | 7.8   | 1.4    | 底部/ヘラ切り       | 白色系                                    |
|        |         | 29       |      |            |       | 皿    | 8.5     | 7.7   | 1.1    | 底部/ヘラ切り       |  |
|        |         | 30       |      |            |       | 皿    | 8.5     | 6.9   | 1.5    | 底部/板目         | 完形                                     |
|        |         | 31       |      |            |       | 皿    | 8.8     | 6.7   | 1.2    | 底部/ヘラ切り後板目    |  |
|        |         | 32       |      |            |       | 皿    | 8.8     | 6.8   | 1.7    | 底部/中心までヘラ切り   |  |
|        |         | 33       |      |            |       | 皿    | 8.2     | 5.4   | 1.4    | 底部/中心までヘラ切り   |  |
|        |         | 34       |      |            |       | 皿    | 8.1     | 6.3   | 1.3    | 底部/中心までヘラ切り   |  |
|        |         | 35       |      |            |       | 皿    | 9.1     | 5.8   | 1.7    | 底部/中心までヘラ切り   |  |
|        |         | 36       |      |            |       | 皿    | 8.1     | 6.0   | 1.8    | 底部/ヘラ切り後指押圧   | ほぼ完形                                   |
|        |         | 37       |      |            |       | 皿B   | 9.6     | 6.3   | 1.7    | 底部/ヘラ切り       |  |
|        |         | 38       |      |            |       | 杯A   | 14.1    | 11.0  | 3.4    | 底部/ヘラ切り後指押圧   |  |

表15-2 土器観察表

| 章  | 図番号 | 掲載番号 | 出土地区 | 遺構・土器名 | 種別       | 器種 | 計測値(cm) |       |       | 形態・手法の特徴など    | 備考               |  |
|----|-----|------|------|--------|----------|----|---------|-------|-------|---------------|------------------|--|
|    |     |      |      |        |          |    | 口径      | 底径    | 高さ    |               |                  |  |
| 46 | 39  |      | 北面回廊 | 上層     | 土師器      | 杯A | 13.5    | 8.0   | 2.5   | 底部/ヘラ切り後板目    |                  |  |
|    | 40  |      |      |        |          | 杯A | 13.0    | 8.3   | 3.0   |               |                  |  |
|    | 41  |      |      |        |          | 杯A | 13.4    | 7.6   | 3.3   | 底部/ヘラ切り       |                  |  |
|    | 42  |      |      |        |          | 杯A | 13.7    | 9.4   | 3.6   | 底部/周縁へラ切り     |                  |  |
|    | 43  |      |      |        |          | 杯A | 13.8    | 3.3   | 3.8   | 底部/ヘラ切り後ナデ    |                  |  |
|    | 44  |      |      |        |          | 杯A | 14.6    | 9.1   | 3.0   | 底部/周縁へラ切り     |                  |  |
| 47 | 45  |      | 北面回廊 | 上層     | 土師器      | 杯A | 10.6    | 3.3   |       | 底部/周縁へラ切り後ナデ  |                  |  |
|    | 46  |      |      |        |          | 杯A | 14.6    | 8.1   | 3.3   | 底部/周縁へラ切り後指押圧 |                  |  |
|    | 47  |      |      |        |          | 杯A | 15.0    | 8.4   | 3.4   | 底部/周縁へラ切り後ナデ  |                  |  |
|    | 48  |      |      |        |          | 杯A | 15.5    | 9.3   | 3.1   | 底部/周縁へラ切り後ナデ  | 外側/丹塗り           |  |
|    | 49  |      |      |        |          | 杯A | 14.7    | 6.8   | 3.3   | 底部/糸切り        |                  |  |
|    | 50  |      |      |        |          | 杯A | 12.7    | 7.1   | 2.8   | 底部/糸切り        |                  |  |
|    | 51  |      |      |        |          | 杯C | 14.4    | 7.2   | 4.0   | 底部/ヘラ切り後ナデ?   |                  |  |
|    | 52  |      |      |        |          | 杯C | 15.4    | 6.9   | 3.7   | 底部/糸切り        |                  |  |
|    | 53  |      |      |        |          | 杯C | 15.5    | 6.9   | 4.0   | 底部/糸切り        |                  |  |
|    | 54  |      |      |        |          | 杯B | 6.7     | (3.5) |       |               |                  |  |
|    | 55  |      |      |        |          | 杯B | 15.2    | 7.4   | 5.5   |               |                  |  |
|    | 56  |      |      |        |          | 杯B | 14.8    | 8.1   | 4.5   |               |                  |  |
|    | 57  |      |      |        |          | 杯B | 14.9    | 7.8   | 4.1   |               |                  |  |
|    | 58  |      |      |        |          | 杯B | 7.7     | (2.9) |       | 底部/板目         |                  |  |
|    | 59  |      |      |        |          | 杯B | 7.1     | (2.4) |       |               |                  |  |
| 48 | 60  |      | 北面回廊 | 上層     | 吉備系土師質土器 | 楕  | 15.0    | 6.3   | 5.6   |               | 12c半~後半          |  |
|    | 61  |      |      |        |          | 楕  |         | 7.0   | (2.0) |               |                  |  |
|    | 62  |      |      |        |          | 皿  | 8.7     | 4.8   | 2.4   | 底部/静止糸切り?     | 備前焼<br>12c後半     |  |
|    | 63  |      |      |        |          | 楕  | 14.6    | 5.4   | 5.8   | 底部/糸切り        | 備前焼<br>12c後半     |  |
|    | 64  |      |      |        |          | 楕  | 15.0    | 5.8   | 5.6   | 底部/糸切り        | 備前焼<br>12c後半     |  |
|    | 65  |      |      |        | 白磁       | 楕  | 15.9    | 7.2   | 6.3   | 楕IV類          | 完形 11c<br>後半~12c |  |
|    | 66  |      |      |        |          | 楕  | 16.3    | 6.5   | 8.0   | 楕V類 見込み/沈線    | 11c後半~<br>12c    |  |
| 49 | 67  |      | 北面回廊 | 雨落ち溝4  | 土師器      | 皿  | 10.1    | 5.5   | 1.5   | 底部/指押圧後ナデ     |                  |  |
|    | 68  |      |      |        |          | 皿  | 10.1    | 6.7   | 1.7   | 底部/指押圧後ナデ     |                  |  |
|    | 69  |      |      |        |          | 皿  | 9.7     | 7.4   | 1.9   | 底感/ヘラ切り       |                  |  |
|    | 70  |      |      |        |          | 皿  | 8.8     | 7.1   | 1.6   | 底感/ヘラ切り       |                  |  |
|    | 71  |      |      |        |          | 皿  | 9.4     | 7.1   | 1.2   | 底部/中心までヘラ切り   | ほぼ完形             |  |
|    | 72  |      |      |        |          | 皿  | 8.5     | 6.5   | 1.5   | 底感/ヘラ切り       |                  |  |
|    | 73  |      |      |        |          | 皿  | 9.6     | 7.2   | 1.5   | 底感/中心までヘラ切り   |                  |  |
|    | 74  |      |      |        |          | 杯A | 13.6    | 8.8   | 4.0   | 底部/ヘラ切り後ナデ    |                  |  |
|    | 75  |      |      |        |          | 杯A | 14.8    | 7.1   | 2.7   | 底部/指押圧        |                  |  |
|    | 76  |      |      |        |          | 杯A | 15.0    | 9.5   | 2.7   | 底感/ヘラ切り後ナデ    |                  |  |
|    | 77  |      |      |        |          | 杯A | 13.7    | 7.3   | 2.9   |               |                  |  |
|    | 78  |      |      |        |          | 楕  | 14.8    | 6.4   | 5.2   | 底部/糸切り後ナデ     |                  |  |
|    | 79  |      |      |        | 瓦器       | 楕  |         | 5.1   | (1.5) |               |                  |  |
| 50 | 80  |      | 北面回廊 | 基壇南    |          | 皿  | 9.3     | 6.8   | 1.1   | 底部/周縁へラ切り     |                  |  |
|    | 81  |      |      |        |          | 杯B |         | 9.0   | (1.7) |               |                  |  |
|    | 82  |      |      |        |          | 杯B |         | 6.0   | (1.8) |               |                  |  |
|    | 83  |      |      |        |          | 杯  |         | 6.5   | (1.7) | 底部/糸切り        |                  |  |

表15-3 土器観察表

| 章  | 図番号 | 掲載番号 | 出土地区  | 造構・土器名   | 種別    | 器種   | 計測値(cm) |       |       | 形態・手法の特徴など        | 備考          |
|----|-----|------|-------|----------|-------|------|---------|-------|-------|-------------------|-------------|
|    |     |      |       |          |       |      | 口径      | 底径    | 鉢高    |                   |             |
| 50 | 84  | 北西回廊 | 基壇南   | 土師器      | 講堂    | 上師器  | 皿       | 6.7   | 4.9   | 0.9               | 口縁部付近内面/ハケメ |
|    | 103 |      |       |          |       |      | 皿       | 7.6   | 5.7   | 1.2               | 底部/糸切り      |
|    | 104 |      |       | 古墳系土師質土器 |       | 楕    | 10.8    | 4.5   | 3.3   | 皿                 | 15c完形       |
|    | 105 |      |       |          |       | 楕    |         | 3.8   | (1.6) |                   | 14c前半       |
|    | 106 |      |       |          |       | 楕    |         |       |       |                   | 14c前半       |
|    | 107 |      |       |          |       | 甕    |         |       |       |                   | 15c後半~16c初頭 |
|    | 108 |      |       |          |       | 擂鉢   | 26.2    |       | (6.6) |                   | 15c後半~16c初頭 |
|    | 109 |      |       |          |       | 擂鉢   |         | 14.3  | (4.1) |                   | 15c後半~16c初頭 |
|    | 110 |      |       |          |       | 皿    | 6.6     | 5.4   | 0.9   |                   |             |
|    | 111 |      |       |          |       | 皿    | 6.8     | 4.4   | 1.1   |                   |             |
| 56 | 112 |      |       |          |       | 皿    | 6.9     | 6.0   | 1.1   |                   |             |
|    | 113 |      |       |          | 瓦質土器  |      |         | 9.6   |       | 西脚、側外面X、外画/ハケメ把手  |             |
|    | 114 |      |       |          |       | 火鉢   |         |       |       |                   | スタンプ文       |
|    | 115 |      |       |          |       |      |         | 5.2   |       | 内面/ハケメ            |             |
|    | 116 |      |       | 美濃焼      | 折線菊皿  | 11.3 | 6.2     | 2.2   |       |                   | 16c末        |
|    | 117 |      |       | 唐津焼      | 皿     |      | 3.9     | (2.5) |       |                   | 17c初頭       |
|    | 118 |      |       | 染付       |       |      |         |       |       |                   | 16c中葉~後期    |
|    | 119 |      |       |          | 上師器   | 杯A   | 13.5    | 8.5   | 3.2   |                   |             |
|    | 120 |      |       |          |       | 杯    |         |       |       |                   |             |
|    | 121 |      |       |          |       | 楕    | 11.2    | 5.4   | 4.4   |                   |             |
| 3  | 122 |      |       | 瓦器       | 楕     |      |         |       |       |                   |             |
|    | 123 |      |       |          | 土師器   | 杯A   | 10.8    | 5.2   | 2.6   | 底部/糸切り            |             |
|    | 124 |      |       |          |       | 皿    | 8.5     | 6.2   | 1.4   | 底部/ヘラ切り           |             |
|    | 125 |      |       | 吉備系土師質土器 | 楕     |      | 7.0     | (2.5) |       |                   |             |
|    | 126 |      |       |          | 土師器   | 杯A   | 14.1    | 7.4   | 3.7   |                   |             |
|    | 127 |      |       |          |       | 甕    |         |       |       | 外面/ハケメ<br>内面/ヨコハケ |             |
|    | 128 |      |       |          | 土師質土器 | 杯B   |         | 7.9   | (3.9) |                   |             |
|    | 129 |      |       |          |       | 楕    |         | 6.1   | (2.0) |                   |             |
|    | 130 |      |       |          |       | 杯B   |         | 7.1   | (3.7) |                   |             |
|    | 131 |      |       |          | 土師器   | 杯A   |         |       | 3.5   |                   |             |
|    | 132 |      |       |          |       | 甕    | 32.0    | (8.3) |       | 胸上部/ハケメ           |             |
| 59 | 133 |      |       | 須恵器      | 水瓶    |      |         | (9.6) |       |                   | 内面に突審       |
|    | 134 |      |       | 土師器      | 杯A    | 15.4 | 9.9     | 4.0   |       |                   |             |
|    | 148 |      |       |          | T 5   | 皿    | 8.7     | 7.4   | 1.4   |                   |             |
|    | 149 |      |       |          |       | 皿    | 8.6     | 6.6   | 1.6   | 底部/ヘラ切り           |             |
|    | 150 |      |       |          |       | 皿    | 9.2     | 6.0   | 1.3   | 底部/板目             |             |
|    | 151 |      |       |          |       | 皿    | 9.0     | 5.7   | 1.5   |                   |             |
|    | 152 |      |       |          |       | 杯A   | 14.4    | 9.1   | 3.4   |                   |             |
|    | 153 |      | 雨落ち溝7 |          |       | 杯B   |         | 7.6   |       |                   | 内外面/丹塗り     |
|    | 154 |      | 般下層   |          |       | 杯B   | 14.9    | 9.2   | 4.3   |                   |             |
|    | 155 |      |       |          |       | 楕    |         |       | (4.0) |                   |             |
|    | 156 |      |       |          | 須恵器   | 甕    |         |       |       |                   |             |
|    | 157 |      |       |          |       | 楕    |         | 6.6   | (1.8) |                   |             |
|    | 158 |      |       |          |       | 杯A   | 15.4    | 10.9  | 2.7   |                   |             |
| 67 | 159 |      | 雨落ち溝7 |          | 須恵器   | 甕    |         |       | (3.0) |                   |             |
|    |     |      | 下層    |          |       |      |         |       |       |                   |             |

表15-4 土器観察表

| 章  | 団番号 | 掲載番号 | 出土地区 | 遺構・土器名              | 種別   | 器種   | 計測値(cm) |       |                      | 形態・手法の特徴など     | 備考 |
|----|-----|------|------|---------------------|------|------|---------|-------|----------------------|----------------|----|
|    |     |      |      |                     |      |      | 口径      | 底径    | 器高                   |                |    |
| 3  | 77  | 67   | 160  | T 5<br>雨落ち溝 8<br>下層 | 土師器  | 皿    | 8.3     | 6.2   | 1.6                  | 底部/中心までヘラ切り    |    |
|    |     | 161  |      |                     |      | 杯B   | 15.8    | 8.0   | 3.5                  |                |    |
|    |     | 162  |      |                     |      | 杯B   | 5.0     | (1.7) |                      |                |    |
|    |     | 163  |      |                     |      | 杯A   | 8.0     | (1.4) |                      | 底部/ヘラ切り        |    |
|    |     | 164  |      |                     |      | 杯A   | 15.3    | 6.9   | 3.8                  | 底部/糸切り         |    |
|    |     | 165  |      | 古墳系土師<br>質上器        | 碗    |      | 6.5     | (1.7) |                      |                |    |
|    |     | 166  |      | 須恵質土器               | 碗    |      | 6.3     | (1.4) |                      | 底部/糸切り         |    |
|    |     | 167  |      | 須恵器                 |      |      |         |       |                      | 円孔あり           |    |
|    |     | 168  |      | 白磁                  | 碗    | 16.3 |         | (3.5) | 楕IV類                 |                |    |
|    |     | 169  |      | 須恵器                 | 杯B蓋  | 14.4 |         | 3.0   |                      |                |    |
| 88 | 88  | 170  |      | 土師器                 | 杯    | 13.4 |         | (3.1) |                      |                |    |
|    |     | 171  |      | 須恵器                 | 壺    | 4.5  | 4.0     | 9.7   | 自然縫かかる<br>底部/糸切<br>り | 9c後半~<br>10c初頭 |    |
|    |     | 172  |      | 白磁                  |      |      |         |       | 2.5×2.3              |                |    |
|    |     | 173  |      | 土師器                 | 杯A   | 10.5 | 7.2     | 2.7   |                      |                |    |
|    |     | 174  |      | 土師器                 | 杯A   | 13.3 | 8.3     | 3.2   | 底部/周縁ヘラ切り<br>内外面/丹塗り |                |    |
|    |     | 175  |      | 土師器                 | 杯A   | 13.2 | 8.2     | 3.2   | 底部/周縁ヘラ切り<br>内外面/丹塗り |                |    |
|    |     | 176  |      | 土師器                 | 杯A   | 13.2 | 8.1     | 3.3   | 底部/周縁ヘラ切り<br>内外面/丹塗り |                |    |
|    |     | 177  |      | 土師器                 | 皿    | 10.3 | 7.6     | 1.7   |                      |                |    |
|    |     | 178  |      | 須恵器                 | 楕    |      | 6.0     | (2.3) | 底部/糸切り               |                |    |
|    |     | 179  |      | 須恵器                 | 杯A   | 12.1 | 7.5     | 3.2   |                      |                |    |
| 89 | 89  | 180  |      | 須恵器                 | 杯B   |      | 9.0     | (3.2) |                      |                |    |
|    |     | 181  |      | 緑釉附器                | 罐or碗 |      | 5.7     | (1.3) |                      | 9c中頃           |    |
|    |     | 182  |      | 灰釉陶器                | 楕    |      |         | (1.6) |                      | 9c前半~<br>後半    |    |
|    |     | 183  |      | 土師器                 | 杯A   | 9.2  | 8.2     | 2.0   | 底部/指押压後板目            |                |    |
|    |     | 184  |      | 土師器                 | 杯A   | 11.3 | 6.6     | 2.6   | 底部/糸切り               |                |    |
|    |     | 185  |      | 土師器                 | 杯A   | 9.7  | 7.1     | 2.2   | 底部/ヘラ切り              |                |    |
|    |     | 186  |      | 土師器                 | 皿    | 9.6  | 5.4     | 2.0   | 底部/糸切り               |                |    |
|    |     | 187  |      | 須恵器                 | 楕    |      |         | (4.5) |                      |                |    |
|    |     | 188  |      | 黒色土器                | 楕    |      | 7.9     | (3.2) |                      | 内墨             |    |
|    |     | 189  |      | 古墳系土師<br>質上器        | 楕    |      | 6.0     | (1.6) |                      |                |    |
| 89 | 89  | 190  |      | 須恵器                 | 杯B蓋  | 17.6 |         | 4.3   |                      |                |    |
|    |     | 191  |      | 須恵器                 | 楕?   |      | 8.0     | (1.4) | 底部/ヘラ切り              |                |    |
|    |     | 192  | P-12 | 土師器                 | 楕    |      | 10.6    | (2.2) |                      | 外面/黒色          |    |
|    |     | 193  | P-13 | 須恵器                 | 壺    |      |         | (5.3) |                      | 突唇あり           |    |
|    |     | 194  |      | 土師器                 | 皿    | 9.4  | 7.1     | 1.6   | 底部/ヘラ切り              |                |    |
|    |     | 195  |      | 土師器                 | 皿    | 9.1  | 7.2     | 1.4   | 底部/ヘラ切り後板目           |                |    |
|    |     | 196  |      | 土師質上器               | 楕    |      | 5.2     | (1.8) |                      | 白色             |    |
|    |     | 197  |      | 土師器                 | 楕    |      | 8.7     | (2.7) | 底部/板目                |                |    |
|    |     | 198  |      | 土師器                 | 楕    |      | 9.9     | (3.4) |                      |                |    |
|    |     | 199  |      | 綠釉陶器                | 楕    | 15.7 | 6.6     | 5.9   |                      | 10c前半          |    |
|    |     | 200  |      | 土師器                 | 皿    |      |         | (2.1) |                      |                |    |
|    |     | 201  |      | 須恵器                 | 杯B蓋  |      |         | (1.5) |                      |                |    |
|    |     | 202  |      | 須恵器                 | 楕    |      | 6.5     |       |                      |                |    |
|    |     | 203  |      | 土師器                 | 楕    |      | 8.5     | (3.0) |                      |                |    |
|    |     | 204  |      |                     |      |      |         |       |                      |                |    |

表15-5 土器観察表

| 章   | 図番号 | 掲載番号 | 出土地区   | 遺構・土層名 | 種別   | 器種  | 計測値(cm) |        |        | 形態・手法の特徴など                       | 備考 |
|-----|-----|------|--------|--------|------|-----|---------|--------|--------|----------------------------------|----|
|     |     |      |        |        |      |     | 口径      | 底径     | 器高     |                                  |    |
| 89  | 205 |      | 塔房     |        | 土師器  | 杯A  | 10.1    | 6.4    | 1.9    |                                  |    |
|     | 206 |      |        |        |      | 杯A  | 9.4     | 7.2    | 1.8    |                                  |    |
|     | 207 |      |        |        |      | 杯A  | 9.9     | 8.7    | 2.1    |                                  |    |
|     | 208 |      |        |        |      | 杯A  | 9.8     | 7.8    | 2.2    |                                  |    |
|     | 209 |      |        |        |      | 皿B  | 12.7    | 7.1    | 3.0    |                                  |    |
|     | 210 |      |        |        |      | 碗?  |         | 7.4    | (2.6)  |                                  |    |
| 99  | 211 |      | 塔      | 基壇外周   | 土師器  | 碗?  |         | 5.8    | (1.5)  |                                  |    |
|     | 212 |      |        |        |      | 碗?  |         | 9.5    | (3.6)  |                                  |    |
|     | 213 |      |        |        |      | 杯?  |         | 13.5   | (2.4)  |                                  |    |
|     | 102 | 214  | T15    |        | 土師器  | 皿   | 8.2     | 6.0    | 1.2    |                                  |    |
| 106 | 215 |      | 雨落ち溝17 |        | 須恵器  | 杯B  | 13.9    | 10.1   | 4.1    | 器高指数/29.5 高台断面/凹状                |    |
|     | 216 |      |        |        |      | 杯B  |         | 11.1   | (1.1)  | 高台断面/逆台形                         |    |
|     | 217 |      |        |        |      | 甕   |         |        | (10.7) | 胴部外面/格子目のタタキ内面/同心円の当て具           |    |
|     | 218 |      |        |        |      | 土師器 | 甕       |        | (5.5)  | 外面/ハケメ                           |    |
|     | 219 |      |        |        |      | 土師器 | 甕       | 24.6   | (4.7)  | 口縁部内面/ハケメ<br>胴部外面/ヘラナデ<br>外曲/ハケメ |    |
|     | 235 |      |        |        |      | 杯B蓋 |         |        | (2.0)  |                                  |    |
| 3   | 236 |      | T11    | 雨落ち溝19 | 須恵器  | 杯B蓋 |         |        | (2.5)  |                                  |    |
|     | 237 |      |        |        |      | 杯B蓋 | (18.6)  |        | (2.3)  |                                  |    |
|     | 238 |      |        |        |      | 杯B  |         | 10.2   | (1.3)  | 高台断面/四角形                         |    |
|     | 239 |      |        |        |      | 杯B  | 14.2    |        | 4.3    | 高台欠損                             |    |
|     | 240 |      |        |        |      | 杯B  | 14.8    | 12.1   | 4.4    | 器高指数/29.7 高台断面/凹状                |    |
|     | 241 |      |        |        |      | 杯A  | 11.9    | 8.8    | 3.8    |                                  |    |
|     | 242 |      |        |        |      | 杯   | 9.7     | 8.0    | 2.6    |                                  |    |
|     | 243 |      |        |        |      | 高杯  |         |        | (9.2)  |                                  |    |
|     | 244 |      |        |        |      | 皿B  | 26.8    | 19.8   | 4.0    |                                  |    |
|     | 245 |      |        |        | 土師器  | 高杯? | 12.6    | 9.1    | 1.4    | 内外面/丹塗り<br>外面/丹塗り                |    |
|     | 246 |      |        |        |      | 高杯? |         |        | (2.3)  |                                  |    |
|     | 247 |      |        |        |      | 甕   |         |        | (5.4)  |                                  |    |
| 114 | 248 |      | T11    | カマド1   | 須恵器  | 杯B蓋 |         |        | (2.1)  |                                  |    |
|     | 249 |      |        |        |      | 杯B蓋 |         |        | (2.4)  |                                  |    |
|     | 250 |      |        |        | 須恵器  | 杯B蓋 | (16.3)  |        | (1.3)  |                                  |    |
|     | 251 |      |        |        |      | 杯B  | 20.7    | 13.8   | 8.3    | 径高指数/40.1 高台断面/凹状                |    |
|     | 252 |      |        |        |      | 香炉  |         |        |        |                                  |    |
|     | 253 |      |        |        |      | 杯   | (15.8)  |        | (4.2)  |                                  |    |
|     | 254 |      |        |        |      | 皿   | (14.4)  | (12.4) | 1.9    |                                  |    |
|     | 255 |      |        |        |      | 甕   |         | 10.7   | (4.3)  | 自然袖付着                            |    |
|     | 256 |      |        |        | 須恵器  | 蓋   |         | (11.4) | (11.5) | 頭部以上と底部欠落                        |    |
|     | 257 |      |        |        |      | 杯   |         |        | (7.9)  | 腹部外縁・口縁部内面/ハケメ                   |    |
|     | 258 |      |        |        | 土師器  | 甕   | (29.9)  |        | (4.6)  | 外面/ハケメ 内面口縁部/ハケメ 内面胴部/ナデ         |    |
|     | 259 |      |        |        |      | 甕   |         |        | (5.1)  |                                  |    |
|     | 260 |      |        | カマド1   | 製塙土器 |     |         |        |        | 外面/指オサエ                          |    |
|     | 261 |      |        |        | 製塙土器 |     |         |        |        | 外面/指オサエ                          |    |
|     | 262 |      |        |        | 製塙土器 |     |         |        | (6.3)  |                                  |    |
|     | 117 | 264  | T 3    |        | 借前焼  | 甕   |         |        |        |                                  |    |

表15-6 土器觀察表

| 章 | 図番号 | 掲載番号 | 出土地区  | 遺構・土層名 | 種別   | 器種   | 計測値(cm) |       |           | 形態・手法の特徴など | 備考            |
|---|-----|------|-------|--------|------|------|---------|-------|-----------|------------|---------------|
|   |     |      |       |        |      |      | 口径      | 底径    | 高さ        |            |               |
| 3 | 119 | 265  | T 9   | たわみ I  | 土師器  | 杯A   | 12.7    | 8.5   | 3.1       |            |               |
|   |     | 266  |       |        |      | 皿B   | 11.1    | 6.4   | 3.1       |            |               |
|   |     | 267  |       |        |      | 須恵器  | (39.4)  |       | (6.2)     | 胴部内面/タタキ   |               |
| 4 | 225 | 393  | 講堂    |        | 唐三彩  | 陶枕   | (1.7)   | (1.3) | 0.4       |            |               |
|   |     | 394  |       |        | 奈良一彩 | 瓶    |         |       |           |            |               |
|   |     | 395  |       | 金堂     | 奈良二彩 |      |         |       |           |            |               |
|   |     | 396  |       |        | 奈良二彩 | 多口壺  |         |       |           |            |               |
|   |     | 397  | 南門・中門 |        | 奈良三彩 | 碗    | 7.4     | (0.9) | 無高台の碗の可能性 |            |               |
|   |     | 398  | T 5   |        | 緑釉陶器 | 碗    | 8.1     | (1.8) |           |            |               |
|   |     | 399  | 講堂    |        | 緑釉陶器 | 碗    |         |       |           | 有段輪高台      | 10c後半         |
|   |     | 400  | 北面回廊  |        | 灰釉陶器 | 手付瓶  | 8.9     | (2.4) |           |            | 9c後半          |
|   |     | 401  | 金堂    |        | 須恵器  | 多口壺  |         |       |           |            | 円孔あり          |
|   |     | 402  |       |        | 須恵器  | 多口壺  |         |       |           |            | 円孔あり          |
|   |     | 403  | T 3   |        | 須恵器  | 多口壺  |         |       |           |            | 円孔あり          |
|   |     | 404  |       |        | 須恵器  | 多口壺  |         |       |           |            |               |
|   |     | 405  | 金堂    |        | 須恵器  |      |         |       |           |            |               |
|   |     | 406  | 講堂    |        | 転用硬  |      |         |       |           |            | 杯B蓋 唐<br>純    |
|   |     | 407  |       |        | 転用硬  |      |         |       |           |            | 杯B蓋 唐<br>純    |
| 4 | 227 | 408  | 南門・中門 |        | 備前焼  | 擂鉢   | 27.4    |       | (0.8)     |            | 14c初頭         |
|   |     | 409  | 金堂    |        | 備前焼  | 擂鉢   |         |       | (5.6)     |            | 16c前葉         |
|   |     | 410  | 南門・中門 |        | 備前焼  | 擂鉢   |         |       | (9.7)     |            | 17c中葉         |
|   |     | 411  |       |        | 擂鉢   |      |         |       |           |            | 17c初頭         |
|   |     | 412  | T 5   |        | 美濃焼  | 折腰菊皿 | 11.4    | 6.6   | 1.9       |            | 16c末          |
|   |     | 413  | T 2   |        | 白磁   | 碗    |         |       | (2.5)     | 碗IV類       | 11c後半~<br>12c |
|   |     | 414  | 南門・中門 |        | 染付   |      |         |       |           |            | 18c中葉~<br>後葉  |
|   |     | 415  | 金堂    |        | 瓦質土器 | 火鉢   |         |       |           |            |               |

表16 石製品觀察表

| 章 | 図番号 | 掲載番号 | 出土地区  | 遺構・土層名 | 器種    | 計測値(cm) |        |       | 石材      | 備考      |
|---|-----|------|-------|--------|-------|---------|--------|-------|---------|---------|
|   |     |      |       |        |       | 最大長     | 最大幅    | 最大厚   |         |         |
| 2 | 3   | 8    | 南門・中門 |        | 有舌尖頭器 | (6.1)   | 2.7    | 0.7   | サヌカイト   |         |
|   |     | 9    |       |        | 石鑿    | 2.5     | (1.4)  | 0.3   | サヌカイト   |         |
|   |     | 10   | 金堂    |        | 石錐    | (3.5)   | (4.5)  | 1.2   | 流紋岩     |         |
|   |     | 11   | 講堂    |        | 砥石    | (6.2)   | 2.9    | 1.1   | 泥岩(貼板岩) |         |
| 4 | 230 | 424  | T 5   | 雨落ち講7  | 石鏡    | (6.4)   | (5.2)  | 1.5   | 粘板岩     | 凹葉形     |
|   |     | 425  | 講堂    |        | 石鏡    | (6.3)   | (3.8)  | 2.4   | 流紋岩     |         |
|   |     | 426  | T 17  |        | 砥石    | (6.2)   | (5.1)  | (2.5) | アブライト   |         |
|   |     | 427  | 金堂    |        | 凝灰岩片  | (7.2)   | (7.5)  | (3.5) |         | ノミ状の加工痕 |
|   |     | 428  | 講堂    |        | 石臼    | (15.8)  | (13.0) | 7.1   | 角礫凝灰岩   | 被熱      |
|   |     | 429  | T 19B |        | 石鏡    |         |        |       | 滑石      |         |

表17 金属製品観察表

| 章 | 団番号 | 掲載番号 | 出土地区          | 遺構・土層名 | 器種   | 計測値 (cm) |        |       | 材質 | 備考                     |
|---|-----|------|---------------|--------|------|----------|--------|-------|----|------------------------|
|   |     |      |               |        |      | 最大長      | 最大幅    | 最大厚   |    |                        |
| 3 | 51  | 85   | 雨落ち溝4<br>北面回廊 | 雨落ち溝4  | 鉄釘   | (9.1)    | 0.5    |       | 鉄  | 先端部欠損                  |
|   |     | 86   |               |        | 鉄釘   | 14.2     | 1.0    |       | 鉄  | 完形                     |
|   |     | 87   |               |        | 鉄釘   | (17.6)   | 1.2    |       | 鉄  | 頭部、先端部欠損               |
|   |     | 88   |               |        | 鉄釘   | (16.7)   | 1.7    |       | 鉄  | 先端部欠損                  |
|   |     | 89   |               |        | 鉄釘   | (11.8)   | 0.7    |       | 鉄  | 先端部欠損                  |
|   |     | 90   |               | 北面回廊   | 鉄釘   | (12.1)   | 1.1    |       | 鉄  | 先端部欠損                  |
|   |     | 91   |               |        | 鉄釘   | (19.2)   | 1.1    |       | 鉄  | 先端部欠損                  |
|   |     | 92   |               |        | 鉄釘   | 19.9     | 2.9    |       | 鉄  | 完形                     |
|   |     | 93   |               |        | 唄金具  | 11.3     | (8.7)  |       | 鉄  | 一部剥付著                  |
|   |     | 94   |               |        | 座金   | 9.0      |        | 0.4   | 鉄  | 方形孔1.8×1.3 花弁状         |
| 3 | 52  | 95   | 北面回廊          | 北面回廊   | 建築金物 | 7.6~7.9  | 4.3    | 0.2   | 鉄  | 円孔3個                   |
|   |     | 96   |               |        | 鉄錠   | (57.7)   | (3.3)  |       | 鉄  |                        |
|   |     | 97   |               |        | 鐵帽   | (6.7)    | (5.7)  | 0.2   | 鉄  | 欠損 1孔あり                |
|   |     | 98   |               |        | 建築金物 | (8.5)    | (3.9)  | 0.2   | 鉄  | 欠損                     |
|   |     | 99   |               |        | 劍状   | (11.8)   | (1.4)  | 0.5   | 鉄  | 欠損                     |
|   |     | 100  |               | 北面回廊   | 建築合物 | (8.7)    | 2.4    | 0.2   | 鉄  | 欠損 1孔・1鍔あり             |
|   |     | 101  |               |        | 建築金物 | (11.5)   | (3.6)  | 0.2   | 鉄  | 欠損 2鍔あり                |
|   |     | 102  |               |        | 銅板   | (36.5)   | (28.8) | 0.7   | 銅  |                        |
|   |     | 108  |               |        | 劍塊   | 5.2      | 4.8    | 2.8   | 銅  |                        |
|   |     | 234  |               |        |      |          |        |       |    |                        |
| 4 | 229 | 421  | 講堂            | P-12   | 銅印   | 3.1      | 3.1    | 高さ3.0 | 銅  | 「常」苦鍼・鍔孔径0.5cm・4~5条の刻線 |
|   |     | 422  |               |        | 銅版   | (2.3)    | (1.6)  | 0.1   | 銅  | 薄板                     |
|   |     | 423  |               |        | 銅鏡   | 2.45     |        | 0.1   | 銅  | 「至和通宝」北宋銘              |

表18 土製品観察表

| 章 | 図版<br>号 | 掲載<br>番号 | 出土地区           | 遺構・土器<br>名 | 器種     | 計測値 (cm) |       |       | 色調 | 質感   | 時期                          | 備考 |
|---|---------|----------|----------------|------------|--------|----------|-------|-------|----|------|-----------------------------|----|
|   |         |          |                |            |        | 最大径      | 最大幅   | 最大厚   |    |      |                             |    |
| 3 | 60      | 135      | 北面回廊           | 壁土         | (9.8)  | (11.2)   | 7.3   | 橙     | 良  | ~12c | 白色土・丸太材痕                    |    |
|   |         | 136      |                | 壁土         | (13.8) | (8.8)    | 6.4   | 橙     | 良  | ~12c | 白色土・木材痕                     |    |
|   |         | 137      |                | 壁土         | (10.7) | (8.0)    | 3.9   | 灰白    | 良  | ~12c | 白色土                         |    |
|   |         | 138      |                | 壁土         | (9.8)  | (7.9)    | 5.2   | 灰白    | 良  | ~12c | 白色土                         |    |
|   |         | 139      |                | 壁土         | (10.1) | (9.6)    | 4.1   | 橙     | 良  | ~12c | 角材痕                         |    |
|   |         | 140      |                | 壁土         | (7.9)  | (6.6)    | 3.8   | 浅黄橙   | 良  | ~12c | 角材痕                         |    |
|   | 61      | 141      | 北面回廊           | 壁土         | (8.9)  | (6.4)    | 4.4   | 黄橙    | 良  | ~12c | 角材痕                         |    |
|   |         | 142      |                | 壁土         | (9.0)  | (7.9)    | 5.5   | 橙     | 良  | ~12c | 角材痕                         |    |
|   |         | 143      |                | 壁土         | (13.5) | (12.0)   | 10.3  | 橙     | 良  | ~12c |                             |    |
|   | 62      | 144      | 講堂             | 壁土         | (6.8)  | (5.2)    | 2.7   | 灰白    | 良  | 室町   | 白色土                         |    |
|   |         | 145      |                | 壁土         | (6.5)  | (5.2)    | 2.6   | 灰白    | 良  | 室町   | 白色土                         |    |
|   |         | 146      |                | 壁土         | (6.0)  | (7.0)    | 2.2   | にぶい黄橙 | 良  | 室町   | 白色土・木材痕                     |    |
|   |         | 147      |                | 壁土         | (15.0) | (16.5)   | 10.1  | 灰     | 良  | 室町   |                             |    |
|   | 106     | 220      | T 17<br>雨落ち溝17 | 羽口         | (8.2)  | 5.1      | 1.7   | にぶい黄橙 | 良  |      | 外径5.1                       |    |
|   |         | 221      |                | 羽口         | (5.6)  | (3.3)    | 1.4   | 橙     | 良  |      |                             |    |
|   |         | 222      |                | 不明         | (5.6)  | (4.3)    | (3.2) | にぶい黄橙 | 良  |      | 外面平滑                        |    |
|   |         | 223      |                | 鉢型         | (7.2)  | (7.4)    | 4.1   |       |    |      |                             |    |
|   |         | 224      |                | 鉢型         | (4.1)  | (5.4)    | 1.9   |       |    |      |                             |    |
|   | 107     | 225      | T 17<br>雨落ち溝17 | 炉壁         | (15.9) | (17.7)   | 4.8   |       |    |      | 内面/赤・黒色・気泡 粘土帶痕跡            |    |
|   |         | 226      |                | 炉壁         | (13.8) | (20.1)   | 2.8   |       |    |      | 内面/赤色・気泡 外面/灰色              |    |
|   |         | 227      |                | 炉壁         | (9.3)  | (13.7)   | 5.9   |       |    |      | 内面/赤色 通風孔あり                 |    |
|   | 108     | 228      | T 17<br>雨落ち溝17 | 炉壁         | (11.8) | (9.5)    | 4.7   |       |    |      | 内面/黒色 黄褐色・錫付着物              |    |
|   |         | 229      |                | 炉壁         | (12.5) | (20.6)   | 2.7   |       |    |      | 円筒形 内面/黒紅色・気泡 滅褐色の付着物 外面/灰色 |    |
|   |         | 230      |                | 炉壁         | (6.0)  | (18.5)   | 5.7   |       |    |      | 内面が外方に延張して口縁部 黄褐色・錫の付着物・気泡  |    |
|   |         | 231      |                | 炉壁         | (10.3) | (18.8)   | 2.5   |       |    |      | 内面/黒灰色 赤色・橙褐色の付着物 炉底?       |    |
|   |         | 232      |                | 炉壁         | (5.0)  | (7.1)    | 3.2   |       |    |      | 内面/灰色 指さサ工                  |    |
|   |         | 233      |                | 炉壁         | (6.3)  | (5.8)    | 2.0   |       |    |      | 内面/灰色 指さサ工                  |    |
|   | 4       | 114      | T 11<br>カマド I  | 土雞         | 2.8    | 0.9      | 0.8   | 橙     | 良  |      | 孔径0.2cm                     |    |
|   |         | 263      |                | 瓦塔?        | (4.4)  | (2.8)    | 1.8   | 浅黄橙   | 良  |      |                             |    |
|   |         | 416      |                | 瓦塔?        | (4.9)  | (4.9)    | 1.7   | にぶい黄橙 | 良  |      |                             |    |
|   |         | 417      |                | 瓦塔?        | (4.9)  | (3.4)    | 1.8   | 灰     | 良  |      | 窓                           |    |
|   |         | 418      |                | 瓦塔?        | (4.9)  | (5.7)    | 4.6   | にぶい橙  | 良  |      | 突唇・布目                       |    |
|   |         | 419      |                | 不明         | (5.7)  |          | 4.9   |       |    |      |                             |    |
|   |         | 420      |                | 羽口         | (6.9)  | (7.3)    | 2.9   |       |    |      |                             |    |

表19-1 新旧造構名称对照表

| 地区名    | 造構名    | 旧地区名 | 旧造構名     | 地区名   | 造構名    | 旧地区名     | 旧造構名            |
|--------|--------|------|----------|-------|--------|----------|-----------------|
| 金堂     | 礎石1    | G1区  | 礎石1      | 南門    | 礎石70   | S4区      | 礎石4             |
| 金堂     | 礎石2    | G1区  | 礎石4      | 南門    | 礎石71   | S4区      | 礎石5             |
| 金堂     | 礎石3    | G2区  | 礎石2      | 南門    | 礎石72   | S4区      | 礎石6             |
| 金堂     | 礎石4    | G1区  | 礎石3      | 僧房    | 礎石73   | T7       | No.5土壙(住穴)      |
| 金堂     | 礎石5    | G1区  | 礎石4      | 僧房    | 礎石74   | T7       | No.4土壙(住穴)      |
| 金堂     | 礎石6    | G2区  | 礎石5      | 僧房    | 礎石75   | S49tr.T7 | -               |
| 金堂     | 礎石7    | G2区  | 礎石6      | 僧房    | 礎石76   | S49tr.T7 | -               |
| 金堂     | 礎石8    | G2区  | 礎石7      | 僧房    | 礎石77   | T7       | No.8土壙          |
| 金堂     | 礎石9    | G2区  | 礎石8      | 僧房    | 礎石78   | T7       | No.7土壙          |
| 金堂     | 礎石10   | G2区  | 礎石9      | 僧房    | 礎石79   | T7       | No.3土壙(住穴)      |
| 金堂     | 礎石11   | G1区  | 礎石10     | 僧房    | 礎石80   | T8       | 礎石3             |
| 金堂     | 礎石12   | G1区  | 礎石11     | 僧房    | 礎石81   | S49tr.T8 | -               |
| 金堂     | 礎石13   | G2区  | 礎石12     | 僧房    | 礎石82   | S49tr.T8 | -               |
| 金堂     | 礎石14   | G2区  | 礎石13     | 僧房    | 礎石83   | T8       | 礎石4             |
| 金堂     | 礎石15   | G2区  | 礎石14     | 僧房    | 礎石84   | T8       | 礎石5             |
| 講堂     | 礎石16   | K5区  | No.24土壤  | 僧房    | 礎石85   | T8       | 礎石6             |
| 講堂     | 礎石17   | K2区  | 拔P-9     | 僧房    | 礎石86   | T8       | 礎石7             |
| 講堂     | 礎石18   | K2区  | 拔P-8     | 僧房    | 礎石87   | T8       | 礎石8             |
| 講堂     | 礎石19   | K5区  | No.23土壤  | 塔     | 礎石88   | T0       | 礎石1             |
| 講堂     | 礎石20   | K2区  | 拔P-1     | 塔     | 礎石89   | T0       | 礎石9             |
| 講堂     | 礎石21   | K2区  | 拔P-4     | 塔     | 礎石90   | T0       | 礎石8             |
| 講堂     | 礎石21-a | K2区  | -        | 塔     | 礎石91   | T0       | 心壙              |
| 講堂     | 礎石22   | K5区  | No.18土壤  | 塔     | 礎石92   | T0       | 礎石2             |
| 講堂     | 礎石23   | K2区  | 拔P-2     | 塔     | 礎石93   | T0       | 礎石7             |
| 講堂     | 礎石24   | K2区  | 拔P-5     | 塔     | 礎石94   | T0       | 礎石3             |
| 講堂     | 礎石24-a | K2区  | -        | 塔     | 礎石95   | T0       | 礎石4             |
| 講堂     | 礎石25   | K4区  | No.42土壤  | 塔     | 礎石96   | T0       | 礎石5             |
| 講堂     | 礎石26   | K4区  | 拔P-2 抜き跡 | 塔     | 礎石97   | T0       | 礎石6             |
| 講堂     | 礎石27   | K5区  | No.19土壤  | 金堂    | 雨落ち溝1  | G2区      | No.4・6・10雨落ち    |
| 講堂     | 礎石28   | K2区  | 拔P-3     | 講堂    | 雨落ち溝2  | K1-K5区   | No.39溝 No.29雨落溝 |
| 講堂     | 礎石29   | K2区  | -        | 北面回廊  | 雨落ち溝3  | K5区      | No.45雨落溝        |
| 講堂     | 礎石30   | K4区  | 西面礎石     | 西面回廊  | 雨落ち溝4  | K2区-T4   | No.33溝 No.1雨落溝  |
| 講堂     | 礎石31   | K4区  | 東面礎石     | 講堂    | 雨落ち溝5  | K1区      | -               |
| 講堂     | 礎石32   | K1区  | P-1      | 講堂    | 雨落ち溝6  | K1区      | -               |
| 講堂     | 礎石33   | K1区  | P-2      | 西面回廊  | 雨落ち溝7  | T5       | No.1溝           |
| 講堂     | 礎石34   | K1区  | P-3      | 西面回廊  | 雨落ち溝8  | T5       | No.2溝           |
| 講堂     | 礎石35   | K1区  | P-4      | 東面回廊  | 雨落ち溝9  | T6       | -               |
| 講堂     | 礎石36   | K1区  | P-5      | 中門    | 雨落ち溝10 | S3区      | No.2雨落溝         |
| 講堂     | 礎石37   | K1区  | P-6      | 西面回廊  | 雨落ち溝11 | S2区      | No.3雨落溝         |
| 講堂     | 礎石38   | K1区  | P-7      | 南門    | 雨落ち溝12 | S4区      | No.8雨落溝         |
| 北面回廊西側 | 礎石39   | T4   | -        | 南門    | 前落ち溝13 | S49tr.   | T-6             |
| 北面回廊西側 | 礎石40   | T4   | -        | 南面回廊  | 雨落ち溝14 | S5区      | No.6雨落溝         |
| 北面回廊西側 | 礎石41   | T4   | -        | 僧房    | 雨落ち溝15 | S49tr.   | -               |
| 北面回廊西側 | 礎石42   | T4   | -        | 僧房    | 雨落ち溝16 | T8       | -               |
| 北面回廊西側 | 礎石43   | K2区  | -        | 東面梁架  | 雨落ち溝17 | T17・19B  | No.3溝           |
| 北面回廊西側 | 礎石44   | K2区  | -        | 東面梁架  | 雨落ち溝18 | T19B     | -               |
| 北面回廊西側 | 礎石45   | K2区  | -        | 北面梁架  | 雨落ち溝19 | T11・13   | No.1溝 No.2溝     |
| 北面回廊東側 | 礎石46   | K5区  | 礎石1      | 北面梁架  | 雨落ち溝20 | T13      | No.5溝           |
| 北面回廊東側 | 礎石47   | K5区  | 礎石2      | 金堂    | 土壙1    | G2区 T5   | 土壙              |
| 北面回廊東側 | 礎石48   | K5区  | 礎石3      | 講堂    | 土壙2    | K2区      | No.16土壙         |
| 西面回廊   | 礎石49   | T5   | 礎石1      | 講堂    | 土壙3    | K4区      | No.50土壙         |
| 西面回廊   | 礎石50   | T5   | 礎石2      | 講堂    | 土壙4    | K4区      | No.51土壙         |
| 西面回廊   | 礎石51   | T6   | 礎石3      | 講堂    | 土壙5    | K4区      | P11土壙           |
| 東面回廊   | 礎石52   | T6   | 礎石3      | 講堂    | 土壙6    | K4区      | P11             |
| 東面回廊   | 礎石53   | T6   | 礎石2      | 講堂    | 土壙7    | K5区      | No.32土壙         |
| 東面回廊   | 礎石54   | S1区  | 礎石1      | 講堂    | 土壙8    | K5区      | No.36土壙         |
| 中門     | 礎石55   | S2区  | 中門礎石1    | 講堂    | 土壙9    | K5区      | No.48土壙         |
| 中門     | 礎石56   | S2区  | 中門礎石2    | 講堂    | 土壙10   | K5区      | No.26土壙         |
| 中門     | 礎石57   | S2区  | 中門礎石3    | 講堂    | 土壙11   | K5区      | No.25土壙         |
| 中門     | 礎石58   | S2区  | 中門礎石4    | 講堂    | 土壙12   | K5区      | No.27土壙         |
| 中門     | 礎石59   | S2区  | 中門礎石5    | 西面回廊  | 土壙13   | T5       | No.3土壙          |
| 中門     | 礎石60   | S2区  | 中門礎石6    | 西面回廊  | 土壙14   | T5       | No.4土壙          |
| 中門     | 礎石61   | S2区  | 中門礎石7    | 西面回廊  | 土壙15   | T5       | No.5土壙          |
| 南面回廊   | 礎石62   | S1区  | 回廊礎石1    | 西面回廊  | 土壙16   | T5       | No.6土壙          |
| 南面回廊   | 礎石63   | S2区  | 回廊礎石2    | 西面回廊  | 土壙17   | T5       | No.8土壙          |
| 南面回廊   | 礎石64   | S2区  | 回廊礎石3    | 南門・中門 | 土壤8    | S2・3区    | No.10溝(土壤)      |
| 南面回廊   | 礎石65   | S2区  | 回廊礎石4    | 南門・中門 | 土壤9    | S4区      | No.11土壙         |
| 南面回廊   | 礎石66   | S2区  | 回廊礎石5    | 僧房    | 土壤20   | T8       | No.6土壙          |
| 南門     | 礎石67   | S4区  | 礎石1      | 塔     | 土壤21   | T0       | -               |
| 南門     | 礎石68   | S4区  | 礎石2      | 土壤22  | T0     | No.2へこみ  |                 |
| 南門     | 礎石69   | S4区  | 礎石3      | T10   | 土壤23   | T10      | No.2土壙          |

表19-2 新旧遺構名稱對照表

| 地区名    | 遺構名    | 旧地区名  | 旧遺構名      | 地区名   | 遺構名  | 旧地区名  | 旧遺構名    |
|--------|--------|-------|-----------|-------|------|-------|---------|
| 北面回廊西側 | 炉1     | K 2 区 | No.41燒土面  | 金堂    | 溝3   | G 2 区 | No.2溝   |
| 北面回廊西側 | 炉2     | K 2 区 | -         | 講堂    | 溝4   | K 3 区 | No.10溝  |
| 北面回廊西側 | 炉3     | T 4   | No.6 炉    | 講堂    | 溝5   | K 3 区 | No.10溝  |
| 北面回廊西側 | 炉4     | T 4   | No.5 炉    | 講堂    | 溝6   | K 3 区 | No.11溝  |
| 北面回廊西側 | 炉5     | K 5 区 | No.49炉    | 講堂    | 溝7   | K 3 区 | No.9溝   |
| 西面回廊   | 炉6     | T 5   | No.7 炉    | 講堂    | 溝8   | K 5 区 | No.30溝  |
| 北面塗地   | カマツ1   | T 11  | No.3 塗土面  | 講堂    | 溝9   | K 1 区 | No.43溝  |
| 金堂     | P - 1  | G 2 区 | No.15柱穴   | 講堂    | 溝10  | K 4 区 | No.52溝  |
| 金堂     | P - 2  | G 2 区 | No.9 柱穴   | 講堂    | 溝11  | K 3 区 | No.4溝   |
| 金堂     | P - 3  | G 2 区 | No.14柱穴   | 講堂    | 溝12  | K 3 区 | -       |
| 金堂     | P - 4  | G 1 区 | No.16柱穴   | 講堂    | 溝13  | K 5 区 | No.17溝  |
| 講堂     | P - 5  | K 3 区 | P - 3     | 講堂    | 溝14  | K 5 区 | No.37溝  |
| 講堂     | P - 6  | K 3 区 | P - 4     | 講堂    | 溝15  | K 5 区 | No.20溝  |
| 講堂     | P - 7  | K 3 区 | P - 5     | 講堂    | 溝16  | K 1 区 | No.2溝   |
| 講堂     | P - 8  | K 3 区 | P - 6     | 東面回廊  | 溝17  | T 6   | -       |
| 講堂     | P - 9  | K 3 区 | P - 1 · 2 | 南門・中門 | 溝18  | S 4 区 | No.9溝   |
| 講堂     | P - 10 | K 5 区 | P - 2     | 塔     | 溝19  | T 6   | No.1溝   |
| 南門・中門  | P - 11 | S 4 区 | 塗地上面の柱穴   | T 16  | 溝20  | T 16  | No.4溝   |
| 僧房     | P - 12 | T 8   | P - 6     | T 16  | 溝21  | T 16  | No.3溝   |
| 僧房     | P - 13 | T 8   | P - 7     | T 18  | 溝22  | T 18  | No.1溝   |
| 僧房     | P - 14 | T 8   | P - 8     | T 11  | 溝23  | T 11  | -       |
| 僧房     | P - 15 | T 8   | P - 12    | T 11  | 溝24  | T 11  | No.2溝   |
| 僧房     | P - 16 | T 8   | P - 3     | T 13  | 溝25  | T 13  | No.1溝   |
| 僧房     | P - 17 | T 8   | P - 4     | T 2   | 溝26  | T 2   | No.1溝   |
| 食堂     | 石列1    | G 1 区 | 石數        | T 3   | 溝27  | T 3   | -       |
| 北面回廊東側 | 石列1    | K 5 区 | No.46石列   | T 19  | 溝28  | T 19  | No.4溝   |
| 塔      | 石列2    | T 0   | 石列        | T 19  | 溝29  | T 19  | No.3溝   |
| 北面塗地   | 石列3    | T 13  | No.6 石列   | T 19  | 溝30  | T 19  | No.2溝   |
| 塔      | 集石1    | T 0   | 石列        | 講堂    | 井戸1  | K 2 区 | No.8 井戸 |
| 北面回廊西側 | 积水遺構1  | K 2 区 | No.47丸瓦列  | T 9   | たわみ1 | T 9   | No.1たわみ |
| 金堂     | 溝1     | G 1 区 | -         | 中門    | 池1   | S 1 区 | -       |
| 設置     | 溝2     | G 2 区 | No.11溝    |       |      |       |         |



1 金堂全景（北東から）



2 講堂全景（南西から）

图版 2



南門・中門調査区全景（上が北）



1 T4 北面回廊（南西から）



2 T4 北面回廊南側基壇斜面 屋根瓦の倒壊状況（南から）

図版4



1 T5 西面回廊（南西から）



2 塔（上が北）



1 金堂  
石敷 1 (北から)



2 塔 基壇版築断面  
礎石89・90  
(南東から)



3 金堂  
基壇版築断面 (東から)  
中位の黒色土の厚さ 5 cm

図版6



1 講堂 瓦出土状況（南から）



2 北面回廊 銅板出土状況（西から）



1 北面回廊および講堂西端  
(南西から)



2 北面回廊 炉 1  
(北西から)



3 北面回廊 炉 2  
(西から)

図版 8



1 北面回廊 炉 3  
(西から)



2 北面回廊 炉 5  
(南西から)



3 T 5 西面回廊  
炉 6 (西から)



1 遺跡遠景（東から）



2 遺跡全景（南から）



1 遺跡の現況  
塔付近  
(南から)



2 遺跡の現況  
寺域北端  
(北から)



3 遺跡の現況  
寺域西側  
(南西から)



1 金堂周辺全景（上が北）



2 金堂全景（上が北）

図版12



1 金堂（南西から）



2 金堂  
礎石 9・10・14・15  
(北西から)



3 金堂 础石 5 (東から)